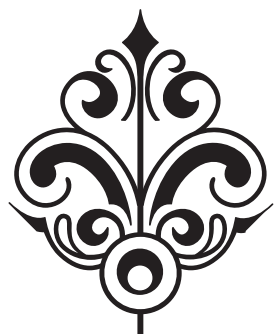


有益な知識



フセイン・ヒルミ・ウシュック



有益な知識

フセイン・ヒルミ・ウシュック

1. Baskı : Mart 2022

Baskı ve Cilt

Çınar Matbaacılık

Yüzyıl Mah. Matbaacılar Cad. Atahan No: 34 Kat: 5

Bağcılar / İSTANBUL

Sertifika No : 45103

Tel: (0212) 628 96 00

www.hakikatbooks.com

有益な知識

前書き

ビスミッターという言葉でこの本を始めましょう。

アッラーの名は最善のシェルターです。

その恵みがはかりしれない、

慈悲深く許しを愛されるアッラーなのです。

アッラーはこの世界における すべての人々に慈悲をかけられ、有益なものを創造なされ、送られる方です。この世界に在る間に悔悟した信者たちの罪が どれほど大きなものであったとしても、来世においてそれらは必ず許されます。悔悟をする前に死んでいった 、地獄に行くべき信者のうち、アッラーは望まれる者を許されて 天国に至らされます。すべての生命体を創造なされ、存在しているものをあらゆる瞬間において存在する状態で留められ、すべてを恐れ、恐怖から守られるのはただそのお方のみです。このようなアッラーの誉れ高い御名に庇護を求めつつ、この書物を書き始めます。

アッラーに感謝します。アッラーの使徒に祝福と平安がありますように。その清らかなご家族と公正で誠実な友人ら（アッラーの祝福あれ）のすべてのためにドゥアーします。

「この世界は戦いである」という言葉は無意味なものではありません。夏の激しい暑さ、冬の雪の日の凍える寒さのような自然の力と戦っているのです 。敵と戦うためには、まず敵を知ることが必要です。そうでなければ、自分を守ろうとする間に隣人や親友に害を与えてしまうかもしれません。人が気持ちよく生きるために必要なものを、「財産、資産」と呼びます。針、糸から家、マンションまですべてが財産です。アッラーは一部の人々や集団に、一部の財産を用いることを許されました。この財産は彼の妻、

子供たち、隣人、親せき等、彼にとって役立つものです。皆、財産や 資産をアッラーが許された範囲で用います。過度に利用すること、他者の財産を利用することは決して許されることではありません。「財産、資産を誇ってはいけない、『私のような者はいるか』と言ってはいけない。向かい風が吹き、麦わらのように吹き飛ばされてしまう」という言葉はよく知られています。

ハラームの道からもたらされた財産や 資産は 「世界」と呼ばれます。この世界、すなわち禁じられたもの、避けるべきものは有害です。あるものが有益もしくは有害であることは、書物によって異なる形で説かれています。これらのうち最も正しいものは、アッラーによる識別です。アッラーの命令をファルド「義務」、禁じられたことをハラーム「禁忌」と呼びます。預言者ムハンマドの命令を「スンナ」、禁じられたことを「マクルーフ」と呼びます。これら4つを「イスラーム」といいます。イスラームの定めるところを好み、気に入ることは、心に信仰があることのしるしです。スンナすら気に入らない人の信仰は失われ、カーフィル「不信心者」となります。信仰を持っているのにイスラームの定めたものに従わない人は、ファースク「罪人」と呼ばれます。従わないことは「罪」になります。カーフィルは地獄で永遠に焼かれます。ファースクはその罪に応じて焼かれ、その後天国に連れていかれます。信仰があり、イスラームに従う人を「誠実なしもべ」と呼びます。山や砂漠で暮らし、教えのこと、イスラームのことを何も知らない人は、カーフィルや ファースクにはなりません。最後の審判で裁かれた後、天国にも地獄にもいかず、動物のようになくなります。神の教えのうち、イスラームは 大きな幸福の要因となる とても大きな恵みです。この恵みの価値を理解しない者はその罰を受けます。

ムスリムは皆、日に五回「礼拝」をしなければなりません。この礼拝は心に信仰があることのしるしです。この礼拝を信じない者は「カーフィル」となります。損なわれてしまった神からの教えを信じるカーフィルは、「啓典の民」、すなわち「啓典を持つカーフィル」と呼ばれます。これを信じていないカーフィルは「多神教徒」と呼ばれます。カーフィルのうち、ユダヤ教徒の一部とキリスト教徒の多くは多神教徒です。今日では多神教徒ではないカーフィルはほとんどいません。預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）のいくつかの言葉を誤って理解し、それを説くようなムスリムを、「ビドゥアを持つムスリム」と呼びます。シーア派とワッハーブ派はビドゥアを持つムスリムです。彼らのうち、預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）の一つの言葉すら信じない者はカーフィルとなります。預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）の言葉を全く変えることなく信じているムスリムを「スンナ派」である真のムスリムと呼びます。この真のムスリムたちの長は、イマーム・アザーム・アブー・ハニーファ・ヌマン・ビン・サービットです。スンナ派の信仰を持つ真のムスリムは、イバーダのやり方において四つの法学派に分かれています。「ハナフィ、シャーフィー、マーリキー、ハンバリー」この四つの法学派は互いを兄弟と見なします。互いに相手の後ろで礼拝を行うことができます。この真のムスリムを、逸脱したビドゥアを持つ人々と混同してはいけません。ビドゥアを持つ人々はイスラームを内部から崩壊させようとしています。アッラーに感謝すべきことに、現在、世界のムスリムの多くは正しい道である「スンナ派」に属します。逸脱した道にあるワッハーブ派やシーア派は減少しているのです。

ムスリムである人々は三つの派に分類されます。

一つ目は、教友（サハーバ）たちの道にある真のムスリムです。彼らは「スンナ派」、「スンニー」、「地獄から救われた派」と呼ばれます。二つ目は、教友の敵である者です。彼らを「ラーフィズィ」、「シーア派」、そして「逸脱した派」と呼びます。三つめは、スンナ派とシーア派に敵対している者です。彼らを「ワッハーブ派」もしくは「ナジュド派」と呼びます。これらは最初にアラビアのナジュドの町で登場したからです。彼らは「憎悪される派」とも呼ばれます。なぜなら彼らがムスリムを多神教徒と見なしていた、ということが「審判の日と来世」及び「永遠の幸福」という書物で書かれているためです。ムスリムをカーフィルと呼ぶ者を預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）は呪われていました。ムスリムをこの三つの派に分類させたのはユダヤ教徒とイギリス人です。

イスラームの教えの信条、命令、禁止事項を正しく伝える何千もの尊い本が書かれました。これらの多くは外国語に翻訳され、各国に広められています。この正しい書物を書いたイスラーム学者を、「スンナの道にある学者」（アッラーの慈悲がありますように）と呼びます。これに対し、自分の都合だけを考え、近視眼的な人、そして地位やお金によってイギリス人に売られた愚かな人たちは、宗教を変容させ、ムスリムを欺こうと努めました。ムスリムと教えを持たない人との間のこの戦いは、どの世紀においても起こってきたし、最後の審判まで起こり続けるでしょう。アッラーがこのことを定めておられたのです。

スンナ派の学者たちは、全ての知識を教友たちから学びました。教友たちはアッラーの使徒からその知識を得ました。教友はイスラームを伝えるために遠方の国々へ散っていったため、本を書く時間はありませんでした。200 年以上たって、学者たちの中に、宗教的知識に自分の見解や

当時の科学知識、古代哲学を混同する者が出てきました。これによって72 もの逸脱した「ビドゥアの派」が生じました。ビドゥアである派の発生には、ユダヤ教徒とイギリス人が大きな影響を及ぼしています。

どの法学派に属していても、我欲に従い心が逸脱した人は地獄に行きます。ムスリムは全て、我欲を清めるため、すなわち我欲やシャイターンから、そして悪い仲間、有害な逸脱した書物からもたらされる教えへの憎悪や罪から救われるよう、「アスタグフルラー」と唱えるべきです。イスラームの規律に従う人のドゥアーは必ず認められます。礼拝を行わない人、頭を覆っていない、体の覆うべき部分を覆っていない女性を見る者、ハラームであるものを飲み食いする人は、イスラームの規律に従っていないことが明らかです。彼らのドゥアーは受け入れられません。

ムスリムは二種類に区分できます。ハワース（学のある者）とアワーン（無知である者）です。トルコ語の「ドゥッル・ヤクター」という書物では「アワーンとは、学問や文学の規則、形式を知らない者である。彼らはイスラーム法やファトゥワーの本を理解できない。彼らが信仰や崇拝行為についての情報をスンナ派の学者に尋ねて学ぶことはファルド（義務）である。学者たちも、言葉、説話、文章によって、まず信仰について、それから教えの基本である五つのイバーダを教えることがファルドである」と書かれています。「ザヒーラ」と「タタルハーニエ」という本では、信仰の条件とスンナ派の信条について教えることは何よりも必要であるとされています。このために、偉大な学者であり、内外の知識の専門家であったサイード・アブドゥルハキーム師¹（アッラーの慈悲がありますように）は死

¹ サイード・アブドゥルハキーム師は 1362 年 [西暦 1943 年] にアンカラで死去しました。

の直前に、「イスタンブールのモスクでは30年近く、ただ信仰とスンナ派の信条、そしてイスラームの素晴らしい道徳を説明しようと努めてきた」と言ったのでした。だから私たちもすべての本を通して、スンナ派の信条、イスラームの素晴らしい道徳が、人々への善行と国家への奉仕、支援をすることが必要である、というものであることを教えています。教えにおいて無知である者、法学派に従わない者による、国家に対して挑発的で、兄弟同士を敵対させるような、分裂させるような文章を、私たちは認めません。預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）は、「**教えは剣の影の下にある**」と言われ、ムスリムが国家や法の庇護のもとで安心して生きることができることを伝えられました。国家が強力であれば、安全や安らぎは増します。ヨーロッパやアメリカのようなカーフィルの国で安全に暮らし、宗教上の義務を自由に果たしているムスリムも、自分たちに自由を与える政府や法律に対立するべきではありません。扇動や分裂主義のための道具となってしまうのはいけないのです。スンナ派の学者たちは、このようにふるまうことを命じているのです。四大法学派のどれか一つの学者のことを「**スンナ派の学者**」と呼びます。

注意：世界各地に様々な光景があります。人はそれをいくから見ても飽きることはありません。これらはひとりでの存在を始めたのでしょうか？すべての存在は常に計算されており、秩序が保たれており、あたかも全てが同じ機械から出てきたかのようです。すべてが物理、化学、生物学、天文学に基づいています。殊に、人の本質における均衡、秩序といったものや、私たちの体内にある器官が機械の一部のように一体となって働くことは、それを理解する人に驚きを与えてきました。有名なイギリスのカーフィルであるダーウィンですら、「目の構造における調和、繊細さを考

えるごとに驚いて我を忘れる」と語っています。すべての被造物は互いに接触しない規律に従っています。宗教を信じる人は、これらを創造し、熟知する**創造主**が存在する、といっているのです。どの教えも信じないカーフィルは、すべてが適当に、偶然存在したのだといいます。創造主は預言者たちを通して知識をも送られます。「**すべてを私が創造した。あなた方皆の種は私である。私を信じるのなら、あなた方を天国に入れよう。無数の恵みを与えよう。無限の喜びと幸福の中で生きる。私の預言者たちを信じない者は地獄で永遠に焼く**」と仰せられるのです。天国と地獄がなければ、預言者たちを信じる者が騙されているのであれば、それでも彼らは何の害も受けません。しかし、預言者たちの言葉は真実であるため、信じない人、その言葉を変容させる人は無限に焼かれるのです。

尊い我々の祖国のあらゆる場所では、宗教者たちがこの正しい道であるスンナ派を広め、守ろうとしたことが感謝とともに読み取ることができ ます。スンナ派の学者たちの書物を読んだことのない、あるいは理解できない無知な者たちが血迷って話したこと、書いたものが読まれてきたとしても、これらは人々の健全な信仰と、彼らが互いを兄弟のように愛するということの前で溶け去ってしまい、その筆者の無知さと哀れさを露呈する以外の何の影響も及ぼさなかったのです。

ムスリムを分裂させ、破壊しようとする道にある人たちは、スンナ派の学者や神秘主義の偉大な先人たち（アッラーの祝福がありますように）に染み をつけようと努めてきました。スンナ派の学者たちは彼らに必要な返答を与えてきました。預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）がクルアーンから見出した正しい意味が変えられてしまわないよう守ったのです。私たちもこの本に

において、正しい道と逸脱した道を区別して伝えています。尊い読者たちが、常識や清らかな良心でこの本をよく理解し、公正な判断を下し、正しい道を示す私たちの本にしっかりと結びつくこと、虚り、中傷、逸脱といったものを避け、それによって無限の災厄に陥ることから守られるよう、アッラーにドゥアーします。この本の一部で、後から追加された解説が括弧の中に書かれています。この解説はすべて、貴重な書物から引用されたものです。

西暦	ヒジュラ歴（太陽暦）	ヒジュラ歴（太陰暦）
2001	1380	1422

称賛の言葉

「スブハーナッラー ワ ビハムディヒ スブハーナッラーヒル アズィーム」

この称賛の言葉を朝晩 100 回唱える人の罪は許されます。再び罪を犯すことから守られます。このドゥアーは、「書簡の翻訳」という本の第 307 および 308 の書簡に書かれています。すべての苦悩が取り除かれる要因となります。

第一部

有益な知識

この本の第一部はアフメッド・ジェヴデット師によって書かれています。全 21 ページです。クルアーンの定めるところを法として「マジャッラ」という非常に尊い本を書き、イスラームに大きな貢献をし、最も正確な 12 巻のオスマン朝の歴史を書き、有名な「預言者の物語」という本の著者であるアフメッド・ジェヴデット師（アッラーの慈悲がありますように）は、ヒジュラ歴 1238 年（西暦 1823 年）にロフチャで生まれ、1312 年（西暦 1894 年）に亡くなりました。墓はファーティフモスクの庭園にあります。

アフメッド・ジェヴデット師は次のように語っています。この世界、すなわちすべては存在していませんでした。アッラーはこれらを手から創造されました。この世界で審判の日まで人間が繁栄することを望まれました。預言者アーダム（アッラーの慈悲がありますように）を土から創造され、その子供たちによって世界を飾られました。人々が現世と来世で快適に過ごすことができるよう、幸福に至ることができるように必要なものを教えるため、人々の中の一部を預言者とされ、誉れを与えられました。この人々に高い位階を与えられ、他の人々とは区別されました。この預言者たち（アッラーの平安がありますように）に、ジブラーイル（アッラーの祝福がありますように）という名前の天使を通して命令と禁止事項を教えられました。この人たちも、これらの命令をジブラーイル（アッラーの祝福がありますように）がもたらした通りの形でそのウンマに伝えました。預言者の一人目はアーダム（アッラーの祝福がありますように）、最後はムハンマド・ムスタファ（アッラーの祝福と平安がありますように）でした。この二人の間に多くの預言者が登場しました。その数はアッラーのみがご存じです。イスラームで知られている27人の預言者たちは以下の通りです。

アーダム、シト、イドリス、ヌーフ、フード、サーリフ、イブラーヒム、イスマーイル、イスハーク、ユースフ、アイユーブ、ルツ、シュアイブ、ムーサー、ユーシャ、ハールーン、ダーウード、スレイマン、ユーヌス、イルヤス、エルヤサ、ズルキフ、ザカリヤ、ヤフヤー、イーサー、ムハンマド・ムスタファ（アッラーの祝福と平安がありますように）です。このうちシトとユーシャ以外の25人はクルアーンで言及されています。クルアーンには **ウザイル** と **ロクマーン**、そして **ズルカルナイン** についても書かれてい

ます。しかし学者たちの中では、この三人及びトゥッバとフドゥルについて、預言者であると見なす人と、聖人であると見なす人がいます。預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）はハビーブッラーです。イブラーヒム（アッラーの祝福がありますように）はハリールッラーです。ムーサー（アッラーの祝福がありますように）はカリームッラーです。イーサーはルーフッラーです。アーダムはサフィーユッラーです。ヌーフはネジーユッラーです。この 6 人は他の預言者たちよりも崇高です。彼らを「ウルール・アズィーム」と呼びます。その中でも最も崇高な人が預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）です。

アッラーは地上に 100 のサヒーファ（書簡）と四冊の偉大な啓典を下されました。これらの全ては天使ジブラーイール（アッラーの祝福がありますように）がもたらしめました。10 のサヒーファはアーダム（アッラーの祝福がありますように）に、50 のサヒーファはシート（アッラーの祝福がありますように）に、30 のサヒーファはイドリース（アッラーの祝福がありますように）に、10 のサヒーファはイブラーヒム（アッラーの祝福がありますように）に送られたことが聖ハディースで伝えられています。（サヒーファは小冊子、書簡という意味です。私たちが知っているような"紙の表面"を指すものではありません。）四つの啓典のうちタウラートはムーサー（アッラーの祝福がありますように）に、ザブールはダー우드（アッラーの祝福がありますように）に、インジールはイーサー（アッラーの祝福がありますように）に、そしてクルアーンは最後の預言者であるムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）に下されました。

預言者ヌーフの時代に洪水が起こり、全世界を水が覆い

つくしました。地上に存在した人間と動物のすべてが溺れてしまいました。しかし、ヌーフとともに船にいた信者は救われたのでした。ヌーフ（アッラーの祝福がありますように）は船に乗る際、すべての動物を一つがいつ、一緒に連れて行ったため、動物たちはそこから繁殖していきました。ヌーフ（アッラーの祝福がありますように）の3人の息子が船に乗っていました。サーム（セム）、ヤーフェス（ヤペテ）、ハーム（ハム）でした。今地上に存在する人々は彼らの子孫となります。そのためヌーフ（アッラーの祝福がありますように）は第二の父と呼ばれます。

イスマールとイスハック（アッラーの祝福が彼らにありますように）はイブラーヒム（アッラーの祝福がありますように）の息子たちです。イスハック（アッラーの祝福がありますように）の息子はヤークブです。ヤークブ（アッラーの祝福がありますように）の息子はユースフ（アッラーの祝福がありますように）です。ヤークブのことはイスラーイールと呼ばれます。そのため、子孫のことをベニー・イスラーイール、すなわち「イスラーイールの息子たち」と呼びます。ベニー・イスラーイールは数が増え、その中から多くの預言者が現れました。さらに、ムーサー、ハールーン、ダーウッド、スライマーン、ザカリーヤー、ヤフヤー、そしてイーサー（アッラーの祝福が彼らにありますように）と、イーサー（アッラーの祝福がありますように）の母である聖マリヤムもその一部です。スライマーン（アッラーの祝福がありますように）は、ダーウッド（アッラーの祝福がありますように）の息子です。ヤフヤー（アッラーの祝福がありますように）は、ザカリーヤー（アッラーの祝福がありますように）の息子です。聖マリヤムはイムラーンとフンネの娘です。フンネはザカリーヤー（アッラーの祝福がありますように）の義理の妹です。

ハールーン（アッラーの祝福がありますように）はムーサー（アッラーの祝福がありますように）の兄弟です。ユーシャー（アッラーの祝福がありますように）は、ムーサー（アッラーの祝福がありますように）の息子です。イスマールの子孫はアラブ人となり、アラブ人の中から預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）が現れたのです。

フード（アッラーの祝福がありますように）はアード族に、サーリフ（アッラーの祝福がありますように）はサムード族に派遣されたように、ムーサー（アッラーの祝福がありますように）のはベニー・イスラーイールに派遣されました。ユーシャ、ハールーン、ダーウッド、スライマーン、そしてヤフヤー（アッラーの祝福が彼らにありますように）もまた、ベニー・イスラーイールに派遣されました。しかし彼らは別の教えを持っていたわけではなく、ベニー・イスラーイールをムーサー（アッラーの祝福がありますように）の教えへと招いたのでした。

ダーウッド（アッラーの祝福がありますように）にはザブールという啓典が下されたものの、ザブールには法規がありませんでした。説話や忠言で満ちていました。そのため、タウラートは無効とはされませんでした。つまり、その法規は有効のままとなり、さらにはそれを強めるものとなりました。このためにムーサー（アッラーの祝福がありますように）の教えは、イーサー（アッラーの祝福がありますように）の時まで継続していました。イーサー（アッラーの祝福がありますように）が登場し、この教えはムーサー（アッラーの祝福がありますように）の教えを無効としたのでした。つまりタウラートの有効性は消失し、それ以降ムーサー（アッラーの祝福がありますように）の教えに従うことは許されず、ムハンマド（アッラーの祝福と平安が

ありますように)の教えがもたらされるまで、イーサー(アッラーの祝福がありますように)の教えに従うことが必要となったのです。しかしベニー・イスラーイールの多くはイーサー(アッラーの祝福がありますように)を信じず、タウラートを信じることを固辞しました。「ユダヤ教徒」と「キリスト教徒」はこのようにして分裂したのです。イーサー(アッラーの祝福がありますように)を信じる人々を「ナサーラー」と呼びました。現在ではキリスト教徒と呼ばれます。イーサー(アッラーの祝福がありますように)を信じず、憎悪や逸脱の中でとどまった人々を「ユダヤ教徒」と呼びます。ユダヤ教徒はいまだにムーサー(アッラーの祝福がありますように)の教えに従い、タウラートやザブールを読んでいるとしています。ナサーラーはイーサー(アッラーの祝福がありますように)の教えを信じ、インジールを読んでいる、としています。しかし、諸世界の長であり全ての人間とジンの預言者である預言者ムハンマド(アッラーの祝福と平安がありますように)は、全世界の預言者として遣わされました。その教えこそイスラームの教えなのです。この教えは全ての従来の教えを無効としました。この教えの定めるところは最後の審判まで続くのであり、この世界のどこであれ、その教え以外の教えを信じることは許されなくなりました。彼以降にはどのような預言者も遣わされることはないのです。私たちはありがたいことに、彼を信じる集団です。私たちの教えはイスラームなのです。

預言者ムハンマド(アッラーの祝福と平安がありますように)は西暦571年の4月20日にあたる、ラビーウル・アッワル月の第12日目、月曜日の朝にマッカの町で生まれました。そして、ヒジュラ歴11年、西暦632年にマディーナで亡くなりました。40歳の時、「ジブラーイール」という名

の天使が来て、彼が預言者であることを告げました。西暦622年にマディーナの町に移住しました。9月20日月曜日でした。マディーナのクバーの村に来ました。今日、ムスリムの**（太陽暦の）**年始となりました。ペルシアの太陰暦の始まりはこれよりも9か月前になります。すなわち、太陽崇拝を行う拝火教の祝日である3月20日が「**ナヴルズの日**」です。その年のムハッラム月の1日は、「**太陰暦**」の年始になります。

私たちは預言者たちのすべてを信じます。全員が、アッラーによって遣わされた預言者たちです。しかしクルアーンが下されると、他の教えは無効となりました。そのため、それらに従うことは現在では許されないのです。ナサーラーも、預言者たちのすべてを信じます。しかし預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）が全人類のための預言者であることを信じないため、カーフィルとなり、正しい道から離れているのです。ユダヤ教徒は、イーサー（アッラーの祝福がありますように）を信じず、イスラームからさらに遠く離れています。

ユダヤ教徒とナサーラーは、彼らが手にしている変容してしまった啓典を、それらがそのままの形で天から下されたと信じているため、「**啓典の民**」すなわち啓典を持つカーフィルと呼ばれます。彼らの娘と結婚すること、彼らがアッラーの名を唱えて屠った動物を食べることは許されています。（しかしこれは避けた方がいいものです。ムスリムの女性が彼らの男性と結婚することは許されません。女性が彼らと、もしくはムルタド（教えを放棄した人）と結婚しようとする場合、預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）の教えに重きを置かなかったことになります。イスラームの教えを重要視しないムスリムは、教えを放棄した人（**ムルタド**）となり、二人のカーフィル

が結婚したことになります。)

どの預言者のことも信じない人、信じてはいても預言者や一部の被造物に「崇高な特性」があると信じて 彼らを崇高する人やムルタドは、「ムシュリク」すなわち啓典を持たないカーフィルと呼ばれます。「ムルヒド」もカーフィルであるとされます。彼らの娘と結婚すること、彼らが屠ったものを食べることは許されません。

イーサー（アッラーの祝福がありますように）は、自分の後で教えを広めるため、仲間の中から 12 人を選びました。彼らは弟子と呼ばれます。彼らの名は、シャムウン（ペトルス）、ユハンナ（ヨハネ）、大ヤコブ、ペトルスの弟であるアンドレアス、フィリップ（フィリップス）、トマ（トマス）、バルトロミ（バルトロマウス）、マティヤー（マタウス）、小ヤコブ、バルナバス、イエフーダ（ユダ）、そしてタディウス（ヤコビ）です。一部の啓典ではバルナバスの代わりにシモンと書かれています。イエフーダ（ユダ）はムルタドになりました。その代りにマトウイエス（マティアス）が選ばれました。弟子たちの長はペトルスでした。この 12 人の信者は、イーサー（アッラーの祝福がありますように）が 33 歳で天に昇られた後、その教えを周囲に広めました。しかしアッラーが遣わされた教えが正しく広められていたのは、88 年の間のみでした。その後、ユダヤ教徒からの改宗者であるボルス改革は、その原則を各方向に広めました。ボルスはイーサー（アッラーの祝福がありますように）を信仰しているかのように見せていました。自らを宗教学者と自称し、「イーサーはアッラーの息子である。したがって彼自身に神聖な特性がある」と言いました。それ以外のこともでっち上げて語りました。ワインと豚肉を合法としました。キブラを、カーバから東へ、太陽が昇る方向へと変更させました。アッラーは一つの実体であり、

その位格は3種類であると語りました。この位格を三位一体と呼びます。偽信者のユダヤ人のこの原則は、最初に書かれたインジールと呼ばれる四つの福音書、特にルカの本と混ざり、ナサーラーは多くの法学派に分かれました。イーサー（アッラーの祝福がありますように）に神聖な特性があると信じる人は、偶像崇拜者となりました。異なった 72 の法学派と啓典が出現しました。現在では三つの大きな法学派が残りました。その多くが偶像崇拜者です。

スペインのバレアレス諸島にあるマジョルカ島の神父であり、チュニジアでムスリムとなり、アブドゥッラー・イブニ・アブドゥルラヒッテルジュマーンという名を得た人が、「**トゥッフエトウル・アリーブ・フィッラディ アラー アフリサリーブ**」という語のアラビア語の本を 823 年（西暦 1420 年）に書き、それは 1290 年（西暦 1872 年）にイギリスで、そして 1401 年（西暦 1981 年）にイスタンブールで、ハキーカトゥ出版によりアラビア語として、「**アル・ムンクズ アニッダラル**」という本の巻末に印刷され、トルコ語に翻訳されています。この本では次のように書かれています。

「ここで言及されている四つの福音書を書いたのは、メター（マタイ）、ルカ（ルカ）、マルコ（マルコ）、そしてユハンナ（ヨハネ）である。新約聖書を最初に変容させ、ナサーラーを偶像崇拜者としたのは彼らである。パレスチナ人であるマタイは、イーサーが天に昇った年にのみ彼と会い、その 8 年後に聖書を書いている。ここでイーサー（アッラーの祝福がありますように）は、パレスチナの州で見られた驚くべき出来事と、ユダヤの王ヘロデが幼い彼を殺害しようとし、母マリヤムが息子を連れてエジプトに連れて行ったことを書いている。マリヤムは息子が天に昇ってから 6 年後に亡くなっている。エルサレムで埋葬された。アン

ティオキア出身であるルカはイーサー（アッラーの祝福がありますように）に会ったことはなく、イーサー（アッラーの祝福がありますように）が昇天した後で、偽信者のボルスによってキリスト教に加えられた。ボルスの（パヴロスの）有害な思想を植え付けられ、アッラーから下された書を完全に変えてしまった新約聖書を書いた。マルコも、イーサー（アッラーの祝福がありますように）が昇天した後で入信し、新約聖書の名でペトルスから聞いたものをローマで書いた。ヨハネはイーサー（アッラーの祝福がありますように）のいところであり、イーサー（アッラーの祝福がありますように）に何度か会っている。この四つの福音書では互いに合致しない箇所が多くある。」1309 年（西暦 1892 年）に死去したハルプットのイスハック師が書いた「ディヤーウル・クルブ」及び「シャムス・ウル・ハキーカ」という 2 冊の本、そして 1299 年に死去したハイデリザーデ・イブラヒム・ファスフ師のアラビア語の「アッスラートウル・ムスターキム」という本、そしてネジェフ・アリー・テブリズィーによる、1288 年にイスタンブールで印刷されたペルシア語の「ミザーン・ウル・メワーズィン」という本、そして 1959 年にベイルートで出版されたイマーム・ガザーリーのアラビア語の「アラッドウル・ジャミール」という本で、現在新約聖書と呼ばれている本が本質を失ったものであること、これらを信じる人の多くが偶像崇拝者であることを証明しています。この 3 冊の本は 1986 年にハキーカトゥ出版によってオフセット印刷で 再び出版されました。

イーサー（アッラーの祝福がありますように）から見聞きしたことを正しく書いたバルナバスの聖書が発見され、1973 年に英語としてパキスタンで発行されました。「カームス・ウル・アラーム」では次のように書かれています。

「バルナバスは弟子の中でも古い者だった。マルコスのい
 ところであった。キプロスの出身だった。ボルス（パヴロス）
 が現れてから、彼に接近した。一緒にアナトリアとギリシ
 アを移動していた。西暦 63 年にキプロスで殉死させられた。
 聖書とそのほかいくつかのものを書いた。6 月の 11 日にそ
 の宴が行われる。」

キリスト教の宗教者のことを、神父、修道士と呼び
 ます。正教会の最高位は総主教と呼びます。中位の神父の
 ことを 司祭と呼びます。聖書を読む人のことをクッスス、
 クッススのうち最上位をウスクフと呼びます。彼らは宗教
 指導者です。ウスクフのうち高位の者を主教、もしくは首
 司祭と呼びます。さらに高位の者を大主教、府主教と呼び
 ます。彼らは宰相、つまり判事です。教会で崇拜行為を行
 わせる人々をジャースィ、下位の人々をキューもしくはシ
 ャムマース、執事、教会で奉仕する人々をエルミテ、シャ
 マーミセと呼びます。彼らは崇拜行為を行う人々の支援も
 します。崇拜行為のみを行う人々をラヒーブと呼びます。
 カトリックの神父の中の最高位は教皇、つまり父の中の父
 です。教皇はローマにいます。彼の顧問を枢機卿と呼びま
 す。

これら宗教者は皆、アッラーが唯一の存在であることを失
 念しているのです。「三位一体」と呼ばれるものをはじ
 めとして、イーサー（アッラーの祝福がありますように）
 はアッラーの息子であると言いながら多神教徒となったの
 です。その後、ローマ帝国のクラウディウス 2 世（西暦 215
 年～271 年）の時代に、アンティオキア大主教ユヌス・シャ
 ンマースは、アッラーが唯一であることを宣言しました。
 そして多くの人々を正しい道に導き、啓典の民となったの
 でした。しかし彼以降の神父たちは、やはり三位一体とし
 ていました。コンスタンティヌス 1 世（274－337）はキリス

ト教に偶像崇拜をも混ぜ入れてしまいました。西暦 325 年に、イズニキの宗教会議で 318 年の神父を集め、多神教が混ざった新しいキリスト教の教えをもたらしました。この会議にいたアリウスというウスクフは、アッラーが唯一であること、イーサー（アッラーの祝福がありますように）が彼のしもべであることを訴えたものの、議長であるアレクサンドリア大主教アレクサンドロスはアリウスを教会から追放しました。コンスタンティヌス 1 世はアリウスがカーフィルであると宣言し、「ミレルとニハール」という書物や、ギリシアの歴史家の一人ジル吉斯・イブヌルアーミディン（601－671、西暦 1205－1273、ダマスカス）の本で書かれている「マラカーイヤ」派の基礎を作らせました。381 年にイスタンブールで第 2 回目の会議を開き、「聖なる魂」という名が与えられたイーサー（アッラーの祝福がありますように）は被造物であると訴えたマクドニウスが罵倒されました。西暦 395 年にローマ帝国は二つに分裂しました。421 年にコンスタンティノーブル（すなわちイスタンブール）大主教ネストリウスの本を精査するため、イスタンブールで第三回目の会議が開かれました。ネストリウスは「イーサー（アッラーの祝福がありますように）は人間である。彼を崇拝してはいけない。二つの実体がある。アッラーは唯一である。その存在と生命、知の特性のうち、生命の特性が聖霊である。知の実体（言葉）がイーサーに入り込み、神となった。マリヤムは神の母ではなく人間の母である。イーサーは神の息子である」と語っていました。この考えは受け入れられ、ネストリウスの法学派は東方諸国にまで広がりました。この法学派に属する人々をネストリウス派と呼びます。431 年にエフェソスで第 4 回の会議が行われ、ディオスコロスの考えが認められ、ネストリウスは追放されました。ネストリウスは 439 年にエジプトで死去しました。

その 20 年後、カドゥキョイで 451 年に第五回の会議があり、734 人の神父が集められ、アレクサンドリア大主教ディオスコロスの書いたものが拒否されました。ディオスコロスの思想は「キリスト単性論」と呼ばれ、イーサー（アッラーの祝福がありますように）は神であると訴えていました。これを「ヤコブ派」とも呼びます。なぜならディオスコロスの本名はヤークブであるからです。当時、東ローマ帝国（ビザンツ）の皇帝であったマルキアヌスは拒否の通達を各地に送付しました。ディオスコロスは逃亡し、エルサレムやエジプトでその法学派を広めました。彼らの多くも偶像崇拝者です。イーサー（アッラーの祝福がありますように）は崇拝されています。現在イラクやシリア、レバノンに存在するシリア正教会やマロン典礼カトリック教会もヤコブ派に属する法学派です。

カドゥキョイ会議で承認され、皇帝マルキアヌスが評価していた派をマラカーイヤ派と呼びます。第一回イズニック会議で認められた法学派もマラカーイヤ派に近いものです。その長はアンティオキア大主教です。知の実体を「言葉」、生命の実体を「聖霊」と呼びます。この実態が人間と一体化するとウクヌームと呼ばれます。神は三つの存在であり、その一つは外見的なウクヌームである父です。イーサーはその息子です。マリヤムも神であると見なしています。イーサー（アッラーの祝福がありますように）のことを「イエス・キリスト」と呼びます。

キリスト教徒の 72 の法学派については、インド人のラフメトゥッラー師（アッラーの慈悲がありますように）がアラビア語の「イズハール・ウル・ハック」という本で、そしてハルプトゥ出身のイスハック師がトルコ語の「ディヤーウル・クループ」という本で詳しく書いています。この本は、1987 年に「彼らは返答できず」という名でイスタン

ブルで出版され、英語への訳も 1990 年に出されています。「イズハール・ウル・ハック」という本は 1280 年（1864 年）にアラビア語でイスタンブールで出版されました。ラフメトウッラー師はこの本で、1270 年にまずインドで、それからイスタンブールでキリスト教の神父たちと行った会見と、彼らをいかに論破したかについて詳しく書いています。ペルシア語の「セイフ・ウル・エブラール」という本のイスタンブール版では、この会見について情報が加えられています。「イズハール・ウル・ハック」という本は 2 部になっています。メアリフ省書記であったヌズフェット師は、この本の第 1 部をトルコ語に訳し、「イズハール・ウル・ハック」という名でイスタンブールで出版しました。第 2 部は 1292 年にサイード・ビン・オメル・ファフミ・ビン・ハサンがトルコ語に訳し、「イブラズ・ウル・ハック」という名で、1293 年（西暦 1876 年）にボスニアで出版しました。

これらすべての法学派は、446 年（西暦 1054 年）まで、ローマ教皇に属していました。その多くが多神教徒となりました。そのすべてをカトリックと呼びます。1054 年にイスタンブール大主教ミカエル・キロラリウスは教皇から離れ、東方教会を自ら統治しました。これらの教会は「**正教会**」と呼ばれています。彼らは「**ヤコブ派**」に属する法学派でした。ルターという名のドイツ人の神父は、ヒジュラ歴 923 年にあたる西暦 1517 年にローマ教皇と対立し、教会の一部はこれに従いました。彼らは「**プロテスタント教会**」と呼ばれています。

ここから明らかなように、キリスト教徒の多くは偶像崇拜者であり、ユダヤ教徒よりも下位に位置します。来世での罰がより多くなります。なぜなら彼らはムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）を信じておらず、アッラーの神性について議論を交わし、三位一体論を信じ

ているからです。イーサー（アッラーの祝福がありますように）と母マリヤムを神として崇拝する人は、多神教徒です。また死肉を食べてもいます。ユダヤ教徒は、二人の預言者（アッラーの祝福と平安がありますように）を信じないだけで、アッラーが唯一であることを信じており、また死肉も食べません。一方で、ユダヤ教徒のイスラームへの敵愾心はより強いものです。ユダヤ教徒の一部は「ウザイルはアッラーの息子である」といい、キリスト教徒のように多神教徒となっていますが、大多数は多神教徒ではありません。正教会、カトリック、プロテスタントはそれぞれが異なる新約聖書を読み、イーサー（アッラーの祝福がありますように）に属するとしています。しかし信条や行為において互いに矛盾する多くの事柄が存在します。すべてをナサーラー及びキリスト教徒と呼びます。イーサー（アッラーの祝福がありますように）は預言者であるという人々を、啓典の民と呼びます。現在では啓典の民であるキリスト教徒はいません。預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）を信じないため、すべてがカーフィルです。ユダヤ教徒は、自らをムーセヴィー（モーゼ派）と呼びます。（1997年にフランスで出版された2巻からなる宗教百科事典では次のように書かれています。「1995年現在、世界には45億人が住んでいる。このうち16.2億人がムスリム、18.7億人がキリスト教徒（そのうちの14.2億人がカトリック、5億500万人がプロテスタント、1億7400万人が正教徒）、1400万人がユダヤ教徒、16億600万人が預言者を全く信じないカーフィル、すなわち多神教徒である」

預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）がヒジュラから11年目に来世へと移られた後、アブー・バクル（アッラーのお喜びがありますように）がカリフとなりました。ヒジュラから13年目に、彼は63歳で亡く

なりました。その後、ウマル・ウル・ファールク（アッラーのお喜びがありますように）がカリフとなりました。ヒジュラから 23 年後に彼は 63 歳で殉教しました。その後、オスマン・ズィンヌーライン（アッラーのお喜びがありますように）がカリフとなりました。ヒジュラから 35 年目に彼は 82 歳で殉教しました。その後アリー（アッラーのお喜びがありますように）がカリフとなりました。ヒジュラから 40 年目に 63 歳で殉教しました。この 4 人のカリフを 「**4 大カリフ**」 と呼びます **(幸福の時代)**。 イスラームの統治が完全に成立し、各地が権利と公正、自由によって光を与えられたように、彼らの時代にもまたそうでした。イスラームによる統治が不足なく行われていました。この 4 人のカリフは、教友たち全員 よりもより崇高です。

彼ら自身の間の階位の順は、カリフとなった順と同じです。

アブー・バクル（アッラーのお喜びがありますように）の時代、ムスリムはアラビア半島の外に進出しました。預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）が来世へと移られ、この半島では混乱が生じました。アブー・バクル（アッラーのお喜びがありますように）はこの混乱を収めました。ムルタドたちの教育を行いました。幸福の時代と同様、一体化を維持していました。ウマル（アッラーのお喜びがありますように）はカリフになると、ある説教を行いました。

「アッラーの使徒の友よ。アラビア半島はあなた方の父祖のためにただ大麦を育てることができる。しかしアッラーはムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）のウンマに、地上のあらゆる場所に、土地と国を与えんということをし、その愛されるお方に約束されておられた。この約束された土地を征服し、この世界で戦利品を、来世で戦士、殉教者という位階に至ることを望む者はどこ

にいるのか。教えのために命をささげ、祖国を放棄し、アッラーのしもべたちを抑圧者の爪から救う兵士たちはどこだ？」

このように 語り、教友たちに聖戦や兵士となることを奨励しました。イスラーム国家が三大陸に渡って急速に発展し、何百万もの人々を教えへの憎悪から救った要因は、ウマル（アッラーの祝福と平安がありますように）のこの言葉でした。この言葉により、教友たちは死ぬまで聖戦を行うことを誓い、一体となりました。カリフが示す形で軍を作り、ムスリムたちは自分の土地や祖国を離れ、アラビア半島から出て、各地に広がりました。このようにして、短期間で多くの国家が得られ他のです。当時、2つの大きな国家がありました。一つがローマ帝国であり、もう一つはイランでした。ムスリムは双方に勝利し、ペルシア帝国が完全に消滅しました。その領土がムスリムのものとなりました。住民はムスリムとなることで営を得ました。現世での安寧、来世での永遠の幸福に至ったのでした。オスマンとアリー（アッラーのお喜びがありますように）の時代にもこのような戦いが行われました。しかしオスマン（アッラーのお喜びがありますように）の時代には、カリフと対立する人々が増え、オスマンは殉教者となりました。アリー（アッラーのお喜びがありますように）の時代には外的な争いも起こり始めました。ムスリムの間の分裂も始まりました。征服や勝利の最大の要因は連帯、一体化であったため、彼らの時代にはウマル（アッラーのお喜びがありますように）の時代ほどには国土を得ることはできませんでした。

四大カリフの時代は30年でした。この30年は、預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）の時代と同じくらい、素晴らしいものでした。この四大カリ

フの後、ムスリムの中でビドゥアや誤った道が生じ、多くの人々が正しい道から離れてしまいました。ただ、教友のように信仰する人、イスラームの定めるところに彼らのように従う人々は救われており、彼らのこの道を「**スンナ派**」と呼びます。スンナ派の学者とは、4つの法学派のうちのどれか一つの学者ということです。四つの正しい道がこれらなのです。預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）と教友（アッラーのお喜びがありますように）が進んだ正しい道は、スンナ派の学者たちが示した道です。時とともに誤った法学派はその道のりが忘れられていきました。現在イスラーム諸国の多くは、この正しい法学派に属しています。このスンナ派に従わない学派には、ユダヤ教徒であるアブドゥッラー・ビン・サバの築いたシーア派のみが残りました。シーア派は、「カリフであることはアリー（アッラーのお喜びがありますように）の権利なのに、アブー・バクルとウマル（アッラーのお喜びがありますように）が無理やりその権利を奪った」と主張します。教友の多くを批判しているのです。

（今日、ムスリムといわれ、預言者ムハンマドのウンマとして定義される人々は、スンナ派、シーア派、ワッハーブ派で構成されるといえます。イギリス人がインドに設立したアフマディーヤやカーディヤーニと呼ばれるズンドゥクたち、及びベハーイルたち、そして「**タブリーグ・ジャマート**」と呼ばれる誤った法学派の人々、ズンドゥクである人々はイスラームとの結びつきはありません。これらは三つとも、「**スンナ派**」から離脱しています。）スンナ派の法学派は、行いや崇拝行為の観点から四つの「**派**」に分かれています。一つ目は「**ハナフィー派**」であり、イマーム・アザーム・アブー・ハニーフア・ヌマン・ビン・サービト（アッラーの慈悲がありますように）の法学派です。

ハナフィーとは、正しく信じ、イスラームに結びついている人を意味します。アブー・ハニーファは、真のムスリムの父、という意味です。イマーム・アザムに、ハニーファという名の娘がいるわけではないのです。スンナ派の四つの法学派のうち二つ目は、「**マーリキー派**」であり、マーリク・ビン・アナスの法学派です。三つめは「**シャーフイー派**」であり、イマーム・ムハンマド・ビン・イドリス・シャーフイー（アッラーの慈悲がありますように）の法学派です。イマームの祖父の祖父であるシャーフイー師は教友の一人であり、彼自身やその法学派のことをシャーフイーと呼びました。四つ目は「**ハンバリー派**」で、アフマッド・イブニ・ハンバル（アッラーの慈悲がありますように）の法学派です。イマーム・アザムはヒジュラ歴 80 年、マーリクは 90 年、シャーフイーは 150 年、アフマッドは 164 年に生まれ、それぞれ 150 年（西暦 767 年）、179 年、204 年、241 年に死去したことが、イブニ・アービディンの前書きで書かれています。（アッラーの慈悲がありますように）

スンナ派の道を学びたい人は、四つの法学派のうちの一つの本を読むべきです。

この四つの法学派は、信条という点でそれぞれ異なってはいません。すべてがスンナ派の道であり、信仰、信条、教えの基本は同一です。イスラーム国家でこの四つの法学派のイマームは、偉大かつ 皆によって受け入れられ、信じられるムジュタヒドです。ただ、イスラームの定めにおいて、つまり実際の行いの部分で、いくつかの小さな点で異なっているのです。

つまり、アッラーと預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）は信者たちに慈悲をかけられ、いくつかの実践についてどのように行うべきかを、クルアーンやハディースで明白にされませんでした。（明白にされ

ていたとすれば、そのように行うことがファルド（義務）、スナナとなっていたでしょう。義務を行わない者は罪を犯したことになる、義務やスナナに重きを置かない人もカーフィルとなっていたでしょう。信者は困難な状態となっていたでしょう。）このような実践的な行いについては、明白に示されている事柄から類推して行う必要があります。宗教学者のうち、これらをどのように行うべきか、類推によって理解できる人たちのことを「ムジュタヒド」と呼びます。ムジュタヒドは、一つの行いをどのように実行するかを知るために、最高の努力を払い、その見解や真実に最も近い想定によって実践することが、彼自身や彼に従う人にとってのワージブとなります。つまりクルアーンの言葉やハディースが、このように行うことを命じているのです。ムジュタヒドが一つの行為をどのように行うべきか理解するべく努める際に、もし間違いを犯したとすれば、それは罪にはならず、サワブ（善行）となります。努力の褒賞を得るのです。なぜなら人にはその力の及ぶ限りで努力することが命じられているからです。ムジュタヒドが誤ってしまったとしても、その努力にサワブが与えられるのです。教友のすべて（アッラーのお喜びがありますように）は偉大な学者、すなわちムジュタヒドでした。彼らの後に登場した人々のうち、初期のころにはイジュティハドをすることのできる偉大な学者が多くいました。彼らそれぞれに、多くの人々が従いました。時とともにその多くは忘れられ、スナナ派の中でこの4つの法学派のみが残りしました。後になって適当な人が現れて自分はムジュタヒドであると訴えて誤った法学派を作り出すことが無いよう、スナナ派はこの4つ以外の法学派には従いませんでした。この4つの法学派のそれぞれに、スナナ派の何百万人もの人々が従いました。これらの法学派の信条は同一であることから、互

いについて誤っている、ビドゥアの持ち主である、逸脱していると見なすことはありません。正しい道はこの4つの法学派にある といい、それぞれが自分の法学派が正しい可能性がより高いと見なしています。イジュティハドによって知られる事柄についてはイスラームの明白な命令がないため、一人の法学派が誤っていて、残りの三つの法学派のどれかが正しい可能性はあるものの、皆、「私の法学派は正しいが、誤りである可能性もある。別の3つの法学派が過ちであり、これが正しい可能性もある」というべきなのです。ただ、何らかの困難がない限り、一つの行いについてこの法学派に従い、他の行いにおいて別の法学派に従うといったふうに、4つの法学派を混ぜ合わせる させることは許されません。4つの法学派のうちどれに倣っているものであれ、すなわちどの法学派を選んだのであれ、その法学派の知識を学ぶこと、特に困難がない限りすべての行いにおいてその法学派に従うことが必要です。

(ただし、何かを行う際に困難さが伴う状況であれば、つまり自分の法学派に依拠して行うことが不可能であることであれば、他の法学派に従うことが許されます。しかし二つの法学派の、その行いに関する条件、つまり義務と避けるべきものに気を付けることも必要です。ハナフィー派の学者たちは、そのような行いにおいてマーリキー派に倣うことを宣言していることが、イブニ・アービディンの「ニカーフ・リジー」の項に書かれています。)

学者たちの多くが、ハナフィー派がより正しいと語ってきました。このため、イスラーム諸国の多くで、ハナフィー派が根付いています。トルキスタン、インド、そしてアナトリアのほとんどすべてがハナフィー派です。アフリカの西部は皆マーリキー派です。インドの一部の海岸沿いの地域にも見られます。シャーフィー派はエジプト、クルド、

アラビア、そしてダゲスタンに多く見られます。ハンバリ一派は少数です。かつてはダマスカスやバグダッドに多くいました。

「**宗教的源**」、すなわち宗教的知識においてムジュタヒドであるイマームたちへの源となるものは4つあります。「**クルアーン**」、「**ハディース**」、「**ウンマの総意**」、そして「**法学者の過半数の類推**」です。

ムジュタヒドたちは、それぞれの行いがどのように行われるか、クルアーンで明白に記されていないければ、ハディースを参照します。ハディースでも明白に書かれていないければ、その行いについて「**イジュマー**」があれば、そう行います。（イジュマーとは、行いの一致を意味します。つまり、この行いを教友のすべてが同じ形で行うこと、あるいは語ることの意味します。教友の次の世代である タビーン のイジュマーも根拠になります。その後の世代、さらには現代の人々、宗教改革者、宗教的に無知である人々が行ったこと、語ったことはイジュマーと呼ばれません）

一つの行いをどのように実行すべきか、イジュマーによっても知ることができなければ、ムジュタヒドの類推によって行うことが必要となります。イマーム・マーリク（アッラーのお喜びがありますように）は、この4つの根拠のほか、マディーナの当時の住民の行いの一致も、根拠となるといいました。彼らのこの風習は、父、祖父、そして最後は預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）から習慣として受け継がれてきている、と語りました。この根拠は、類推よりもより確実だ、と述べました。しかし他の3つの法学派のイマームたちはマディーナの住民の行いの一致を根拠として取り入れませんでした。

イジュティハドの流れは二つあります。一つ目はイラクの学者たちの道であり、これを「**レイの流れ**」といいます。

一つの行為がどのようになされるかクルアーンやハディースで明白な言及がなければ、これに類似する他の行為がどのように行われるのかを調べ、それを見つけます。そしてその行為をそれに即して行います。教友たちの後で この流れをくむムジュタヒドの長は、イマーム・アザーム・アブー・ハニーファ（アッラーのお喜びがありますように）です。

二つ目の流れは、ヒジャーズの学者たちの流れであり、これを「**伝承の流れ**」と呼びます。彼らはマディーナの当時の住民たちの習慣を、類推よりも重要であると見なします。この流れのムジュタヒドの長はイマーム・マーリク（アッラーの慈悲がありますように）であり、彼はマディーナに住んでいました。イマーム・シャーフィーとアフマド・イブン・ハンバルもイマーム・マーリクの説話に参加していました。イマーム・シャーフィーはイマーム・マーリクの流れを学んだ後、バグダッド方面に来て、イマーム・アザームの弟子から学び、この二つの道を一体化しました。また別のイジュティハドの流れを築きました。彼自身は非常に雄弁で文学的であったため、クルアーンの章句やハディースの表現方法を見て、強いと見なした方で判断していました。どちら も強くない場合は、類推によってイジュティハドを行っていました。イマーム・アザームの弟子から類推の流れを得たものの、多くのハディースを暗唱していたため、まずハディースのたがいの強さを見て、イジュティハドを行っていました。これにより、イスラームの規律の多くにおいて他の3つの法学派とは異なっています。

4つの法学派のこの状態は、町の住民の状態に似ています。目の前にある事業をどのように行うか、法律で定められていなければ、その町の長や有力者が集まり、その事業を法

律にある適当な条項に倣って行います。時には意見が一致せず、国家の目的は町の修理、人々の安寧であるという人が出てきます。その仕事を、意見や思想に基づいて、法律にある条項に倣って行います。彼らはハナフィー派に似ています。一部の人は、国の中枢からくる役人の行動を見て、その事業をその行動に合わせて行い、国家の目的はこのような行ふことだ、といます。彼らはマーリキー派に似ています。一部の人は、法律の表現、言葉遣いに注目し、その事業を行う方法を見出します。彼らはシャーフイー派のようです。一部の人は法律の別の条項を集め、それらを比較し、この事業を正しく行ふための道を求めます。彼らはハンバリー派に似ています。そして、町の有力者それぞれが、それぞれの道を見出し、また皆、自分の道が正しく法に沿っていると述べます。法律が求めるものは、この4つの道のどれか1つであり、残りは誤りです。しかし、法律からそれてしまったことは、彼らが法律を知らないため、国家に反抗するためではなく、皆、法律に従い、国家の命令を実行するために努力したのであり、全く罪にはなりません。おそらくは、このように努力をしたために、褒められるでしょう。しかし正しいものを見出した人はさらに褒められ、褒賞を得ます。4つの法学派の状態もまさにこの通りです。アッラーが求められる道は当然一つです。4つの法学派の意見が分かれる行為において、一つが正しく、残り三つは間違いです。しかしそれぞれの法学派のイマームは、正しい道を見出すために努力したため、間違っていたとしても許されます。さらには、褒賞を得ます。なぜなら、預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）は「わがウンマに、間違えた、そして忘れたことによる罰はない」といわれているからです。この意見の相違はいくつかの行為において見られますが、崇拜行為の多

く、つまりクルアーンやハディースが明白に教えている規則、そして信仰されるべき事柄においては全く同じであるため、互いを非難することはしないのです。

質問：イギリス人がアラビアに設立した、逸脱した法学派であるワッハーブ派や、彼らの本を読む人たちは「法学派は2世紀目になって生じたものだ。教友やその次の世代の人々がどこの法学派に属していたというのか」といいます。

答え：法学派のイマームとは、クルアーンやハディースで明白に示されている宗教知識を教友から聞き取ってまとめ、本にした偉大な学者を意味します。明白に示されていない知識については、明白に示されている知識から類推しています。「ハーディカ」という本の318ページでは次のように書かれています。「この4つのイマームの時代には、他の法学派のイマームたちもいた。彼らにも法学派があった。しかし彼らの法学派に属する者は少しずつ減り、現在では全く残っていない。」教友たちは皆がムジュタヒドでした。それぞれが深く知る学者であり、法学のイマームでした。法学はより正しく、より尊いものでした。しかしそれらには書物がなかったため、忘れ去られたのです。4つの法学派以外に従うことは不可能となりました。教友たちがどの法学派に属していたか、と問うことは、連合司令官がどの部隊に属していたかと問うこと、もしくは物理の教師がどのクラスの生徒かと問うことに似ているのです。

ヒジュラから400年が過ぎてから、絶対的なイジュティハドを行うことができるほどの深い知識を持つ学者がいなくなったことが諸書物に書かれています。「ハーディカ」の本の318ページのハディースでは、嘘を話す、逸脱した宗教者が増えるであろうことが告げられています。このため、スンナ派のムスリムはこの4つの法学派のうち一つを選び、そ

れに「**倣うこと**」が必要です。つまり、この「イルミハール」の書物を読み、学ぶこと、信仰やすべての行いにおいてそれらに従うことが必要です。これによって、その法学派に属したことになります。4つの法学派のうちの1つに倣わない人は、スンナ派とはなりません。これを「**法学派に属さない**」「**ズンドゥク**」と呼びます。法学派に属さない人、もしくは72の逸脱した法学派に属する人です。このことは、「バフル」で、「ヒンディーヤ」で、「タフターウィー」のザバーイフの章で、そして「イブニ・アービディン」のバーイの章で書かれています。「アル・ベシャイール」という本の52ページ、アブマッド・サーウィー（アッラーの慈悲がありますように）のタフシールで、洞窟章においてこのように書いています。

「ミーザーン・ウル・クブラ」という本の筆者（アッラーの慈悲がありますように）はその前書きで次のように書いています。「忘れられた法学派と、現在存在する4つの法学派のすべては正当です。なぜならすべてが同じ源からのものだからです。すべての法学派において、**「実行が容易である行い」**が与えられているように、行うことが**「困難である行為」**もあります。困難である行為を実行することができる人が、容易な方を行おうとすることは、教えを弄ぶことになります。困難な行為を実行することに力が及ばないような障害を持つ人々は、容易であることを行うことが許されます。このような人々が容易である方を行った場合、困難な方を行っただけの褒章を得ます。無力ではない人は、自らの法学派における容易な行為を行わず、困難な方を行うことがワージブです。さらに、自分の法学派において容易な方法のみ存在する行為について、別の法学派では困難なやり方があるのであれば、それを行うことがワージブとなります。法学派のイマームたちのうちの誰かの言葉を気

に入らないこと、もしくは自分の考えをその人の考えよりも優先することは避けなければなりません。なぜなら、他の人々の知識、見解は、ムジュタヒドの知識、見解と比べると無に等しいものであるからです。」障害のない人に、自分の法学派の容易な方法で 行為を実行することは許されないからといって、別の法学派の容易な方法を探ること、つまり法学派を「 **掛け持ちすること**」 は決して許されないことが明らかです。

「ドゥッル・ウル・ムフタール」の筆者（アッラーの慈悲がありますように）は、その前書きとその本の「**レッド・ウル・ムフタール**」という注釈（すなわちイブニ・アービディン）で次のように書いています。「ある行い、崇拜行為を実行する際、法学派ごとの容易さを調べ、それに応じて行うことは逸脱です。例えば、ウドゥーを行った人の肌から血が流れた場合、シャーフイー派においてはウドゥーは損なわれません。ハナフィー派においては損なわれます。家族以外の女性の肌に肌が触れた場合、シャーフイー派ではウドゥーが損なわれます。ハナフィー派では損なわれません。ウドゥーを行った後、肌から血が出た人、そしてその肌が家族以外の女性の肌に触れた人が、このウドゥーのままで行った礼拝は認められません。このように、ある行為を法学派に従って行う際、二つ目の法学派にも従うことは一致して逸脱とされます。つまり、シャーフイー派に従い、ウドゥーで頭の一部のみを濡らす人を犬が舐めた場合、この人がマーリキー派に従ってその箇所を洗うことなく行った礼拝は、認められません。なぜならシャーフイー派では犬になめられた人の礼拝は認められないからです。マーリキー派では犬はけがれてはいないからです。一方ではウドゥーで頭全体を濡らす必要があります。また同様に、脅迫によって行われた品の押収は、ハナフィー派では認め

られます。他の3つの法学派では認められません。ある人が、シャーフイー派に従って離婚した女性と、ハナフィー派に従ってこの女性の姉妹と結婚することは許されません。なぜなら一つの行いを行うときに法学派を「**かけ持つこと**」、つまり容易な者を探してそれに応じて行うことは、一致して認められていないからです。4つの法学派のどれにも属さない行為を行うことも許されません。」礼拝の時間を説明する際に、次のように書いています。「遠征や豪雨のような支障がある場合、正午と午後の礼拝、日没後と夜の礼拝を一緒に行うことがシャーフイー派では認められています。ハナフィー派では認められていません。ハナフィーに属する人が、遠征を行う際、困難な状況にあるわけではないのに、正午の礼拝を午後の礼拝の時間に行うことはハラームとなります。午後の礼拝を正午の礼拝の時間に行うことは、決して許されません。シャーフイー派では双方ともに許されています。自分の法学派によると困難となる場合、自分の法学派における容易な方を実行することが許されます。容易な方を行うことも困難であれば、別の法学派のやり方に倣うことも許されますが、その法学派でその崇拜行為のためにファルドやワージブであることをも行うことが必要です。」何らかの仕事、崇拜行為を行う際、別の法学派に倣う人は、自分の法学派を抜けたことにはなりません。ただその仕事を行う際に他の法学派の条件を尊重することが必要なのです。

イブン・アービディン（アッラーの慈悲がありますように）は「**レッド・ウル・ムフタル**」の第2巻、542ページで次のように書いています。「ハナフィー派の人がウドゥーを行う際にそれをニーヤしなければ、そしてそのウドゥーによって正午の例外を行えば、それは許される。午後の礼拝の後でシャーフイー派となり、午後の礼拝を行えば、そ

れは認められない。ニーヤをして再びウドゥーを行うことが必要となる。」「**タブイル**」を説く際には次のように書いています。「誰かが、宗教的、科学的に必要なのに、世俗的な仕事のために法学派を変えれば、宗教を弄んだことになる。罰せられることが必要となる。信仰なく死んでしまうという恐れがある。クルアーンの言葉で **「知っている者に聞きなさい**」と命じられている。だから、ムジュタヒドに質問すること、一つの法学派に属することがワージブとなる。一つの法学派に倣うこと、つまりこの法学派に従うことは、法学派のイマームの言葉を読み、学び、それを行うことを意味する。学ばず、知ろうとせず、私はハナフイ派だ、私はシャーフイー派だということでその法学派に入ったことにはならない。こういった人々は師に尋ね、イルミハールの本で学んで崇拝行為を行うべきである。」証言について語る際には次のように書いています。「法学派に重きを置かず、あるいは容易であるものを選ぶために法学派を変える人（、もしくは法学派をまとめ、容易なものを選んで集める人）の証言は認められない。」

イブニ・アービディンの前書きでは次のように書かれています。「ハリーファ・ハールン・ウル・レシッドは、イマーム・マーリクにこう言った。『 イスラーム諸国各地にあなたの本を広め、皆がただこの本に従うように命じたい。』イマーム・マーリクは言った。『 ハリーファ、それはやめなさい。学者たちがそれぞれの法学派に分かれることは、アッラーがこのウンマに与えられた快適さの一つである。皆、自分の望む法学派に従う。法学派のすべてが正しい。』

「信者」、「ムスリム」、そして「イスラーム教徒」ということは、アッラーによって、預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）を通して 人々に教えられ、イスラーム諸国に広められた宗教上の知識を信じて 受

け入れる人、ということです。これらの知識は教友たちが預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）から聞き、「**その次の世紀**」、そのさらに次の世紀に生まれてきたイスラーム学者たちも教友から聞き、もしくはそれを聞いた人から聞き、本に書いたものです。その後、生まれてきたイスラーム学者たちは、預言者ムハンマドの次の世代の本における知識を様々に解説し、それぞれに道を違え、意味が明白に示されていない、信仰すべき事柄について 73 の異なる法学派が生じました。そのうちのただ一つの法学派は、この解説を行う際に自分の考え、見解を加えず、変更や追加を行いませんでした。この正しい信仰を持つ法学派を「**スンナ派**」もしくは「**スンニー**」と呼びます。明白ではないクルアーンの章句やハディースを誤った形で解釈し、信条を損なってきた 72 の法学派は、「**ビドゥア**」もしくは「**逸脱**」の法学派、もしくは「**法学派を持たない者**」と呼ばれます。彼らもまたムスリムですが、誤った道にあるのです。

意味が明白に伝えられているような 信仰すべき点について、クルアーンやハディースにただ自分の知恵や見解で意味を与え、信仰が損なわれてカーフィルとなった人を「**ムルヒド**」と呼びます。「**ムルヒド**」は、自らを誠実なムスリムであり、預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）のウンマであると見なしています。「**ムナーフク**」（偽信者）は、ムスリムのように見えます。しかし他の教えを持っているのです。「**ズンドウク**」は宗教を持たない人です。どの教えも信じていません。ムスリムを、宗教を持たない無神論者にするために、ムスリムのように見せかけています。「**宗教改革**」を行うことは、イスラームを変えること、損なわせ、失わせるために努力することです。イスラームの敵となることです。これは非常に有害で

す。フリーメーソンの人々やイギリスのスパイがこれに当てはまります。

「ムスリム」になるために信仰すべき知識は、単に六信にとどまりません。義務である「ファルド」が行われることが必要であること、「ハラーム」を行わないこと、これらを避けることが必要であることを信じることも、ムスリムであるためには必要です。ファルドを行い、ハラームを避けることが第一の義務であることを受け入れない人の信仰は失われます。「ムルタド」になります。それを受け入れたとしても、我欲や悪い友達に従ってファルドのうちのどれかもしくは複数を行わない人、もしくは一つあるいは複数のハラームを犯す人は、ムスリムではあるものの、過失のある、罪を犯したムスリムとなります。このようなムスリムは「ファースク」と呼ばれます。ファルドを行ってハラームを避けることを「崇拜行為」を行う、といいます。崇拜行為を行おうとする人、そこに不足があった場合にすぐに悔悟するムスリムを「誠実な人」と呼びます。

ここで、自由である国に住み、六信について、そしてよく知られたファルドや義務について知らないことは、正当な支障とはなりません。学ばないことは大きな罪です。学び、子供たちに教えることが必要です。重きを置かないために学ばないのであれば、カーフィルとなります。ただ「アシュハド アン ラーイラーハ イッラッラー ワアシュハド アンナ ムハンマダン アブドゥッラー ワラスールフ」といい、その意味を知って信じるカーフィルは、その時にはムスリムになったとしても、その後少しずつ六信や、すべてのムスリムにとってファルド、ハラームであるよく知られた知識を学ぶこと、知っている人、すなわちムスリムたちが彼に教えることが必要です。学ばなければイスラームから離れてしまい、「ムルタド」になります。彼

らは「**スンナ派の学者たちが書いた本**」から学ぶべきです。(スンナ派の知識を持たない教授たちの講演や本に惑わされるべきではありません。)

第2部

様々な知識

分離主義者と逸脱した法学派

ムスリムは二種類に区分できます。一つはスンナ派の法学派です。正しく真実であるのはこのスンナ派の法学派です。ムスリムは4つの法学派に分かれています。彼らの信条、信仰は同一です。そこに差異はありません。二つ目はスンナ派の信条を持たない人々です。彼らはビドゥアを持つ人、法学派に属さない人と呼ばれます。シーア派とワッハーブ派はこれに該当します。今日ではイブニ・タイミーヤ派、ジャマーラッディン・アフガニー、ムハンマド・アブドゥフ、サイード・クトゥブ、マウドゥーディ派、そしてタブリーグ・ジャマート及びワッハーブ派が、ビドゥアを持つ人々です。ワッハーブ派は自らを第5の法学派と呼びます。この言葉は正しくありません。「**第5の法学派**」というものは存在しません。今日、宗教的知識はこの4つの法学派のどれかのイルミハールの本から学ぶ以外にないのです。皆、自分にとって容易である法学派を選びます。すべての行いをその法学派に適した形で行います。彼はその「**法学派に倣ったこと**」になります。その法学派に属する人となります。皆、両親から見聞きし、学んだことを容易だと感じるため、ムスリムは母親や父親の法学派に属するようになります。法学派が一つだけではなく四つあることは、人間にとっての容易さです。一つの法学派から出て他の法学派に入ることは許されてはいますが、新しいものを学ぶために何年も勉強しなければなりません。そして以前の法学派を

学ぶための努力が無駄になってしまいます。さらに、以前の知識と新しいものを混同し、多くの行動において戸惑ってしまうかもしれません。一つの法学派が気に入らないといってそこから離れることは全く許されることではありません。なぜなら偉大な先人を軽視し、気に入らないことは教えへの憎悪に相当するといわれているからです。

パキスタンにおけるマウドゥーディやハミードウッラー、タブリーグ・ジャマート、そしてエジプトのジャマールッディン・アフガニー、カイロの宗教指導者ムハンマド・アブドゥフ、その弟子であるサイード・クトゥブ、ラシード・ルザーのような、正しい法学派にいない人々、彼らの本を読み 騙されてしまった人々は、各法学派を一つにまとめなければならないと訴えます。4つの法学派の容易な部分を選んでまとめ、イスラームを容易なものにしなければいけない、といいます。狭い視野や不十分な知識で、この思想を訴えるのです。彼らの本に目を通すなら、タフシール（クルアーンの解釈）、ハディース、フクフ（イスラーム法学）といった知識を持っていないこと、破綻した論理と飾り立てた文章で無知をさらしていることがすぐに読み取れます。なぜなら、

1. 4つの法学派の学者たちは、法学派を掛け持ちすることは逸脱であるとしています。つまり、いくつかの法学派に同時に従って行われるイバーダが、これらの法学派のどれにおいても認められるものでない場合、法学派を混ぜて行うことは逸脱であり、認められません。4つの法学派の学者たち（アッラーの慈悲がありますように）のこの一致した意見に従わない人は、この法学派のどれにも属さないことになります。法学派を持たない人となります。法学派を持たない人の行いは、イスラームにかなったものではありません。でっち上げになります。宗教を玩具としたことになる

のです。

2.ムスリム、イバーダをたった一つの道に押し込めることは、イスラームを困難なものとしします。アッラーとその預言者（アッラーの祝福と平安がありますように）がもし望まれておれば、すべてを明白に示され、物事はたった一つのやり方に従って行われていたでしょう。しかし、アッラーとその預言者（アッラーの祝福と平安がありますように）は人間に慈悲をかけられ、すべてを明白には示されなかったのです。4つの法学派の学者たち（アッラーの慈悲がありますように）の見解によって多くの法学派が生じました。誰かが困難な状態であれば、自らの法学派の中で容易な方を行います。さらに困難であれば、他の法学派に倣い、その行為を容易に行います。たった一つの法学派しかなければ、このような容易さもなかったでしょう。法学派を持たない人々、容易なものを集めたと思っている人は、気が付かないうちにムスリムの行いを困難にすることになります。

3.一つのイバーダの一部を、ある法学派に従って行いつつ、別の部分をこの法学派に従って行わず、他の法学派に従って行おうとすることは、一つ目の法学派のイマームの知識を気に入らないことになります。偉大な先人たち（アッラーの慈悲がありますように）を軽視することが教えへの憎悪であることは先に述べたとおりです。

イバーダを変えようと望む人、スンナ派の学者たち（アッラーの慈悲がありますように）を軽視する人は、歴史上たくさん存在しました。法学派の容易な部分を選び、4つの法学派をなくさなければいけないという人々が、法学派のイマームたちの本を1ページたりとも読んで理解していないことは明らかです。なぜなら、法学派や法学派のイマームたちの崇高さを理解するためには、学者である必要があるからです。学者である者は、無知をさらし、愚かな新しい

ことを打ち出して人々を滅亡に追い込んだりはしないのです。歴史を通して、こうして 登場してきた無知な人々、逸脱した人々に騙されてしまった人は、滅亡へと引きずられていきました。1400 年にわたってあらゆる世紀に現れ、ハディースで称賛されている「 **スンナ派の学者**」 に従ってきた人々は、幸福に至ったのです。私たちも、我々の父祖のあの誠実で清らかなムスリムたちが、アッラーのため、イスラームを広めるために命をささげた殉教者たちの正しい道にしっかりと結びつき、宗教改革者の有毒で有害な文章に騙されてはいけないのです。

しかし残念なことに、カイロのフリーメーソンロッジの会長であるアブドゥッフの有害な思想は、エジプトの「**ジャミーウル・アズハル**」神学校に広まりました。これによってエジプトでは、ラシード・ルザー、アズハル神学校学長ムスタファ・マラーギー、そしてカイロの宗教指導者アブドゥルメジッド・サリーム、マフムード・シェルトウトゥ、タンターウィー・ジェヴヘリ、そしてアブドゥルラーズク将軍、ザキ・ムバラク、フェルディ・ワジュディ、アッバス・アッカド、アフメッド・エミン、ターハー・フセイン教授、そしてカースム・エミン、ハサン・ベルナーのような「 **宗教改革者**」 が増えました。また一方で、彼らの師であるアブドゥッフになされたように、彼らは進歩的イスラーム学者と呼ばれ、その本はトルコ語に翻訳されました。無知な宗教者や若者たちが正しい道から滑落する要因となったのです。

偉大なイスラーム学者であり、14 世紀の指導者であったサイード・アブドゥルハキーム師（アッラーの慈悲がありますように）は、「カイロ宗教指導者アブドゥッフは、イスラーム学者の偉大さを理解できず、イスラーム世界に売られ、その後フリーメーソンとしてイスラームを内部から崩壊さ

せた手に負えないカーフィルの一人となった」と語っています。

アブドゥフのように、教えへの憎悪もしくはビドゥア、逸脱に追いやられた人々は、彼らの後に登場する若い宗教学者たちをも正しい道から滑落させるために、まさに互いに競い合っていました。「**ウンマの災いは、逸脱した宗教者から生じる**」というハディースが告げている災いの、先駆者となったのです。

アブドゥフが 1323 年（西暦 1905 年）に死去すると、育成した弟子たちはそのままとどまることなく、アッラーのお怒りや罰の要因になる多くの有害な本を出版しました。その一つがラシード・ルザーの「ムハーワラート」という本です。この本では、彼の師と同じように スンナ派の 4 つの法学派を攻撃し、法学派のことを思想の分裂だと見なしてイジュティハドの方法と条件を論争という形で示し、「イスラームの統一性を損なった」と言い切るほどの逸脱に陥っています。4 つの法学派のうちの一つに倣い、1000 年以上も生きてきた何百万もの純粋なムスリムたちを侮辱したのです。その世紀のニーズを満たすことを、教えや信仰を変化させることに求めようとするほど、イスラームから遠ざかっていました。宗教改革者が一致している唯一の点は、自らをムスリムの、そしてその世紀のニーズを把握し、深い教養を備えた誠実なイスラーム学者であると自称 することです。そして、イスラームの本を読み、理解し、預言者ムハンマドの相続人として吉報を伝えられ、「**時代のうち、最も尊いのは彼らの時代である**」というハディースによって称賛されているスンナ派の学者たちの道を行くような 真実の誠実なムスリムに対し、愚かな民のように考える模倣者といったことです。イスラームの規律や法学の知識を持たず、つまり宗教的知識を備えていない無知な人であること

を、彼らの話や文章が明白に示しています。預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）は、「人々のうち最も尊いのは、信仰が正しい学者である。」また「宗教学者たちは、預言者たちの相続人である。」「心の知識は、アッラーの神秘の一つの秘密である。」「学者たちの眠りはイバーダである。」「私のウンマの学者たちに敬意を払いなさい。彼らは地上の星である。」「学者たちは最後の審判の日にとりなしを行う。」「弟子たちの中の学者は、ウンマの中の預言者のようである。」というハディースにより、1300 年続くスンナ派の学者たちを称賛されているのではないのでしょうか。それとも、その後になって増えてきたアブドゥフとその弟子を称賛しているのでしょうか？この問いにも、預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）が答えておられます。「どの世紀も、その前の世紀よりもより悪くなる。このようにして最後の審判の日まで損なわれていくだろう。」「審判の日が近づくにつれて、宗教者たちは驢馬の死肉のように腐り、悪臭を放つだろう。」とされています。これらの聖ハディースは「テズキレイ・クルトゥビー・ムフタサル」で書かれています。預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）が称賛されたイスラーム学者たちのすべて、何千もの聖人たちのすべてが意見を一致させて伝えていることは、地獄から救われていることが吉報として伝えられている法学派は「**スンナ派**」と呼ばれる学者たちの法学派であるということです。スンナ派ではない人は地獄に行くこととなります。また、「**法学派を掛け持ちすること**」は逸脱であるとも伝えています。つまり、4 つの法学派の容易なところを集め、でっち上げの**法学派を作り出すこと**が逸脱でばかげたことであることを、意見を皆一致して伝えているのです。

知性を持つ人は皆、1000 年続いてきたイスラーム学者（アッラーの慈悲がありますように）が一致して称賛しているスンナ派に従うでしょうか？それとも、ここ 100 年で増えてきた文化的（！）、進歩的な無知な宗教者を信じるでしょうか？

地獄に行くことが聖ハディースで伝えられている 72 の法学派の有力者たち、雄弁な人たちは常に、スンナ派の学者たち（アッラーの慈悲がありますように）に対し、攻撃し、この真正なムスリムたちに汚点をつけようとしてきたものの、彼らに対してはクルアーンの言葉や聖ハディースで答えが与えられ、辱められたのでした。スンナ派に対して知識では勝てないことがわかると、山賊、盗賊のようなことをし始めました。どの世紀でも何千ものムスリムの血が流される要因となりました。スンナ派の 4 つの法学派に属する真のムスリムたちは、常に互いを愛し、兄弟として生きてきました。

預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）は、「**行為においてムスリムが法学派に分かれることはアッラーの慈悲である**」と仰せられました。1282 年（西暦 1865 年）に生まれ、1354 年（西暦 1935 年）にカイロで死去したラシード・ルザーのような宗教改革者は、各法学派を一つにして、イスラームの一体化を図るべき だと語ります。しかし預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）は、地上のすべてのムスリムは同一の信仰の道、4 大カリフの正しい道で一体化することを命じられました。イスラーム学者たち（アッラーの慈悲がありますように）が協調して努力し、4 大カリフの信条の道を基本としたのです。預言者ムハンマドが命令されたこの唯一の道に、「**スンナ派**」という名が与えられました。地上のすべてのムスリムはこの唯一の「**スンナ派**」の道で一体化す

ることが必要です。イスラームにおける一体化を求める人々が自分の言葉に誠実なのであれば、実際に存在するこの一体化に加わるべきなのです。しかし残念なことに、イスラームを内部から崩壊させようとするフリーメーソン、イギリス人たちは常にこうした金メッキを張ったような言葉でムスリムを騙し、「統一を図る」という仮面の下で、「信仰の統一」をばらばらにしたのです。

イスラームの敵たちはその最初の世紀以来、イスラームを消滅させようと努力してきました。現在も、フリーメーソンや共産主義者、ユダヤ教徒、キリスト教徒が様々な計画をもって攻撃しています。地獄に行くことが告げられている逸脱したムスリムたちも、正しい道にあるスンナ派を汚し、ムスリムを正しい道から離れさせるべく、計略や中傷を行っています。このようにして、イスラームの敵たちは一体となってスンナ派を崩壊させようと必死になっています。この攻撃の先駆者は **イギリス人たち** でした。帝国の資源、国庫、武力、装備、技術、政策と文筆家たちをこの低俗な戦いのために活用しました。これにより、世界最大の **イスラーム国家** であり、スンナ派の番人であったインドのムガル帝国（グーラカーニー）と、三大陸に広がっていたオスマン朝のイスラーム国家が崩壊しました。あらゆる土地でイスラームの貴重な書物を消し去りました。イスラームの知識を多くの地域から消し去り、掃き出したのでした。第2次世界大戦で、共産主義者が消えかかっていた頃には、これらが強められ、広められる要因となりました。ムスリムにとって聖地であるパレスチナでユダヤ教徒の国を造ろうとしていた **シオニズム** 組織は、イギリスの大臣の一人ジェイムズ・バルフォアが 1917 年に生み出したものです。イギリス政府はこの事業を何年も支援し、1366 年（西暦 1947 年）にイスラエルの建国を実現させまし

た。またイギリス政府は、アラビア半島をオスマン朝からとって サウード家を排し、 1351 年（西暦 1932 年）に逸脱した信条を持つワッハーブ派の国家の創設を実現しました。こうしてイスラームに最大の打撃を与えたのです。ワッハーブ派がイギリス人からの命令でヒジャーズ地方のムスリムに行った残虐行為、拷問は、「最後の審判と来世」という本の最後で詳しく書かれています。

アブドゥルラシッド・イブラーヒム師は、1328 年（西暦 1910 年）にイスタンブールで出版されたトルコ語の「イスラーム世界」という本の第 2 巻で、「イギリス人のイスラームへの敵意」という文章の中で次のように書いています。「イスラームのカリフが少しでも早く取り除かれることが、イギリス人の第一の思想です。クリミア戦争の要因となったこと、ここでトルコ人を助けたことは、カリフを滅亡させるための計略でした。パリ条約はこの計略を明らかにしました。（1923 年に行われたローザンヌ条約での提案においてイギリス人は、この敵意をはっきりと示しています。）ムスリムが直面する災いはいつも、どのような覆いで隠されていたとしても、イギリス人からもたらされたものです。イギリスの政策の基本はイスラームを無にすることです。この政策の理由は、イスラームへの恐れです。ムスリムを騙すために売られた良心の欠如した人々が利用されました。彼らをイスラーム学者、勇者として紹介します。要するにイスラームの最たる敵はイギリスです。」アブドゥルラシッド師は 1363 年（西暦 1944 年）に日本で死去しました。

イギリス人は何世紀にもわたってイスラーム国家を血に染めるだけでは満足せず、スコットランドのフリーメーソンは何千人ものムスリムや宗教者を騙し、フリーメーソンのメンバーとしました。「人類への支援、兄弟愛」といった言葉によって喜んで教えを離れ、ムルタドとなる要因をも

たらしめたのです。イスラームを完全に消失させるため、このムルタドのフリーメーソンメンバーは釣り針として利用されました。こうして、ムスタファ・ラシード・パシャ、アリー・パシャ、ファード・パシャ、タラート・パシャ、そしてエンヴェル・パシャといったフリーメーソンメンバーがイスラーム国家の崩壊のために利用されたように、ジャマーラッディン・アフガニー、ムハンマド・アブドゥフといったフリーメーソンメンバーや、彼らが育成した弟子たちも、イスラームの知識を損なって失わせるための道具となったのです。フリーメーソンメンバーであるこれらの宗教者たちが書いた何百もの破壊的な本の一つである、エジプトのラシード・ルザーの「ムハーワラート」という本は、様々な言葉に訳され、イスラーム国家で広められ、ムスリムの教えと信仰を壊そうとしています。スンナ派の学者たち（アッラーの慈悲がありますように）の本を読まず、理解できない一部の若い宗教者たちもこの流れに加わり、滅亡へと引きずり込まれていき、他者の滅亡の要因ともなったことが明らかです。

「ムハーワラート」の本の 88 ページでは、スンナ派が 4 つの法学派に分裂し、イスラーム知識の 4 つの源である「**ウンマの意見の一致**」が否定され、皆、啓典やスンナから自分が理解したように行動するべきである、とされています。こうしてイスラームの知識を根こそぎ消し去ろうとしたのです。私たちはムスリムの兄弟たちに、この本の異常さ、有害さを教えるため、「**宗教者は分裂主義者ではない**」という本を書き、トルコ語、英語、アラビア語で出版しました。さらに偉大なイスラーム学者アブドゥルガーニ・ナブルス（アッラーの慈悲がありますように）の「**フラサトゥッタフキーク・フィー・ベヤーン・ヒュクム・イッタクリード・ワッターフィク**」及びユースフィ・ネバハーン

（アッラーの慈悲がありますように）の「フジェトゥッラーヒ・ アラルアーラミーン」、そしてムハンマド・ハヤート・シンディーの「ガーヤトゥッタフキーク」の書簡、そしてインド人の学者であるムハンマド・アブドゥルラフマン・シルベティー（アッラーの慈悲がありますように）の「サイフル・アブラール」といった本が、こういった有害な本に対する完全な返答となることを見て、この4冊の本もオフセットで印刷、出版しました。

「フラーサトゥッタフキーク」の最後では次のように書いています。「ムスリムは、ムジュタヒドになるか、あるいはイジュティハドの位階には到達しない。ムジュタヒドも、「**絶対的なムジュタヒド**」になるか、あるいは、「**非絶対的なムジュタヒド**」になる。絶対的なムジュタヒドが、他のムジュタヒドの模倣をすることは許されない。自分のイジュティハドに従うべきである。非絶対的なムジュタヒドは、絶対的なムジュタヒドの法学派のやり方に従うことがワーズブとなる。このやり方に従って行うことが、自らのイジュティハドに適う。

ムジュタヒドではない人は、4つの法学派のうち望むものに従う。しかし、ある行為をある法学派に従って行う際には、その法学派が、その行為が有効となるための条件としていることのすべてを実行することが必要である。その条件のうちの一つを行っていないのであれば、その行為は無効となる。これが逸脱となることは意見の一致として伝えられている。ある法学派がより優れていると信じることは条件ではないが、皆、自分の法学派がより優れていると信じるのが望ましい。崇拜行為、あるいは仕事を行う際、複数の法学派に「**倣って行うこと**」、つまり一つのことをそれぞれの法学派の互いに合致していない言葉に依じて行うことは、4つの法学派を離脱し、5つ目の法学

派を生み出すことになる。これは、ここで混合 されているどの法学派においても有効とはならない。逸脱となる。教えを弄んだことになる。このため、「大汚」の状態よりは少なく、「2 クッラ」と呼ばれる量よりも少なくない水の中に汚物が入り込み、水の色、匂い、あるいは味が変わっておらず、この水によってウドゥーを行う際にニーヤを行わず、そしてウドゥーで洗うべき場所を順番に洗わず、濡らさず、順に続けて洗わず、「ビスミッラー」と唱えて始めていないのなら、このウドゥーは4つの法学派のイマームたちの誰においても有効とはならない。これを有効というものは、5 目の法学派をでっちあげたことになる。ムジュタヒドですら、4 つの法学派の一致した見解に従わない、5 目の言葉を言い出すことは許されない。」（ここで言及された「2 クッラ」の水がどういう意味であるかは、「永遠の幸福」の本で詳しく説明されています。）サドウル・ウッシャーリアは「タウディーフ」という本で次のように書いています。「あることを行う上で、教友から2種類の伝承が伝わっている場合、後世の者が3つ目を言い出すことは許されない、という点で意見が一致している。それぞれの時代の学者たちも、教友のようであると言う人々もいた。」モッラ・フスレヴ（アッラーの慈悲がありますように）は「ミラートゥル・ウスール」で次のように書いています。「あることを行う上で、最初の世紀の学者たちから、互いに類似していない二つの伝承が伝わっている場合、このことについて3つ目の言葉を言い出すことは許されない、ということが一致した意見として伝えられている。どの時代の学者たちも、教友のようであるということは有効である。」「ジャラーライン」のタフシール（クルアーンの解釈本）の最初の著者であるジェラーレディニ・ミハッリーはス्यूティの「ジャムール・ジャワー ミ」の解説 で次のように書いています。

「イジュマ（一致した意見）に対立することはハラームである。クルアーンの言葉で拒否されている。このため、先人が論争している事柄について3つ目の意見を言い出すことはハラームとなる。」

一つの行為を、2、3、もしくは4つの法学派の互いに合致していない言葉によって行うことは、これらの法学派のイジュマを損ないます。この行為はこれらの法学派のうちどれにおいても有効とはなりません。つまり、「掛け持ち」は許されないのです。カースム・ビン・カトゥルーベガは「タスヒーフ」で次のように書いています。「一つのことを複数のイジュティハドに従って行うことが許されないことであることは、意見の一致として伝えられている。このため、ウドゥーを行うときに頭のすべてを濡らさない人が、犬に触れてから礼拝を行えば、その礼拝は有効とはならない。このような礼拝は一致した意見で逸脱となることを、シャーフィー派の学者シハーブッディン・アフマド・ビン・イマードゥ（アッラーの慈悲がありますように）の「タウキーフ・ヒュカーム」という本でも書かれている。」上記に登場する人は、頭のすべてを濡らしていないためイマーム・マーリク（アッラーの慈悲がありますように）が、犬に触れたためイマーム・シャーフィー（アッラーの慈悲がありますように）が、彼のウドゥーと礼拝は有効とはならないと告げています。

ハナフィ派の学者ムハンマド・バグダーディー（アッラーの慈悲がありますように）は、「タクリード」の書簡で次のように書いています。「別の法学派に基づいて行うためには3つの条件がある。一つ目の条件は、イブニ・ヒュマームが「タフリール」で書いているように、自らの法学派のやり方で始めたことを、他の法学派に従って完了させることはできません。例えば、ハナフィ派によって行われたウド

ウーによって、シャーフイー派に基づいて礼拝を行うことはできません。二つ目の条件は、イブニ・ヒュマームが「タフリール」でアフマド・ビン・イドリス・カラフィーから引用して書いているように、その基準の従った二つの法学派も、この「掛け持ち」について逸脱だと言わないことです。ウドゥーを行う際、シャーフイー派に従って触れるべき部分に触れず、マーリキー派に従って結婚することが許されている女性に触れた場合、このウドゥーで行った礼拝は、この2つの法学派において有効とはなりません。3つ目の条件は、それぞれの法学派の容易な点を集めないということです。イマーム・ナワウィーや多くの学者は、この条件を非常に重要視しています。イブニ・ヒュマームはこの条件を伝えていません。ハセン・シェルンブラーリーは「イクドゥル・フェリード」で次のように書いています。「ハナフィ派に従い保護者なしで、もしくはマーリキー派に従って証人なしで行われた二つの婚姻は、どちらも有効となる。しかし、保護者も証人もなしで行われた婚姻は有効とならない。」一般の人々がこの条件に留意するのは非常に困難であり、無知な人々が別の法学派を基準とすることは、やむを得ない場合を除き、拒否されています。学者に質問し、学ぶことなく、基準とすることは有効とはならないとされています。」ムハンマド・バグダーディーの言葉はここまでです。

イスマーイル・ナブルシー（アッラーの慈悲がありますように）は、「ドゥレル」の解説において「イクドゥル・フェリード」から引用し、次のように書いています。「人が、一つの法学派に結びついていることは条件ではない。他の法学派に倣って物事を行うこともできる。しかしこの物事のためにその法学派で条件とされている事柄のすべてを実行することが必要である。互いにかかわりのない二つの仕

事は、二つの法学派に倣って異なるやり方で行うことができる。」他の法学派を倣って行う際、条件のすべてを実行することが必要ということは、掛け持ちが有効ではないことを伝えています。

ハナフィー派の学者アブドゥルラフマーン・イマーディ（アッラーの慈悲がありますように）は、「ムカッディメ」という本で次のように書いています。「人は、やむを得ない場合、他の3つの法学派のうちの1つを基準とすることができる。しかしその法学派がその行為について条件として伝えていることのすべてを行う ことが必要である。例えば、ハナフィー派に属する人がシャーフイー派に倣って汚物が混入した2クッラの水でウドゥーを行う場合、ニーヤを行い、そのやり方に留意し、イマームの背後でファーティハ章を唱えること、ルクウの所作を完全に行うことが必要である。これらを行わなければ、礼拝が逸脱したものとなることが一致して伝えられている。」他の法学派を基準とするために、やむを得ない状況であると書くことは必要ではありません。ここでやむを得ないということでそのニーズを伝えているのです。なぜなら、学者の多くによると、人は常に別の法学派を基準とすることができるからです。この文章は、掛け持ちが有効ではないことを示しています。

イブン・ヒュマームの「タフリール」という本に、掛け持ちが有効であると示す文章はありません。ムハンマド・バグダーディーやイマーム・ムナーウィー、イブン・ヒュマームの「ファトゥフ・ウル・カディール」という本で、「イジュティハドや証拠によって別の法学派を掛け持ちすることは罪である。罰を受ける。イジュティハドや証拠のない掛け持ちはさらに悪いものである。ここでの掛け持ちとは、行為や崇拜行為を別の法学派を基準にして行うことである。掛け持ちした、というだけでは済まない。これは

約束といわれる。掛け持ちとは言わない。このような約束をして、その法学派に従うことはワージブではない。「知らないことを知っている人に尋ねなさい」というクルアーンの言葉は、学者だと思われる（そのように考えられている）人に判断を求めないことを要求する。学者たちが法学派の変更を禁じるのは、法学派のうちの容易なところを集めようとするのを防ぐためである。多くの学者によれば、すべてのムスリムはそれぞれ異なる行為において自分にとって容易であるイジュティハドに従うことができる。」といったことが知られている。無知な人が、イブニ・ヒュマームの「どのムスリムも、それぞれの行為において自分にとって容易であるイジュティハドに従うことができる」という言葉を、掛け持ちが有効であることを示すものだといったとすれば、その見解は誤りである。なぜならその言葉は、その行為のすべてを一つの法学派に従って行うことを示すからである。一つの行為を様々な法学派に従って行うことを示してはいない。このことを理解できない、法学派に属さない人々や宗教改革者たちは、イブニ・ヒュマームを自分たちのための偽りの証人として示している。しかしイブニ・ヒュマームは「タフリール」で、掛け持ちが許されないことを明白に書いている。

宗教改革者たちは、イブニ・ヌジャイム（アッラーの慈悲がありますように）がカーディハーンの宣言において、ワクフ（宗教寄進）の土地が高く見せかけて売られた場合、アブー・ユースフによれば「高く見せかけている」ために許されない。イマーム・アーザムによれば、ワクフの係員が販売のために雇った代理人が「高く見せかけて」売るとは許される、という。アブー・ユースフによると、ワクフが為替によって売られること、アブー・ハナフィィによれば代理人が「高く見せかけて」売ることが許され、この二

つのイジュティハドを一緒にして、この販売は有効である、とした文章を、掛け持ちが有効となることの例として示している。しかしここでの掛け持ちは、一つの法学派の中でのことである。二つの言葉は、同じやり方から来るものである。二つの法学派の掛け持ちとは、こういったことではない。イブニ・ヌジャイムは掛け持ちについて許されるとは言っていないことは、「ケンズ」という本に対して行った「バフル・ウル・ラーイク」という解説の、『別の法学派の集団礼拝を先導するイマームは、その法学派の条件に従うことが必要である』という言葉からも理解できる。」「フラーサトゥッタフキーク」の最後の部分の翻訳はここまでです。

インド人の学者ムハンマド・アブドウルラフマーン・シルヘティ（アッラーの慈悲がありますように）は、「セイフ・ウル・エブラル・イル・メスルール・アラル・フジヤール」という本で、ペルシア語で次のように書いています。ハーフズであるハサン・ビン・ムハンマド・ターイビーは「ミシュカット」の解説で、「容易にしないで、困難にしないでください」というハディースの解説を行い、「各法学派の容易なところを集める人はズンドゥクとなる」と書いています。ターイビーは 743 年（西暦 1343 年）にダマスカスで死去しました。「セイフ・ウル・エブラル」の本の初版は 1300 年（西暦 1882 年）にインドで出されました。ハキークト出版によって 1415 年（西暦 1994 年）に再販されています。ここで言われていることは以下の通りです。

1. ムスリムは、一つの崇拝行為、一つの行為を行う際、4 つの法学派のどれかに従うことが必要です。4 つの法学派の学者たちとは別の学者に従うことは許されません。
2. ムスリムは、自分にとって容易である、自分の望む法学派に属することができます。一つの行為をある法学派に従い、

別の行為を別の法学派に従って行うことができます。

3.一つの行為を複数の法学派に従って行うことについては、その法学派の一つにおいてその行為の有効性のために条件とされている事柄のすべてを行う必要があります。その行為はこの法学派において有効となります。これを「タクワー」といいます。」この法学派に倣い、他の法学派にも留意したことになります。一つの法学派を基準とすることは、そのすべての条件を満たすことで許されます。一つの崇拜行為、一つの行為が基準としている法学派のどれにおいても有効ではないのであれば、これは「掛け持ち」と呼ばれます。これはどのような形であれ許されません。

4.人は、選択した法学派にいつでも属していなければいけないわけではありません。望み通りの時に、他の法学派に移ることはできます。ある法学派に属するためには、その法学派の法学的な知識を十分に学ぶことが必要です。これはイルミハールの本から学ぶことができます。そのために、いつでも一つの法学派に属していることがより容易です。一つの法学派から離れ、他の法学派に移ること、もしくはは何らかの行為で他の法学派を基準とすることは困難なことです。ほかの法学派は、ただニーズがある時、必要な時に、すべての条件を満たして、はじめて基準とすることができるのです。

他の法学派の法学的知識を学ぶことは困難であり、無知な人々、つまり法学的知識がない人が、他の法学派を基準とすることを法学者たちは拒否しています。例えば、「バフル・ウル・ファターワー」では、「ハナフィ派の人の傷からずっと出血があり、礼拝ごとにウドゥーを行うことが困難であれば、シャーフイー派に従って礼拝を行うことは許されない」と言われています。なぜなら、シャーフイー派の条件も満たされない限り、礼拝は有効とはならないからで

す。イブニ・アービディンは罰についての項目でこのことを詳しく説明しています。スンナ派の学者たち（アッラーの慈悲がありますように）は、無知な人々の イバーダが害されることを防ぐため、やむを得ない事情がない限り、法学派を基準とすることを許していません。

タフターウィーは「ドゥッル・ウル・ムフタル」の注釈において、ゼバユフの項で次のように書いています。「タフシール学者の一部は、**イムラーン家章第 103 節の『あなたがたはアッラーの絆に皆でしっかりと縋り』**という言葉、法学者が教えることにすぎりなさい、という意味であるとしています。法学の本に従わない人々は、逸脱し、アッラーの助けを得られなくなり、地獄の炎に焼かれます。信仰する皆さん。クルアーンのこの言葉について考え、地獄から救われることが吉報として伝えられている「**スンナ派**」にしっかりと結びついてください。なぜならアッラーのご満悦、援助はこの法学派に属する人に与えられるからです。この法学派にいない人々にアッラーは立腹され、地獄で罰せられます。スンナ派であるためには、4 つの法学派のどれかを基準とすることが必要です。この法学派のどれかに従わない人は、スンナ派ではありません。73 の法学派のうちのたった一つが、このスンナ派です。これ以外の 72 の法学派はビドゥアに陥っています。地獄に行くこととなります。彼らを「**宗教改革者**」と呼びます。ズンドゥクとなることから救われるためには、一つの法学派に入ること、すなわちスンナ派であることが必要です。」4 つの法学派から容易なものを集めようとする人は、4 つの法学派のどれにも従わず、スンナ派から離脱した人となります。法学派に属さない人となります。このように、4 つの法学派のどれにも属さない人は、法学派を持たない人となります。4 つの法学派を掛け持ちする人も、法学派を持たない人となり

ます。4つの法学派のうちただ一つを基準にしている、信条がスンナ派の信条に適合していない場合、その人も法学派を持たない人となります。この三種類の人は、スンナ派ではありません。ビドゥアに陥った人々です。逸脱の道を基準としているのです。真のムスリムは、4つの法学派のうち一つ、つまり正しい道を基準とし、スンナ派となります。4つの法学派の信仰の知識は同じです。崇拜行為において小さな差異があったとしても、この違いはアッラーの慈悲です。皆、4つの法学派のうち、自分にとって容易であるものを選びます。

知識がなければ、教えはそこから消え去ってしまう

だから、無知と呼ばれる闇から

救われる努力とすべきである 皆、誰でも

あの災いという教訓 は、不十分だったというのか？

あの災いという教訓 が、何をもたらしたか、考えてみなさい

脳が溶け、涙のように目から滴った

あの最後の出来事が何を意味するか、あなたが知ることがあれば

人々が我に返らない限り、民族は去ることになる

なぜなら、新しい揺さぶりには耐えられないから

なぜなら、今度は死の眠りから目覚めないから

道徳を正し、科学を学ばなければならない

教えにすぎり、その原子から武装した兵とならなければならない

教えの知識、戦いの力 が進んだものでなければならない

この二つのみが、民族に安らぎを与える

もはや他の言葉に騙されるな、目を覚ましなさい

この二つが、審判の日にあなたの顔を輝かせる

スンナ派の信条

この文章を、アッラーに感謝しながら書いています。感謝は、すべての恵みをアッラーが創造されたこと、贈られたことを信じること、それを語ることを意味します。恵みとは、役に立つものを意味します。感謝は、すべての恵みをイスラームの規律に従って用いることを意味します。恵みについてはスンナ派の学者の本でも書かれています。スンナ派の学者とは、著名な4つの法学派の学者たちです。

イマーム・ムハンマド・ガザーリー（アッラーの慈悲がありますように）は、「幸福の錬金術」という本で次のように書いています。「ムスリムである人はまず、『ラーイラーハ イッラッラー ムハンマダン ラスー ルッラー』という言葉の意味を知り、信じるのがファルドとなります。この言葉を「信仰告白」と呼びます。ムスリムは信仰告白の意味を全く疑うことなくただ信じる必要があります。これらを根拠によって証明したり、理論にあてはめたりすることはファルドではありません。預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）はアラブ人に、根拠とともに知ること、それらの根拠を語ることを命じられてはいないのです。ただ信じることを命じられました。皆がこのように信仰すればよいのです。しかし、それぞれの町に数人の宗教学者が存在することは、ファルド・キファーヤ（ある地域で、十分な数の人がそれを行うことで、それを行わない人々も罪にならないこと）です。彼らが根拠を知ること、疑いを解消すること、質問に答えることはワージブです。彼らは信者の羊飼いのようです。一方で、彼らに信条、信仰の知識を教え、彼らの信条を守ります。一方で宗教上の敵の中傷に答えるのです。

信仰告白の意味について、預言者ムハンマド（アッラー

の祝福と平安がありますように) もクルアーンを教えるうえで、この伝えられる内容の解説をされています。教友たちは皆、この解説を学び、自分たちの後の世代に伝えたのです。教友たちが伝えたことを、決して変えず、そのまま本として 私たちに残した高位の宗教学者たちを「**スンナ派の学者**」と呼びます。幸福の種はこの信条にあり、この信条と一体化することです。

信仰告白の意味を、スンナ派の学者は次のように伝えています。「元々、人間 は存在しませんでした。後になって創造されました。人間 にはある創造主が存在します。すべての存在をそのお方が創造されました。この創造主は唯一であり、比類なき、並ぶものなきお方です。後継者もいません。そのお方は常に存在します。その存在には始まりがありません。常に存在しています。存在の終わりもありません。いなくなることもありません。そのお方は常に存在し続けます。いなくなることはありません。その存在は自らによるものです。どのような要因も必要としません。そのお方を必要としないものは何もありません。すべてを存在させられ、すべての存在をあらゆる瞬間に、存在のままで留められるのもそのお方です。そのお方は物体ではありません。物質でもありません。ある場所に存在するという訳ではないのです。どのような物質にも存在しません。形はありません。測ることもできません。どのようなか、と質問することはできません。「そのお方」と聞いて思いつくすべてのものは、そのお方ではありません。それらは全て、そのお方の創造されたものです。そのお方は被造物と同じではありません。思いつくようなものは全て、そのお方が創造されたものです。上、下、そばにはおられません。場所はありません。すべての被造物は、天のもとにあります。天は、そのお方の力、強さの下にあります。

す。そのお方は天を超越したところにおられます。しかしこれは、天がそのお方を載せているという意味ではありません。天はそのお方の恵みと力によって存在します。そのお方は、無限の始まりにおいてどのように存在されていたのであれ、今でも常にその通りに存在されています。天が存在する前にどのようなであられたのであれ、無限の永遠においてもずっとそのままでおられます。そのお方には変化はあり得ません。そのお方には特性があります。スブート（必須条件であるもの）の特性は8つあります。ハヤート、イリム、セミイ、バサール、クドゥラ、イラーダ、カラーム、タクウィンです。これらの特質には変化はありません。変化があるとは、不足を意味します。そのお方には不足、欠点はありません。どの被造物にも似ておらず、この世界では、そのお方が教えられただけのことを知り、来世ではそれを見るのです。ここではどのようなであるかは理解されることなく、ただ認識されます。あちらでは、理解されることなく、目にするのです。（第1部第46の手紙を読んでください。）

クッルマー ハタラ ビーバーリケ、アッラーフガイルザーリケ

アッラーはしもべたちに、預言者たち（アッラーの慈悲がありますように）を遣わされました。この偉大な人々を媒介として、しもべたちに幸福や滅亡の要因となる事々を教えられました。預言者たちのうち、最も崇高であり、最後の預言者であるのは「ムハンマド」（アッラーの祝福と平安がありますように）です。この地上で、教えを持つ、持たないを問わず、皆に、各地に、すべての民族に預言者として遣わされました。すべての人々、天使たち、ジンたちの預言者です。世界のあらゆる場所で、皆がこの崇高な預言者に属すること、従うことが必要です。イマーム・ガザ

リーの記事はここまでです。イマーム・ガザーリー（アッラーの慈悲がありますように）は、イスラームの最も偉大な学者の一人です。何百もの本を書きました。本のすべてがとても貴重なものです。ヒジュラ歴450年に、トゥース、つまりメシュヘドの町で生まれ、505年（西暦1111年）にその地で死去しました。

偉大な学者であり、偉大な師であるサイード・アブドゥルハキーム・アルワシー（アッラーの慈悲がありますように）は次のように語っています。「アッラーの使徒（アッラーの祝福と平安がありますように）には三種類の任務がありました。一つ目はクルアーンの規律、つまり信じるべき知識や法の定めをすべての人に広め（**タブリーグ**）、教えることでした。法の定めとは、行うことが命令もしくは禁止されている事柄です。この知識を「**イスラームの規律**」といいます。二つ目の任務は、崇高なるクルアーンの示すところ、すなわちアッラーの特性に関する知識を、ウンマの中でも位階の高い人々の心に伝えることです。この任務は、一つ目のタブリーグの任務と混同されるべきではありません。法学派を持たない人々は、この二つ目の任務を信じません。しかしアブー・フライラ（アッラーのお喜びがありますように）は、「アッラーの使徒（アッラーの祝福と平安がありますように）から2種類の知識を得ました。このうちの一つはあなた方に伝えました。二つ目について話せば、あなた方は私を殺すでしょう」と話しています。アブー・フライラのこの言葉は、「**ブハーリー**」、「**ミシュカート**」、そして「**ハーディカ**」及び「**書簡集**」の翻訳版の第267の書簡で書かれています。三つ目の任務は、法の定めるところを、説話や説教によっては実行しないムスリムたちに、力を行行使して強制的に実行させることです。」

預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますよ

うに)の後、四大カリフのそれぞれ(アッラーのお喜びがありますように)はこの三つの任務を完全に成功させました。聖ハサンがイマームであった時代、扇動やビドゥアが増加しました。イスラームは三大陸に広がりました。預言者ムハンマド(アッラーの祝福と平安がありますように)の光は地上から遠ざかりました。教友たちは数が減っていました。この三つの任務を一人では行えないようになりました。この三つの任務は、それぞれ異なる三つのカテゴリに分けられました。イスラームの形式、手順を教える任務、つまり信仰とイスラームの規律を教える任務は、宗教指導者、つまりムジュタヒドに与えられました。このムジュタヒドのうち、信仰を教える人を「ムタカッリミーン」、法、すなわちイスラームの規律を教える人を「フカハー」と呼びます。二つ目の任務、つまり希望するムスリムに、崇高なるクルアーンの精神的な定めと出会わせる任務は、預言者ムハンマドの家系である12人のイマームと神秘主義の有力者たちに与えられました。ジュナイド・バグダーディーとスッル・イ・サカーティはその例です。ジュナイド・バグダーディーはヒジュラ歴207年に生まれ、298年(西暦911年)にバグダッドで死去しました。スッル・イ・サカーティは251年にバグダッドで死去しました。

(スンナ派の学者は、預言者ムハンマド(アッラーの祝福と平安がありますように)のこの二つ目の任務を12人のイマームから学び、神秘主義の知識を生じさせました。一部の人々は聖人や奇跡、神秘主義を信じません。彼らが信じていないということは、12人のイマームとの関わりのなさを示すものです。預言者ムハンマドの家系であったとすれば、預言者ムハンマドのこの二つ目の任務について12人のイマームから学び、神秘主義の学者や聖人を育成していたことでしょう。彼らは育成もしなかつただけでなく、そ

の存在をも信じていません。明らかなことは、12 人のイマームはイマームです。預言者ムハンマドの家族を愛し、12 人のイマームの道を行く人々が、スンナ派です。イスラーム学者になるためには、預言者ムハンマドのこの二つの任務において彼の後継者となる必要があります。つまり、この二つについて専門的に知っている 必要があります。このような偉大な学者の一人であるアブドゥルガーニ・ナブルシーは、「ハディーカトゥン・ナディーヤ」という本の 233 ページ以降で、そして 649 ページで、クルアーンの精神的な規律を示す聖ハディースを示し、これを信じないことが無知と不運のしるしであることを書いています。）

三つ目の任務、すなわち教えの規律を力によって、強制的に統治として行わせることは、統治者、皇帝、つまり支配階級に与えられました。一つ目に属する部分を「**メズヘブ**」と、二つ目に属する部分を「**タリーカット**」と、三つめを「**カヌーン**」と呼びました。信仰を教えるメズヘブを「**信条におけるメズヘブ**」といいます。信条におけるメズヘブが 73 に分裂し、そのうちのただ一つが正しく、それ以外は誤ったものとなることを、預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）が伝えておられます。そして事実その通りになっています。正しい道にあることが吉報として伝えられた法学派を「**スンナ派の**」メズヘブと呼びます。誤ったものであることが告げられている 72 の法学派を「**ビドゥアの法学派**」、すなわち逸脱と呼びます。これらのうち誰も、カーフィルではありません。皆、ムスリムと呼ばれます。しかし 72 の法学派のうちのどれか一つに属することを明らかにする人は、クルアーンもしくはハディースで明白に伝えられて ムスリムの間でも広く知られる知識の一つを信じないのであれば、カーフィルとなります。今日、「**スンナ派**」のメズヘブから抜け、逸脱し、も

しくはカーフィルとなり、ムスリムの名を名乗っている人が多いです。」アブドゥルハキーム師の文章はここまでです。彼はヒジュラ歴 1281 年にワン県のバシュカルで生まれ、1362 年（1943 年）にアンカラで死去しています。バグルム近郊で埋葬されています。

ムスリムは、ゆりかごから墓場まで、知識を身に着ける必要があります。ムスリムが学ぶべき知識を「ウルー ミ・イスラーミーヤ」と呼びます。ウルーミ・イスラーミーヤ、すなわちイスラームの知識は 二つに区分されます。

1.ウルー ミ・ナクリーヤ 2.ウルー ミ・アクリーヤ

1.ウルー ミ・ナクリーヤ：宗教的知識のことです。これらの知識は、スンナ派の学者たちの本を読むことで、学ぶことができます。宗教学者たちはこれらの知識を「エディッレイ・シャーリア」と呼ばれる 4 つの源から得ています。この 4 つの源は、クルアーン、聖ハディース、ウンマのイジュマ、そして類推です。

宗教的知識も二つに分けられます。「ウルー ミ・アーリーヤー」すなわち高等な宗教的知識と、「ウルー ミ・イブティダーイヤ」すなわち実用的な 知識です。高等な宗教的知識は 8 つに区分されます。

1.タフシールの知識：この知識の専門家を「ムフェッシル」と呼びます。ムフェッシルとは、神の言葉から神のご意思を理解する相当の学者です。

2.ハディースに関する知識：この知識は、ハディースの種類分けを行いうものです。聖ハディースの種類は、「永遠の幸福」という本の第 2 巻、第 6 部で書かれています。

3.ハディースに関する知識：この知識は、預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）の言葉、行動、様子を研究します。

4.言葉の様式に関する知識：この知識は、言葉に関する知識

が、クルアーンの言葉や聖ハディースからどのように読み取られるのかを説きます。

5.言葉に関する知識： 信仰告白の言葉、タウヒードの言葉、それらに属する信仰の6つの条件を説きます。これらは心で信仰されるべき項目です。言葉に関する研究をする学者たちは、言葉の様式及び言葉に関する情報を一緒に書くことを習慣としています。無知な人々はそのために、この二つの知識をただ一つの、言葉に関する知識と見なしています。

6.フィクフの様式に関する知識： この知識は、フィクフの知識を、クルアーンや聖ハディースからどのように読み取るべきかを教えます。

7.フィクフに関する知識： この知識は、「行う責任のある行為」、すなわち知性を持ち、思春期以上に達している人が、その体によってどのように行動（崇拝）するべきかを教えます。体のために必要な知識です。「行う責任のある行為」は、ファルド、ワージブ、スンナ、ムスタハブ、ムバフ、ハラーム、マクルフ、そしてムフシドの8種類ですが、簡単には3 つに区分されます。命令されたこと、禁じられたこと、許容されたことです。

8.タサツフの知識： これは「道徳の知識」とも呼ばれます。心で行うことが、命令、もしくは禁じられたことを教えることと同様、信仰が良心となること、そしてフィクフの事柄を喜んで容易に行えるようになること、アッラーへの智に至る道のりを助けます。

男女ともすべてのムスリムは、この8種の知識のうち、言葉、フィクフ、そしてタサツフの知識、すなわちイスラームを必要なだけ学ぶことは、各自が実行すべきファルドであること、学ばないことは罪であることを、「ハーディカ」の本の筆者（アッラーの慈悲がありますように）は323 ページで、そしてイブン・アービディンの前書きで伝え

ています。

2.ウルー ミ・アクリーヤ：これらは経験による知識とも呼ばれます。これは化学的知識と文学的知識との二つに区分されます。ムスリムがこの知識を学ぶことは、ファルド・キファーヤ（その地域内で一定の人数が実行することがファルドであるもの）です。宗教的知識は、必要であるもの及び戦いで使用される武器について学ぶことについて は皆がそれぞれに実行すべきファルドです。必要以上のもの、及び戦いで使う武器について熟練することはファルド・キファーヤです。一つの町でこのことを知っている一人の学者が、それを行う中枢 にいなければ、その町に住む人及び統治者が罪を犯したことになるのです。

宗教的知識は時が経っても 変わることがありません。言葉についての知識において思想を発展させ、誤ること、誤解することは、弁解の余地なく 罪となります。フィクフにおける事柄において、イスラームが示す支障、イスラームが教える変化、容易さは 活用することができます。自分の考え、見解において変化させること、宗教的事柄において改革を行うことは決して許されません。教えからの逸脱の要因となります。ウルーミ・アクリーヤにおいては、変更、更新、発展は許されます。これらについてはカーフイルからも探し、見つけ、学び、実行することが必要です。メアーリフ・ナーズル・アフマド・ズフド・パシャ（アッラーの慈悲がありますように）がまとめた「マジュムア・イ・ズフディーヤ」という本の冒頭をいかに記します。フィクフという言葉は、アラビア語では「フェクハ」「イエフカフ」という形で用いられる時、つまり4つ目の用法の場合、知ること、理解することという意味になります。5つ目の用法の場合、イスラームを知ること、理解することを意味します。イスラームの規律を 知る学者を「ファーキ

フ」と呼びます。フィクフの知識は、人が行う 必要のあること、行ってはならないことについての 事柄を教えます。この知識を「**イスラームの規律**」とも呼びます。フィクフの知識は、クルアーンから、聖ハディースから、ウンマの意見の一致から、そして類推から読み取られます。教友、あるいは彼ら以降に生まれてきたムジュタヒドたちの意見の一致を「**ウンマの意見の一致**」と呼びます。クルアーンもしくは聖ハディース、もしくはウンマの意見の一致から読み取られたイスラームの規律を、「**クヤースィ・フカーハ**」と呼びます。ある行いがハラールであるかハラームであるかがクルアーンもしくは聖ハディースから理解できない場合は、この行為は既知の行為と類似するものとされます。これを「**類推**」と呼びます。類推を行うためには、その行為をハラールもしくはハラームとする要因が最初の行為においても存在することが必要となります。これも、イジュティハドの段階に到達している学者たち（アッラーの慈悲がありますように）が理解することのできるものです。

フィクフの知識は非常に広いものです。これらは皆、大きく4つに分類されます。

1.イバーダ： 崇拝行為 であり、これは5つに分類されます。礼拝、断食、喜捨、巡礼、聖戦です。それぞれには多くの細かい分野があります。ここで分かるように聖戦のための用意を行うのは イバーダです。預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）は、敵との聖戦には2種類あると告げられています。行為によるもの、そして言葉や文章によるものです。行為によって聖戦に備えること、つまり武器を作り、使い方を学ぶことはファルドです。この聖戦は国家が行います。人々は国家の法、指示に従い、聖戦に参加することがファルドです。現在においては2つ目の戦い、つまり宗教を持たない人々が、文章、映画、ラジ

オ、あらゆるプロパガンダで攻撃をしてきています。これに対応することも聖戦です。

2.ムナーカハート：結婚、離婚、扶養、そのほか多くの分野が属します。

3.ムアーマラート：売買、賃貸、企業、利子、遺産といった多くの項目があります。

4.ウクーバート：つまり刑罰であり、5 つに分類できます。報復、窃盗、姦淫、中傷、宗教の放棄、すなわちムルタドになることについての罰です。（この 4 つの事柄は「永遠の幸福」）で詳しく語られています。

フィクフの、イバーダの部分を一通り学ぶことは、すべてのムスリムのファルドです。ムナーカハートとムアーマラートの部分を学ぶのは、ファルド・キファーヤです。つまり、指導者が学ぶことが必要です。タフシール、ハディース、そして言葉の知識に続いて最も輝かしい知識がフィクフの知識です。下記の 6 つの聖ハディースは、フィクフとフィクフ学者（アッラーの慈悲がありますように）の誉れを示すうえで十分でしょう。

「アッラーは、あるしもべに良いことを行うことを望まれた時、彼をファーキフとされる。」「誰かがファーキフとなれば、アッラーは彼の求めるものと糧を、彼が思いもしなかった場所から送られる。」

「アッラーが最も崇高であるとされるのは、教えにおいてファーキフであるものである。」「シャイターンに対し、一人のファーキフは千人のアービド（イバーダ《崇拝行為》を多く行う人）よりも強い。」

「それぞれが、支えとしている柱がある。教えの基盤となる柱は、フィクフの知識である。」

「イバーダのうち最も価値があり尊いのは、フィクフを学ぶこと、そして教えることである。」

イマーム・アーザム・アブー・ハニーファの偉大さは（アッラーの慈悲がありますように）この聖ハディースからも理解されます。ハナフィー派の教えの規定は、教友であるアブドゥッラー・イブニ・メスード（アッラーのお喜びがありますように）から始まる流れによって生じたものです。つまり、法学派の長であるイマーム・アーザム・アブー・ハニーファ（アッラーの慈悲がありますように）のフィクフの知識はハンマードから、ハンマードもイブラーヒミ・ネハーイから、彼もアルカマから、アルカマもアブドゥッラー・ビン・メスードから、彼も預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）から聞き取ったのです。

アブー・ユースフ、イマーム・ムハンマド・シャイバーニ、ズフェル・ビン・フザイル、そしてハセン・ビン・ズイヤードはイマーム・アーザム（アッラーの慈悲がありますように）の弟子です。このうちイマーム・ムハンマドは宗教知識において千冊もの本を書いています。ヒジュラ歴135年に生まれ、189年（ヒジュラ歴805年）にレイの町で死去しました。弟子であるイマーム・シャーフィーの母と婚姻を行ったため、これらの本はイマーム・シャーフィーに相続され、イマーム・シャーフィーの知識を増すことを助けたのです。このため、イマーム・シャーフィー（アッラーの慈悲がありますように）は、「誓って言うが、私のフィクフの知識はイマーム・ムハンマドの本を読むことで増えた。フィクフの知識を深めたい者は、アブー・ハニーファの弟子と共にいなさい」と語っています。ある時には、「すべてのムスリムは、イマーム・アーザムの家人、子供たちのようである」と語っています。つまり人が子供たちの糧を稼ぐように、イマーム・アーザムも人々が行いの上で必要とする宗教知識を読み取ることを自分の責任とし、皆を困難な状態から救ったのです。

イマーム・アーザム・アブー・ハニーファ（アッラーの慈悲がありますように）が フィクフの知識を集めて 部分、分野に区分し、様式や方法 を定めたように、預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）や教友（アッラーのお喜びがありますように）が一致して教えている信条、信仰における知識をも集め、何百もの弟子に教えました。弟子たちの中から、「イルミ・ケラーム」すなわち信仰に関する知識の専門家が育ちました。これらのうち、イマーム・ムハンマド・シャイバーニの育てた人々のうち、アブー・バクリ・ジュルジャーニーが有名となりました。彼の弟子のうち、アブー・ナスリ・イヤードは信仰に関する知識についての本を書きました。逸脱した人々と衝突し、スンナ派の信条を強め、そうして 各地に広めました。333 年（西暦 944 年）にサマルカンドで死去しました。彼の墓地を、あるユダヤ教徒がロシア人から購入し、娯楽の場としました。イスタンブールから来たイフラス社はこの醜い状態を目にし、1416 年（西暦 1996 年）にユダヤ教徒から 3 万ドルで購入し、整備 しました。この偉大な学者やエブル・ハセニ・エシュアリーという名の学者を、スンナ派の「信条における、法学派のイマーム」と呼びます。

フィクフ学者は 7 段階に分けられます。ケマル・バシャ・ザーデ・アフマド・ビン・スライマン師（アッラーの慈悲がありますように）は、「ワクフニヤートゥ」という本でこの 7 段階について次のように説明しています。

1. イスラームにおいて「絶対的なムジュタヒド」である学者たちです。彼らは「エディッレイ・エルベア」から規定を読み取るため、やり方や条件を定め、自らが設けた原則に合わせて規定を読み取りました。4 つの法学派のイマームたちは ここに属します。

2. 「法学派におけるムジュタヒド」です。彼らは法学派の長

が設けた原則に従い、4つの根拠から規律を読み取ったアブー・ユースフやムハンマド、そして彼らに類似する人々（アッラーの慈悲がありますように）です。

3.各問題のムジュタヒドである人々です。彼らは法学派の長が伝えていない問題について、法学派のやり方や原則に従い、規定を読み取りますが、イマームに適った形でそれを行うことが条件となります。タハーウィー（238－321 エジプト）、ハッサーフ・アフマド・ビン・ウマル（261 バグダッド）、アブドゥッラー・ビン・フサイン・カルヒー（340）、シャムス・ウル・アインマ・ハルワーニー（456 ブハラ）、シャムス・ウル・アインマ・セラフシー（483）、ファフル・イスラーム・アリー・ビン・ムハンマド・ペズデヴィー（400－482 サマルカンド）、カーディハーン・ハセン・ビン・メンスール・フェルガーニー（592）、そして類似する人々です。

4.アスハーフ・タフリージュ：イジュティハドの段階には達しておらず、ムジュタヒドたちの出した、短く、秘められた規律の解釈を行う学者です。アフマド・ビン・アビー・ベキル・ラーズィーがその例です。ジャッサースという名でよく知られています。370年に死去しました。

5.アルバーブ・テルジーフ：ムジュタヒドたちからもたらされるいくつかの伝承のうちの一つを選択する人々です。アブドゥルハセン・クドゥーリー（362－428 バグダッド）、「ヒダーヤ」の著者ブルハーネッディン・アリー・メルギナーニ（593（西暦1198にブハラ虐殺でチンギス・ハンの兵が殉死させました））のような人々です。

6.ムカッリド：ある問題についてもたらされた様々な情報をその正確さに応じて並べ、書き取りました。彼らの本では拒まれた伝承はありません。「ケンズ・ウドゥ・デカーイク」の著者アブドゥルベレカート・アブドゥラー・ビン・ネセ

フィー (710)、及び「ムフター ル」の著者アブドゥッラー・ビン・マフムード・ムースリー (683)、そして「ヴィカーヤ」の著者ブルハーヌッシャリーア・マフムード・ビン・サドゥッシャリーア・ウバイドゥッラー (673)、さらに「マジュマウル・バーレイン」の著者イブヌッサーティ・アフマド・アリー・バグダーディー (694) がその例です。(アッラーの慈悲がありますように)

7.確かではない情報を、しっかりとした情報とは区別しないムカッリドです。(彼らは読んだものをよく理解し、理解できないムカッリドたちに解説を行うため、フィクフの学者と見なされています)

法学派を持たない人は誰も、自分で道を見出すことは
できない

皆の真似をするなら、それも正しくはなり得ない
宗教学者でない者は、ムジュタヒドにはなり得ない
私の能力がなかったとしても、あなたの慈悲を求める
あなたに困難なことなどありはしない、誉れ高きアッラー
よ

私の欠点は多い、あなたの慈悲は罪のために
私の罪を否定することはできない、私の状態はあなたがご
存じだ

恥ずべき気持ちでやってきた、鎖を引きずりつつ
私の能力がなかったとしても、あなたの慈悲を求める
あなたに困難なことなどありはしない、誉れ高きアッラー
よ

皆、過ちを犯している 確実なのは、あなたが正しい
ということ

崇拜行為を受けるべきはただあなたのみ、それ以外で
はない

無実なしもべに何かできよう 絶対的な力を持つのは

あなたなのだ

私の能力がなかったとしても、あなたの慈悲を求める
あなたに困難なことなどありはしない、誉れ高きアッ
ラーよ

イマーム・アーザム・アブー・ハニーファ

(アッラーの慈悲がありますように)

「カームス・ウル・アーラム」では次のように書かれて
います。

イマーム・アーザム・アブー・ハニーファの名は、ヌマ
ンです。父の名はサービット、祖父の名もヌマンでした。ス
ンナ派の4人の偉大なイマームの一人目です。イマームとは、
深い学者という意味です。預言者ムハンマド（アッラーの
祝福と平安がありますように）の輝かしい教えの大きな柱
です。ペルシアの有力者の血統です。父親はイスラームの
教えを受け入れていました。80年にクーファの安置で生ま
れました。教友であるアナス・ビン・マールク、アブドゥ
ッラー・ビン・アビー・アウファ、そしてセフル・ビン・
サアド・サイーディ、アブットゥファイル・アーミル・ビ
ン・ワーシラの時代に成長しました。フィクフの知識をハ
ンマード・ビン・アビー・スライマーンから学びました。
タービウーン（教友たちの次の世代）の偉大な人々、そし
てイマーム・ジャーファル・サードゥクと説話を行いまし
た。多くの聖ハディースを暗記していました。法学派のイ
マームになっていなければ、偉大な判事になれたであろう
形で成長しました。優れた知性と、皆を驚かせるような鋭
い知能を備えていました。フィクフの学問においては短期
間で、並ぶ者がいないほどのレベルに達しました。その名や
名声は世界に広まりました。

ウマイヤ朝の第14代、そして最後のカリフであるマルワ

シ・ビン・ムハンマドは、マルワン・ビン・ハケムの孫であり、132 年（西暦 750 年）にエジプトで殺害されました。5 年間、カリフの座についていました。彼の時代に、イラクの知事であったヤズド・ビン・アムルは、彼にクーファ裁判所の判事となることを提案しましたが、禁欲主義や篤信、罪を恐れる気持ちにおいても知識や知性と同様この上なく高いレベルに達していたため、それを受け入れませんでした。人間として、しもべの権利を監督する際に不十分となることを恐れたのでした。ヤズドの命令で 110 回、頭を鞭で打たれました。神聖なその頭と顔がはれ上がりました。翌日またイマームを連れ出し、再度提案を行い、彼を困らせました。「相談します」といい、その場を離れ、マッカへ行き、そこに 5・6 年住んでいました。

150 年（西暦 767 年）にアッバース朝のカリフであるアブー・ジャーファル・マンスールが提案した司法長官の地位を受け入れなかったため、投獄されました。鞭で打たれました。毎日 10 回増やす形で打たれました。鞭打ちの数が 100 になった日、殉教したのでした。

セルジューク朝の皇帝の一人スルタン・マリク・シャーの宰相アブー・サアド・ムハンマド・ビン・マンスール・ハーレズミー（アッラーの慈悲がありますように）はアブー・ハニーファ師の墓の上に素晴らしい廟を作りました。その後、オスマン朝の皇帝たちはこの廟を何度も修理、改築しました。マリク・シャー（アッラーの慈悲がありますように）はセルジューク朝の第 3 代のスルタンであり、アルプ・アルスラーンの息子です。（447－485）

アブー・ハニーファ（アッラーの慈悲がありますように）はフィクフの学問を初めて各分野に分類し、それぞれの分類の知識をまとめ、「ファラーイズ」及び「シュルース」といった本を書きました。フィクフの非常に広い知識、さら

に類推における驚異的な力、そして禁欲主義、篤信、忍耐深さ、そして人柄の良さにおける驚くべき秀逸さを伝える本は数えきれないほど多くあります。弟子は非常に多く、その中には偉大なムジュタヒドも育っています。

ハナフィー派はオスマン朝時代に各地に広がりしました。帝国の公式法学派のようになりました。今日、世界にいるムスリムの過半数、そしてスンナ派の大多数はハナフィー派に従って崇拝行為を行っています。「カームス・ウル・アーラム」の文章はここまでです。

「ミラート・ウル・カイナート」では次のように書かれています。

イマーム・アーザムの父祖は、イランのファーリスと呼ばれる町の出身でした。父親はサービトで、クーフアでイマーム・アリー（アッラーのお喜びがありますように）と出会い、イマームは彼と子供たちのためにドゥアーを行っていました。イマーム・アーザムはタービウーンの偉人の一人であり、教友のうちアナス・ビン・マーリキ（アッラーのお喜びがありますように）やその他の3人もしくは7人に会ったことがありました。彼らから聖ハディースを学びました。

イマーム・ハーリズミーがアブー・フライラから、伝承者が途切れることなく確認できる形で伝えている聖ハディースでは、「わがウンマに、アブー・ハニーファという名の人が現れる。この人は最後の審判の日、わがウンマの光となる」といわれています。ある聖ハディースでは、「ヌマン・ビン・サービトという名の、そしてアブー・ハニーファと呼ばれる者が現れ、アッラーの教えと私のスンナを活気づかせる。」また、「それぞれの世紀に、わがウンマから上昇する者たちがいる。アブー・ハニーファはその時代の最も崇高な者である」と語られています。この3つの聖ハ

ディースは、「マウドゥアトゥル・ウルーム」及び「ドゥッ
ル・ウル・ムフター ル」でも書かれています。「わがウン
マから、アブー・ハニーファという者が現れる。肩甲骨の
間にほくろがある。アッラーはその教えを彼の手で活気づ
かせられるだろう」というハディースは有名です。

「ドゥッル・ウル・ムフター ル」の前書きでは次のよう
に書かれています。「ハディースでは、『預言者アーダムが
私によって称賛されたように、私もわがウンマのうちのヌ
マンという名、アブー・ハニーファという称号を持つ者によ
って称賛される。彼はわがウンマの光である』と言われ
ました。またある聖ハディースでは、『預言者たちは私によ
って称賛される。私はアブー・ハニーファによって称賛さ
れる。彼を愛する者は、私を愛したことになる。彼と敵対
する者は、私とも敵対したことになる』と言われました。
これらの聖ハディースは、偉大な学者アブルライシ・サマ
ルカンディ師の「ムカッディマ」の本、そしてその解説が
「タカッデュマ」という本で書かれています。ガズナー ウ
イーの「ムカッディマ」という名のフィクフの本の前書き
では、イマーム・アーザムを称賛するハディースが書かれ
ています。この解説である「ディヤーイー・マーナウィー」
という本では、カーディ・アブドゥルベカーが次のように
書いています。アブルファラジュ・アブドゥルラフマー
ン・イブヌルジャウズイーはハーティビ・バグダディに従
い、このハディースを変えられたものであると語っている
ものの、彼のこの言葉は自らのものではありません。なぜ
ならこれらのハディースは様々な流れで伝えられているか
らです。」イブニ・アービディンは「ドゥッル・ウル・ムフ
ター ル」の解説を行う際、これらが変わえられたものではな
いことを証明しています。そしてイブニ・ハジェリ・メッ
キー師の「ハイラトゥル・ヒサーン」という書物における

次の聖ハディースをも伝えています。「**世界の飾り布は 150 年に取り除かれる。**」ヒジュラ歴 562 年（西暦 1166 年）に死去した偉大なフィクフ学者シャムス・ウル・アインマ・アブドゥルガッファール・カルダリーは、「この聖ハディースは、イマーム・アーザム・アブー・ハニーファを伝えることが明らかである。なぜなら 150 年に死去したからである」と語っています。ブハーリーとムスリムが伝えている聖ハディースで、「**信仰が金星に行けば、ファーリスの息子たちの一人がそれを取って持ってくる**」とされています。シャーフィー派の学者の一人イマーム・スユートイー は語っています。「このハディースがアブー・ハニーファを示していることは、皆の合意により告げられている。」ヌマン・アールシー（**ガーリヤ**）もこのハディースがアブー・ハニーファを示すこと、祖父がファーリス出身であることを書いています。ハンバリー派の学者であるアッラーマ・ユースフは、「**タンウィールス・サヒーファ**」という本で、アンダルシアのリスポン判事であるハーフズ・アッラーマ・ユースフ・イブニ・アブドゥルベッルから引用し、次のように語っています。「アブー・ハニーファについて誹謗中傷してはいけない。また彼を誹謗中傷する人を信じててもいけない。アッラーに誓って言うが、彼以上に 優れ、彼以上に罪を避け、彼以上に知識を備えた人を私は知らない。ハーティビ・バグダーディーの言葉に騙されてはいけない。彼は学者たちについて偏屈な信念を持っている。アブー・ハニーファ、イマーム・アフマド、そしてその弟子たちについても誹謗中傷を行っている。イスラーム学者たちはハーティビに返事を書き、彼を非難している。イブヌル・ジャウズイーの孫アッラーマ・ユースフ・シャムセッディン・バグダーディーは、「**ミラトウッズ・ザマン**」という名の 40 巻の本の中で父がハティーブに従っていたことに非常に驚

いたと書いています。」イブニ・アブドゥルベッセルは 368 年（西暦 978 年）に生まれ、463 年（西暦 1071 年）にシャータイバ（ジャティワ）で死去しました。イマーム・ガザーリー（アッラーの慈悲がありますように）は、「イフヤー」という本でイマーム・アーザムについて、イバーダを多く行い、禁欲主義であり、アッラーについての智を備えた人、として称賛していました。教友たちや宗教学者たちがそれぞれに異なることを話すこと、互いの言葉を気に入らないことを、仲が悪いためであると思わすべきではありません。互いを愛していないためであると理解してはいけません。ムジュタヒドたちは（アッラーの慈悲がありますように）、アッラーのために、教えを支えるために、イジュティハドにおいて互いと別れるのです。ここまでが、イブニ・アービディンからの翻訳でした。「ハディースの様式に関する知識」という学問では、「マウドゥ・ハディース」は、嘘、でっちあげのハディースという意味にはならないことが、「永遠の幸福」で詳しく書かれています。

学者たちの一人が、夢の中で 預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）に、「アブー・ハニーファの英知についてどうお考えですか」と尋ねました。その返事で、「彼の知識は皆にとって必要だ」とおっしゃられたのでした。別の学者は夢で、「アッラーの使徒よ！クーファの町のヌマン・ビン・サービトの知識についてどのようにお考えですか」と問いました。「彼から学びなさい、彼が教えたことを基準に振舞いなさい！彼はとても良い人だ」と答えられました。イマーム・アリー（アッラーのお喜びがありますように）は次のように語っています。「あなた方に、このクーファの町にいるアブー・ハニーファという名の人について教えよう。彼の心は知識と英知によって満たされる。末世において多くの人が彼の価値を知らずに滅びる。

実際、シーア派はアブー・バクルとウマルのために滅びるのだ。」イマーム・ムハンマド・バーキル・ビン・ザイナル・アービディン・アリー・ビン・フサイン（アッラーの慈悲がありますように）はアブー・ハニーファを見て、「父祖の教えを破壊する者が増えた時、あなたはその教えを活気づける。あなたは恐れる者を救い、惑う者のよりどころとなる。逸脱者を正しい道へと向ける。アッラーがあなたの支援者となられるだろう」と言っています。ムハンマド・バーキルはヒジュラ歴57年にマディーナで生まれ、113年に死去しました。マディーナでは、聖アッバース（アッラーの慈悲がありますように）の廟で眠っています。

若い時代には言葉についての知識とアッラーへの智について学び、大きな成功を収めました。その後イマーム・ハンマードに18年奉仕し、研鑽を積みました。ハンマードが死去すると彼の代わりにムジュタヒド及び宗教指導者となりました。知識の秀逸さは各地に知れ渡りました。人徳、知性、理解力、禁欲主義、篤信、信頼、質問に対する回答の速さ、宗教への結びつき、正しさ、そして人間としての成熟さにおいて誰よりも優れていました。同じ時代にいた、そして後世に生まれてきたすべてのムジュタヒドたち、優秀な人々、さらにはキリスト教徒たちも常に彼を称賛し、褒め称えていました。イマーム・シャーフィーは「フィクフの知識において、皆、アブー・ハニーファの子供たちである」と語っています。またある時は「アブー・ハニーファによって私は恵みを得ている。毎日彼の墓を訪問している。困難な状態になった時には彼の墓に行き、2ラカートの礼拝を行っている。アッラーに懇願している。私の望むものが与えられる」と語っています。イマーム・シャーフィーは、イマーム・ムハンマドの弟子でした。「アッラーは私に、二人の人を通して知識を与えられた。ハディースはス

フヤーン・ビン・ウヤイナから、フィクフはムハンマド・シャイバーニから学んだ」と語りました。またある時は、「宗教知識や現世的な事柄において恩を感じる人が一人いる。それはイマーム・ムハンマドである」と語っています。またイマーム・シャーフィーは、「イマーム・ムハンマドから学んだことで、動物の背丈ほどの本を書いた。彼がいなければ学問から何かを得ることもなかった。学問においては皆、イラクの学者たちの子供たちである。イラクの学者たちもまた、クーファの学者たちの弟子である。クーファの学者たちは、アブー・ハニーファの弟子である」と語っています。

イマーム・アーザムは4千人から知識を得ました。イマーム・アーザムの偉大さを説くために、それぞれの時代の学者たちが様々な本を書きました。ハナフィ派においては50万もの宗教的問題が解決し、すべてに答えが出されました。

偉大なハーフズ、アブー・バクル・アフマド・ハーリズミーは「ムスナド」という本で次のように語っています。「セイフル・アインマはこう言いました。『イマーム・アーザム・アブー・ハニーファはクルアーンから、そして聖ハディースから一つの問題が生じたとき、これを師たちに話しました。皆が評価しない限り、質問した人に答えを与えることはありませんでした。』クーファの町のモスクで説話を行っている時、一つの説話ごとに千人の弟子が来ていました。このうち40人はムジュタヒドでした。一つの問題に答えを見つけた時、これを弟子たちに告げました。一緒に精査を行っていました。クルアーンに、そして聖ハディースに、さらには教友たちの言葉に適しているとの合意があれば、喜んで「アルハムドゥリッラー ワッラーフ・アクバル」と言いました。説話に参加している人々も皆、そう

言いました。その後、それを書くようにと命じました。」

「レДДィ・ワッハービー」という本では、ペルシア語で次のように書かれています。「ムジュタヒド」であるためには、アラビア語文学とその evdâ 「エブダー」, sahihi 「サヒーヒ」, mervî 「メルヴィー」, mütevâtiri 「ムテワーティル」, red yolları 「否定の方法」, mevdû' lügatları 「メヴドゥーの辞典」, fasîh 「ファシーヒ」、redî 「レディー」、mezmûm 「メウズムーム」の形を知ること、そして müfred 「ムフレドゥ」, şâz 「シャーズ」, nâdir 「ナーディール」, müsta'mel 「ムスタメル」, mühmel 「ムフメル」, mu'reb 「ムレブ」, ma'rife 「マーリフェ」, iştikak 「イシュティーカーク」, hakikat 「ハキーカト」 mecâz 「メジャーズ」, müşterek 「ムシュテレック」, izdâd 「ウズダード」, mutlak 「絶対性」, mukayyed 「ムカイエド」, ibdâl 「イブダール」, kalb 「心」という辞典の知識において指導者である必要があります。その後、sarf 「サルフ」, nahv 「ナフ」, me'ânî 「メアーニー」, beyân 「ベヤーン」, bed'î 「ベディー」, belâgat 「ベラーガット」の知識で üsûl-i fikh 「ウスール フクフ」, üsûl-i hadîs 「ウスール ハディース」, üsûl-i tefsîr 「ウスール テフシール」、mâhir 「マーヒル」であり、そして cerh ve ta'dîl 「ジェルフ及びターディール」のイマームの言ったことを覚えている必要があります。「ファキーフ」であるためには、これら以外にそれぞれの問題の根拠の意味、意図されるもの、そして示唆するものを調べる必要があります。「ムハッディス」つまりハディース学者になるためには、聖ハディースを聞いたとおりに暗記することが必要であり、意味、意図するところ、示唆するところを知り、イスラームの規律の根拠を理解することは条件ではありません。一つの聖ハディースについて、フィクフ学者が「サヒーフ（真正）」であるといい、ハディース学者が「ダーイフ（脆弱）」であ

ると言えば、フィクフ学者の言葉に重きが置かれます。このため、ムジュタヒドの第一人者であり、ファキーフのうち最も優れた存在であるイマーム・アーザムの言葉と見解は、他のものよりも価値が置かれるのです。なぜなら多くのハディースを、直接教友から聞いていたからです。この崇高なイマームがサヒーフ（真正）といったハディースには、イスラーム学者のすべてがサヒーフと言ってきました。ハディース学者は、フィクフ学者の位階に達することはありません。法学者のイマームの段階には決して到達できないのです。

ハディース学者の一人アブドゥルハック・ダフラウィーは「スラートゥル・ムスタキーム」という本で次のように語っています。「イマーム・シャーフィーが証拠として取り上げているいくつかのハディースについて、イマーム・アーザムは証拠として取り上げていません。これを見た宗派を持たない人々は、イマーム・アーザム・アブー・ハニーファを穢すために利用しました。アブー・ハニーファはハディースに従わなかった、という偏見を広めました。しかしイマーム・アーザム・アブー・ハニーファ師は、その問題の証拠としてよりサヒーフ（真正）でより強い別のハディースを見つけ、そのハディースを取り上げているのです。」

聖ハディースでは、「わがウンマのうち最も良いのは、私の時代にいた人々である。次いで良いのは、その後に生まれてきた世代である。それに次いで良いのは、その後で生まれてきた人々である」とおっしゃられています。この聖ハディースは、タービウン（教友に会うことができた世代）が、その後の世代よりも優れていることを示します。イマーム・アーザム・アブー・ハニーファが教友のうち数人であったこと、彼らから聖ハディースを聞いたこと、このためタービウンであることが、イスラーム学者の合意

によって伝えられています。例えば、「アッラーのご満悦のためにモスクを作る人に、天国であずまやが与えられる」という聖ハディースを、アブー・ハニーファはアブドゥッラー・ビン・アビーという名のサハーバから聞きました。シャーフィー派の学者であるジェラルッド・ディン・スューティは、「**テビードゥス・サヒーファ**」という本で次のように語っています。「シャーフィー派の学者であるイマーム・アブドゥルケリームは、イマーム・アーザムが会った教友たちについて詳しく説く批判本を書いています。「ドゥッル・ウル・ムフタル」で、イマーム・アーザムが7人の教友と会ったことが書かれています。4つの法学派のイマームたちの中で、タービウーンであるという誉はただイマーム・アーザムにのみ与えられたのです。何かについて認めている人の言葉を、それを否定している人の言葉よりも優先することは、「**イルミ・ウスール**」の条件の一つです。このように、イマーム・アーザム・アブー・ハニーファは、タービウーンであるために法学派のイマームたちの中で最も崇高です。宗派を持たない人々がイマーム・アーザムのすばらしさを否定すること、「彼のハディースについての知識は不十分だった」と言い、この崇高なイマームを穢そうとすることは、アブー・バクルやウマルが優れていることを否定することに似ているのです。彼らの否定、かたくなさは、説話や説教によって癒される病ではありません。アッラーが彼らに癒しを与えられますように。ムスリムたちのカリフであるウマル（アッラーのお喜びがありますように）が説教をする際、「ムスリムたちよ。今、私があなた方に語ったように、預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）も私たちに説話を行なわれ、そして言われた。『人々のうち最も尊いのは私の教友である。それに次いで尊いのは、その後生まれしてきた世代である。』

それらに次いで尊いのは、彼らの後に生まれてきたものである。その後には、嘘をつく人々が含まれるからである 』と言いました。」今日ムスリムたちが従い、評価している4つの法学派は、アッラーの使徒が正しいことを証言した正しい人々の宗派です。現在ではこの4つの法学派以外のものを自分の宗派とすることは許されない ということを、イスラーム学者が合意して告げています。

「バフル・ウル・ラーイク」という本の筆者であるイブヌ・ヌジャイミ・ムスリー（アッラーの慈悲がありますように）は、「アシュバフ」という本で次のように語っています。「イマーム・シャーフィーは、フィクフの学問を専門としたい者はアブー・ハニーファの本を読むように、と語っていました。」アブドゥッラー・イブニ・ムバーラクは次のように語っています。「フィクフの学問においてアブー・ハニーファほど卓越した人を見たことがない。偉大な学者であるミサルはアブー・ハニーファの前でひざを折り、知らないことを尋ね、学んでいた。千人の学者から私は学んだ。しかしアブー・ハニーファに会っていなければ、ギリシア哲学の沼にはまってしまっていただろう。」アブー・ユースフは次のように語っています。「ハディースの学問においてアブー・ハニーファほど深い知識を備えた人を見たことがない。聖ハディースの解釈において、彼のような学者はいない。」偉大な学者であり、ムジュタヒドであるスフヤーン・サウリー は次のように語っています。「我々はアブー・ハニーファのそばで、ハヤブサのそばのスズメのようだった。アブー・ハニーファは学者たちを先導する者だ。」アリー・ビン・アースムは次のように語っています。「アブー・ハニーファの知識と、その時代の学者たちの知識を集めて比較すれば、アブー・ハニーファの知識の方が多い

だろう。」ヤジード・ビン・ハールーンは次のように語っています。「私は千人の学者から学んだ。　　その中で、アブー・ハニーファ（アッラーの慈悲がありますように）ほどにハラームを避けようという意識を持っている人、そして知性が彼の知性に勝るような人を見たことがない。」ダマスカスの学者の一人ムハンマド・ビン・ユースフ・シャーフイーは「ウクード・ウル・ジュマーン・フィー・メナーキブ・イン・ヌマン」という本で、アブー・ハニーファを称賛し、彼の卓越性を詳しく説明しています。そしてアブー・ハニーファをムジュタヒドの長としています。アブー・ハニーファは次のように語っています。「アッラーの使徒の聖ハディースは我々の王冠であり、目の光である。教友たちの言葉を探し、選び、それらに我々は従う。タービウーンの言葉は、我々の言葉のようである。」「レッド・イ・ワッハブ」からの翻訳はここまでです。この本は1264年（西暦1848年）にインドで、1401年（西暦1981年）にイスタンブールで出版されました。

「セイフ・ウル・ムカッリディーン・アラー・アナーク・イル・ムンキリーン」という本で、メヴラーナ・ムハンマド・アブドウルジャリールはペルシア語で次のように語っています。宗派を持たない人々は、「アブー・ハニーファのハディースの知識は薄弱なものだ」と言います。この言葉は、彼らが無知であること、あるいは嫉妬していることを示すものです。イマーム・ザハビーとイブン・ハジェル・マッキーは次のように語っています。イマーム・アーザム・アブー・ハニーファはハディース学者でした。4千人の学者からハディースを集めました。そのうちの三百人はタービウーンのハディース学者でした。イマーム・シャーラーニーは「ミーザーン」の第1巻で次のように語っています。「イマーム・アーザムのムスナド（ハディース集の様式の

ひとつのことであり、通常、ハディースは伝承経路と本文とからなるが、預言者ムハンマドの言行を伝えた教友ごとに配列されたものを言う）のうち三つを研究した。皆、タービウーンの有名な学者たちから伝承されていた。」宗派を持たない者たちの学者たちに対する敵意、ムジュタヒドのイマーム、さらにはその中でも最前列に位置し、ムスリムすべてのイマームでもあるアブー・ハニーファに対する嫉妬は、彼らの心を盲目とし、良心を滅ぼすものであり、このイスラーム学者たちのすばらしさ、優秀さを否定しています。自分たちが持たないものを、別の正しい人々が持つことを望んでいないのです。だから、教えのイマームである人々の優秀さを否定するのです。それによって自分たちを嫉妬の渦に陥れているのです。「ハダー イク」という本では次のように語られています。イマーム・アーザム・アブー・ハニーファは、暗記している聖ハディースを書き、書いたハディースを本箱にしまっていました。そうしてこのようないくつかの箱を常に持参していました。ハディースの伝承が少ないことは、暗記しているハディースが少ないことを意味しません。これは明らかにイスラームの敵である狂信的な人々が言うことです。彼らのこの狂信的な態度は、イマーム・アーザムの完璧さを証明しています。なぜなら彼らがその作品を非難することは、学者たちの完璧さを示しているからです。偉大な法学派を築き、何十万もの質問にクルアーンや聖ハディースを証拠として示し、答えを与えることは、タフシールやハディースの深い知識を持たない人にできることはありません。さらに、類似するものや見本となるものがない状態で自らに固有の新しい法学派を作り出すことは、イマーム・アーザムのタフシールやハディースの学問における卓越性、専門性を明白に示すものです。彼は、人の限界を超えるほどに働いて、

この法学派を生み出しました。そのため、聖ハディースを伝え、伝承を示すために時間がなかったことは、この崇高な学者に対し、ハディースの知識が脆弱であったというような嫉妬の意思を投げつけ、彼を穢そうとすることの理由にはなりえません。そもそも英知を持たずに伝承を行うことは認められないことは明かです。例えば、イブヌ・アブディルベルは「英知を伴わない伝承に価値があるのなら、ゴミ拾い がハディースを語ることがロクマーンの知性よりも優れていることになっていただろう」と語っています。イブニ・ハジェリ・マッキー はシャーフィー派の学者であるにもかかわらず、「カラーイド」という本で次のように語っています。偉大なハディース学者のアメシュは、イマーム・アーザム・アブー・ハニーファに多くの項目について質問しました。イマーム・アーザムにハディースの学問における深い知識があるのを見て、「フィクフ学者たちよ。あなた方は専門医であり、私たちハディース学者は薬剤師のようである。ハディースとその伝承者を私たちが示す。私たちが話すことの意味をあなた方が理解するのだ」と言いました。「ウクド・ウル・ジャワーヒル・イル・ムニーファ」という本で次のように語っています。ウバイドゥッラー・ビン・アムルは、ハディース学者のアメシュのそばにいました。ある人が来て、何かを質問しました。アメシュはこの答えを考え始めました。そこに、イマーム・アーザム・アブー・ハニーファが来ました。アメシュはこの質問をイマームに尋ね、答えを求めました。イマーム・アーザムはすぐに 答えを出しました。アメシュはこの答えに驚き、それをどのハディースから読み取ったのかを尋ねました。イマーム・アーザムは一つのハディースを読み上げ、そこから読み取った、これを私はあなたから聞いていた、と答えました。イマーム・ブハーリーは 30 万のハディースを暗記

していましたが、そのうちのわずか1万2千ほどを本に書いていました。なぜなら「私が語っていないことをハディースとして伝える人は、地獄で熾烈な罰を受けることになる」という聖ハディースの恐ろしさを強く感じていたからです。イマーム・アザム・アブー・ハニーファの罪を避けようとする思い、信仰心はとても強く、ハディースを伝承する上で非常に厳しい条件を設けていました。この条件を満たす聖ハディースのみを伝承したのです。一部のハディース学者は広い範囲を扱い、条件もこのように厳格ではないため、多くのハディースを伝承しています。どのハディース学者も、この条件の違いゆえに、他者を、他のハディース学者を軽蔑したりはしませんでした。そうでなければ、イマーム・ムスリムは、イマーム・ブハーリー（アッラーの慈悲がありますように）を傷つけるようなことを言っていたことでしょう。アブー・ハニーファは深い信仰心を持つ人であり、彼がわずかなハディースを伝承したことは、ただ彼の称賛と賛美の理由となるのです。（セイフ・ウル・ムカッリディーンからの翻訳はここまでです。）

イマーム・アザム・アブー・ハニーファ（アッラーの慈悲がありますように）は、毎日朝の礼拝をモスクで行い、昼間には弟子たちの質問に答えていました。昼の礼拝の後には夜の礼拝まで、弟子たちに学問を教えていました。夜の礼拝の後、家に帰り、少し休憩し、それからモスクに行き、朝の礼拝までイバーダを行いました。このことは、学者たちのうちミサル・ビン・カダーム・クーフイーやその他の尊い人々が伝えています。ミサルは115年（西暦733年）に死去しました。

彼は貿易を行い、合法的な手段で稼いでいました。別の地方に商品を送り、その利益で弟子たちに必要なものを購入しました。自分の家にもお金をかけ、また自分の家にか

ただけのものを貧者たちにもサダカしていました。毎週金曜日には母と父の魂のため、貧者にさらに 20 枚の金貨を配っていました。師であるハンマード（アッラーの慈悲がありますように）の家の方角には足を向けて伸ばしませんでした。しかし、彼らの家の間には7つの街区だけの距離がありました。共同経営者の一人が、その商品の多くをイスラームにはふさわしくない形で売ったことを知ると、この財産から得られた9万アクチャのすべてを貧者に配り、少しも受け取りませんでした。クーファの町の村々を山賊が襲い、羊を盗みました。盗まれたこの羊が町で屠られ、人々に売られているかもしれないという考えによって、その日から7年間、屠られた羊を食べませんでした。なぜなら羊が最大7年間生きると知っていたからです。ハラームをこれほどまでに恐れていました。あらゆる行動でイスラームを基準としていました。

イマーム・アーザム（アッラーの慈悲がありますように）は 40 年間、夜の礼拝のためのウドゥーのままで朝の礼拝を行いました。つまり、夜の礼拝の後に眠りませんでした。55 回、巡礼を行いました。最後の巡礼で、崇高なるカーバの中に入り、そこで2ラカートの礼拝を行いました。礼拝でクルアーンをすべて読みました。そして泣きながら、「主よ、あなたにふさわしいイバーダを行うことができませんでした。しかしあなたに 理性で誓うことが 出来ないとよくわかりました。私の奉仕の欠点を、この理解によって許してください！」と言いつつドゥアーしました。その瞬間、ある声が聞こえ、「アブー・ハニーファよ、あなたは私をよく理解した。私によく尽くした。あなたと、あなたの法学派にいてあなたの道を行く人々を、最後の審判まで許した。」と語られたのでした。毎日一回、毎晩一回、クルアーンを読了していました。

イマーム・アーザムの篤信は非常に深く、30 年間（禁じられている 5 日間を除き）毎日断食をしました。しばしば、1 ラカートもしくは 2 ラカートでクルアーンすべてを読了しました。時には懲罰もしくは慈悲の章を礼拝で、あるいは礼拝以外で何度も読み、泣いていました。（ハナフィー派ではアッラーのために泣くことは礼拝を無効としません。）聞いていた人はその様子に胸を痛めました。預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）のウンマの中で、1 ラカートですべてのクルアーンを読了することは、唯一 オスマーン・イブニ・アッフアーン、タミーミ・ダーリー、及びサイード・ビン・ジュバイル、そしてイマーム・アーザム・アブー・ハニーファに許されたことでした。誰からも贈り物は受け取りませんでした。貧者のような衣服を着ていました。時にはアッラーの恵みを示すため、とても価値のある服を着ていました。55 回巡礼に行き、数年マッカに滞在しました。魂が閉じ込められた場所（牢獄）で、7 千回クルアーンを読了しました。「私は生涯に一度だけ笑ったが、それも後悔している」と語っていました。あまり話さず、十分に考える人でした。いくつかの宗教的な問題においては、弟子たちと討論を行いました。ある晩、夜の礼拝を皆で行って出る際、片足が扉の外、片足が礼拝堂にある状態で、ある話題について弟子のズフェルと朝の礼拝のアザーンまで話をつづけ、もう一方の足を外に出すことなく、朝の礼拝のためにまた礼拝堂に戻りました。「イマーム・アリー（アッラーのお喜びがありますように）は、4 千ディルヘムまでの家計は許されると言っておられた」と、利益のうち 4 千ディルヘムを超える部分を貧者に配っていました。

カリフのマンスールは、イマームに大変敬意を払っていたので、1 万アクチャと一人の女奴隷を贈りました。イマ

ームはそれを受け入れませんでした。当時、1 アクチャは 1 デイルハ ムの銀でした。145 年に、イブラヒム・ビン・アブドゥッラー・ビン・ハズレティ・ハサンは、マディーナのカリフとなることを宣言する弟ムハンマド（アッラーの慈悲がありますように）の支援のため、兵を集め、クーファに来ました。「アブー・ハニーファが これを助けている」という噂が広まりました。マンスールはそれを聞き、イマームをクーファからバグダッドに呼びました。そして、「マンスールは正当なカリフである」と皆に告げることを求めました。その対価として、判事の職を与えと言いました。彼は そうすることを強い ましたが、イマーム・アザームは受け入れませんでした。マンスールはイマームを投獄しました。30 回鞭で打ち、神聖な足から血が流れました。マンスールは後悔して 3 万アクチャを贈りましたが、認められませんでした。再び投獄し、毎日 10 回ずつむち打ちを増やしていきました。（一部の伝承によると）11 日目、人々の襲撃を恐れたために 無理やり仰向けにして、口に毒入りの液を流し込みました。死ぬ際には、サジュダを行いました。彼の死後の礼拝は 5 万人ほどの 人々が参加しました。何とか、午後の礼拝まで行われました。20 日間、無数の人々が訪れ、墓のそばで礼拝を行いました。

730 人の弟子がいました。皆、その徳と誠実な行いでよく知られていました。多くが宰相や宗教指導者になりました。息子のハンマード（アッラーの慈悲がありますように）は、弟子の中でも優れた存在でした。（ミラート・ウル・カイナート）の文章はここまでです。

彼らは 教えに生き、導く者となった
アッラーの慈悲が皆の上にありますように

彼はアッラーを大変恐れていました。クルアーンに従うことにとっても注意を払っていました。弟子たちに、「何かの行為について、私の言葉にそぐわない証書があなた方の手に渡った時は、私の言葉は放棄し、その証書に従いなさい。」と話しました。全ての弟子たちは、「彼に従わない私たちの言葉も、当然彼から聞いた証拠や証書に従って語りました」と宣誓しました。

イジュティハドによって理解される事柄では、イマーム・アザームと弟子たちの間に相違がありました。「**ウンマの学者たちの間の相違は慈悲である。**」という聖ハディースは、この相違が有益なものであることを教えています。

ハナフィー派で宗教指導者となる人は、イマーム・アザームの言葉により、ファトゥワ（宗教的宣告）を行うべきです。彼の言葉が存在しなければ、イマーム・アブー・ユースフに従うべきです。その後は、イマーム・ムハンマドの言葉に応じて行動するべきです。イマーム・アブー・ユースフとイマーム・ムハンマドの言葉が一方にあり、イマーム・アザームの言葉が別の一方にある場合は、宗教指導者はどちらの方向でもファトゥワを出すことができます。やむを得ない場合を除き、宗教指導者はムジュタヒドのうち、最も容易なものを話す人の言葉に適する形でファトゥワを出します。ムジュタヒドの誰かの言葉に従わないファトゥワを出すことはできません。そのような通知はファトゥワとは言われません。

**若い時代は甘い夢のように過ぎた わが目よ、泣きなさい
涙が私を狂わせる 私の居場所は墓場となる**

ムハンマド・マースムは第2巻第80の手紙で次のように語っています。「悔悟のドゥアーを続ける者を、アッラーは苦しみから救われる。」ドゥアーは次のようなものです。

「アスタグフルッラヘルアズィーム アッラズィー ラー
イラーハ イッラー フワ エルハイヤル カイユーマ
ワ アトゥーブ イライフ アッラーフンマ インナカ
アフーウン カリームン・トゥヒップル アフワ ファー
フ アンニ」

ワッハーブ派とスンナ派の返答

ムスリムであると言いながら、スンナ派から離れて
いる人々の一派が「ワッハーブ派」です。彼らは「ナジュ
ディ」とも呼ばれます。

第 34 代のオスマン皇帝であるアブドゥルハミッド・
ハン 2 世 (1258-1336、西暦 1842-1918、イスタンブール
のスルタン・メフメット廟) (アッラーの慈悲がありますよ
うに) の時代の大臣であったアフメッド・ジェヴデット・
パシャは 12 巻の「ターリヒ・オスマーニー」という本の第
7 巻で、海軍少将であるエイユーブ・サブリー・パシャ
(アッラーの慈悲がありますように) が書いた 5 巻の「ミラ
ート・ウル・ハラマイン」という歴史書の第 3 巻、99 ペー
ジから ワッハーブ派について詳しく説明しています。ミラ
ート・ウル・ハラマインは歴史的なトルコ語です。スレイ
マ ニエ図書館に現存しています。下記の文章の多くは
パシャのこの本からの引用です。パシャはこの知識をアフ
メッド・ゼイニ・ダフランの「フィトネ・トゥル・ワッハ
ービーヤ」という本で翻訳しています。1308 年 (西暦
1890 年) に死去しています。

ワッハーブ派の創設者はムハンマド・ビン・アブドゥル
ワッハーブです。ヒジュラ歴 1111 年 (西暦 1699 年) にナジ
ュダのフライミラ地区で生まれ、1206 年 (西暦 1792 年) に
死去しました。最初は旅行や貿易のためにバスラ、バグダ

ッド、イラン、インド、ダマスカス方面に出かけていました。1125 年（西暦 1713 年）にバスラで、イギリスのスパイ・ヘムファーの罠に嵌り、イギリス人の「イスラーム撲滅」運動の道具となりました。スパイたちが書いた逸脱したものを「ワッハーブ派」という名で出版しました。「イギリススパイの告白」という本で、ワッハーブ派の創設について詳しく説明されています。入手したアフマッド・イブニ・タイミーヤ（661-728（西暦 1328 年、ダマスカス））の、スンナ派に従っていない本を読み、「シャイフ・ナジディ」として知られるようになりました。イギリス人スパイと共に用意した「キターブ・ウッ・タウヒード」の本に、マッカの学者たちは 1221 年にとっても素晴らしい返答を与え、断固とした書類と共にそれを拒否しました。「セイフ・ウル・ジャッバル」というこの批判の書は後にパキスタンで印刷され、1395 年（西暦 1975 年）にイスタンブールでオフセット印刷がなされました。アブドゥルワッハーブの息子ムハンマドの孫アブドゥルラフマーンは「キターブ・ウッ・タウヒード」の本に注釈をつけ、ムハンマド・ハミードというワッハーブ派が加筆し、「ファトゥフ・ウル・マジード」という題名でエジプトで印刷されました。アブドゥルワッハーブの息子ムハンマドの思想は、村やデリーヤの住民、その長であるムハンマド・ビン・サウードに広まりました。ワッハーブという名が与える思想を受け入れる人々を、「ワッハーブ派」もしくは「ナジディ」と呼びます。自らを宰相とし、サウードの息子ムハンマドを首長、判事としました。彼ら以降もその子孫がこの地位に就くことを認めさせました。

ムハンマドの父アブドゥルワッハーブは、誠実なイスラーム教徒でした。彼やマディーナの学者たちは、アブドゥルワッハーブの息子が誤った道に進んでいることを理解し、

皆に対して彼と話さないよう忠告しました。しかし彼は1150年（西暦1737年）にワッハーブ派を宣言したのです。宗教学者たちのイジュティハドを彼は非難しました。スンナ派の信者たちをカーフィルと呼ぶほど、極端な状態に至りました。預言者たち、聖人たちの墓地に生き、彼らに対し「預言者よ」「アブドゥルカディールよ」などと呼びかける人は多神教徒である、と言ったのです。

ワッハーブ派によると、アッラー以外の何者かが何かを行っていると語るものは、多神教徒であり、カーフィルとなります。例えば「この薬が痛みを止めた」もしくは「この預言者、もしくは聖人の墓のそばで行ったドゥアーを、アッラーは受け入れられた」という人は、多神教徒となります。この思想の証明として、ファーティハ章の「**我々はあなたのみを崇拜し、あなたのみに助けを求める**」という意味になる節や、タワックルを行うことを教える章句を示しました。スンナ派の学者たちがこれらの章句に与える正しい意味やタウヒード、タワックルの問題は「**永遠の幸福**」の第2部、「タワックル」の章で詳しく書かれています。これらを読む人は、タウヒードの正しい意味を学ぶことができます。自らをムワッヒド（アッラーの唯一性を信じる者）と呼ぶワッハーブ派がムワッヒドではないことが明らかになります。

人の言葉で判断することはできない、行動はその鏡である

人の知性の段階はその作品において明らかになる！

「アル・ウスル・ウル・エルバ・フィー・タルディードゥ・イル・ワッハービヤ」という本では、第2部の最後でペルシア語で次のように書かれています。ワッハーブ派や彼らのように宗派に属さない人々は、「**比喩**」や「**庇護を求める**」ということの意味を理解していません。誰かがあるこ

とを行っただけと言ったことに対し、それが比喩であったとしても、すぐに多神教、カーフィルだと言います。しかしアッラーはクルアーンの多くの個所で、仕事を実際に行っているのはご自身であること、比喩的な意味でそれを行っているのがしもべである、と伝えられておられます。家畜章第 57 節で、さらにユースフ章のある節で、「裁決はアッラーにだけ属する」と仰せられています。婦人章第 64 節では「もしかれらが間違った時、あなたの許に来てあなたに裁決をさせなければ、信仰しているとは言えない」とされています。一つ目の章句では、真の裁決を行うのがただアッラーであることを伝えています。二つ目の章句では、人々についても比喩的な意味で裁決を行うということが出来ることを伝えています。

すべてのムスリムは、よみがえらせ、死なせるのがただアッラーであることを知っています。なぜならユースス章の第 56 節で「かれは生を与え、また死を与える。」と、また集団章第 42 節では「かれが死の宣告をなされた者の魂は、そのままに引き留め、その外のものは定められた時刻に送り返される。本当にこの中には、反省する人びとへの種々の印がある」とされています。サジュダ章第 11 節では、「あなたがたを受け持つ死の天使があなたがたを死なせ、それから主に帰らせる」とされています。食卓章第 30 節では、「しかしかれの（利己的な）心は、その弟を殺すのを望ましいこととし、遂にかれを殺害（人類最古の殺人者と）して、失敗者の 1 人となった」とされています。この節はワッハーブ派を困らせるものです。

病人に治癒を与えられるのはただアッラーです。なぜなら詩人たちの第 80 節で、「また病気になれば、かれはわたしを癒して下さいます」とされているからです。イムラーン家章第 49 節では、「またアッラーの御許しによって、生

れ付きの盲人や、 白斑患者を治し、 また死者を生き返らせる 」とされています。(白斑とは、皮膚の病気です。皮膚の色が抜け、大きな白いしみができます。あるいはアルビノです。全身が白くなります。)

人に子供を与えられるのは、実際にはアッラーです。ジブラーイールが比喻表現として「あなたに清らかな息子を与えよう」と言ったことは、マリヤム章の第 18 節で記されています。

人の真の主はアッラーです。雌牛章第 257 節では「アッラーは信仰する者の守護者 」とされ、これを明白に示しています。食卓章第 56 節では、「アッラーとその使徒 と信仰する者たちを友として」と書かれています。部族連合章第 6 節では、「預言者は、 信者にとって かれら自身よりも近く」とされ、しもべの主であることが示されています。真の支援者はアッラーです。しもべたちについても比喻として助ける者、という表現がされています。食卓章第 2 節では、「正義と篤信のために助けあって、 信仰を深めなさい」とされています。ワッハーブ派は、「アッラー以外の存在のしもべである」という人、例えばアブドゥルナビー、アブドゥルラスールというムスリムを多神教徒であるとしします。しかし御光章第 32 節では、「独身である女性たち、そして奴隸たち、女奴隸たちのうち、誠実な者を結婚させなさい」とされています。人々の真の主はアッラーです。しかし比喻的に、それ以外の存在にも主という表現はされるのです。ユースフ章第 42 節では「あなたの主人にわたしのことを告げなさい。」と記されています。

ワッハーブ派が最もこだわっているのが、「イスティガーセ」(助けを求める)という言葉です。アッラー以外のものに助けを求めること、庇護を求めると多神教徒となる、と彼らは言います。もちろん、真に助けを求める相手はアッ

ラーです。このことを知らないムスリムはいないでしょう。しかし他者からも助けを求めることと比喩的に語られることは許されます。なぜなら物語章第 15 節では、「かれの一派の者が、敵方の者に対し、かれに加勢を求めた」とされているのです。ハディースでも、「集合の場で、アードム（アッラーの平安がありますように）から庇護を求めるだろう」とされています。「フスヌ・ウル・ハシーン」で書かれている聖ハディースでは、「助けを求める者は、アッラーよ、しもべを私たちの助けとしてください、と言いなさい。」とあります。この聖ハディースは、そばにいない人に呼び掛け、彼に助けを求めることを命じています。「アル・ウスル・ウル・エルバ」からの翻訳はここまでです。この本はペルシア語であり、1346 年（西暦 1928 年）にインドで出版され、1395 年（西暦 1975 年）にイスタンブールでオフセット印刷により第二版が出されました。この本の筆者は、イマーム・ラッバーニ師の子孫であるムハンマド・ハサン・ジャーヌ・サーヒブ（アッラーの慈悲がありますように）です。ジャーヌ・サーヒブは「ターリク・ウン・ネジャート」の本で、ワッハーブ派や宗派を持たない人々に価値のある返答を与えています。この本はアラビア語であり、ウルドゥー語に翻訳され、1350 年にインドで出版され、1396 年（西暦 1976 年）にイスタンブールでオフセット印刷されました。²

（それぞれの言葉に、一定のある意味があります。これを真の意味と言います。一つの言葉が、それ自体の真の意味で用いられず、結びつきや関係のある別の意味で用いられた場合、これを「比喩」と呼びます。アッラーに特有の言葉が比喩として人間のために用いられた場合、ワッハー

² ハサン・ジャンは 1349 年「西暦 1931 年」に死去しました。

ブ派はこれが真の意味で用いられたと見なします。それを言った人を多神教徒、カーフィルと見なします。このような言葉は、クルアーンの章句や聖ハディースでも、比喻として人間について使われていることを考えないのです。）

アッラーの使徒（アッラーの平安がありますように）や聖人からとりなしを求めること、「庇護を求めること」、すなわち助けを求めることは、アッラーから離れることやアッラーが創造主であることを忘れることを意味しません。雲を媒介としてアッラーから雨を求めること、薬を飲んでアッラーから治癒を求めること、大砲、爆弾、ミサイル、飛行機を用いてアッラーから勝利を求めること、これらは皆、アッラーに助けを求めることです。こういったものは「要因」です。アッラーは全てを要因と共に創造されています。これらの要因に働きかけることは、多神教ではありません。預言者たち（アッラーの平安がありますように）は常に要因に働きかけてきました。アッラーの創造された水を飲むために泉を、アッラーの創造されたパンを食べるためにパン焼き窯に行くこと、アッラーが勝利を与えられるように戦いの手段や教育を通して備えるように、アッラーがドゥアアを受け入れてくださるように、預言者たち、聖人たちの魂に心を結び付けることもできるのです。アッラーが電磁波と共に創造された音を聞くためにラジオを用いることは、アッラーをおいて箱に助けを求めることではありません。なぜならラジオの箱の道具にその特性、その力を与えられるのはアッラーであるからです。アッラーは全てに、ご自身の力を秘められました。多神教徒は偶像を崇拝します。アッラーのことを思いません。ムスリムは、要因や媒介に働きかけ、要因や被造物にその影響力を与えるアッラーについて考えます。求めるものをアッラーから望みます。もたらされたものがアッラーからであることを

知っています。上で示したクルアーンの章句の意味も、このことを示しています。つまり、信者は礼拝ごとにファァティハ章を読み、「主よ、この世界における私の望み、私が必要とするものを得られるよう、物質的、科学的な要因に働きかけ、私を助けるよう、あなたが愛されるしもべたちに懇願します。これらを行う際にはいつでも、望むものを与えられ、創造されるのはただあなたであると信じています。ただあなたからこれらを望んでいます」と言います。毎日このように訴える信者を、多神教徒と呼ぶことはできません。預言者たち、聖人たちの魂に助けを求めることは、アッラーが創造された要因に働きかけることです。彼らが多神教徒ではないこと、純粋な信者であることを、**ファァティハ章**のこの章句は明らかに示しています。ワッハーブ派は物質的、科学的な要因に働きかけ、我欲が求めることを得るために、あらゆる媒介、あらゆる方策を用います。預言者たちや聖人たちを媒介とすることをなぜ多神教徒の行いと呼ぶのでしょうか。

アブドゥルワッハーブの息子の言葉が自我に適っていたため、宗教的知識がない人々は容易に信じてしまいました。スンナ派の学者たちや 正しい道にあるムスリムたちをカーフィルと呼びました。首長たちは、力を得るために ワッハーブ派を適切であると見なしました。そうして、アラブの部族たちに ワッハーブ派となるよう強制しました。信じない人々を殺害しました。村人たちは死の恐怖から、デリーヤの首長ムハンマド・ビン・サウードの命令下に入りました。ワッハーブ派ではない人々の財産、生命、尊厳、女性たちを攻撃するため、首長たちの兵になることが彼らにとっても好都合だったのです。

アブドゥルワッハーブの息子ムハンマドの弟シャイフ・スライマーン師は、スンナ派の学者でした。ワッハーブ派

を否定する「サワーイク・ウリー ラーヒヤ・フィッラディ・アラル・ワッハービヤ」という本を書き、この逸脱した教えが広まることを防ぎました。この貴重な本は 1306 年に書かれ、1395 年（西暦 1975 年）にイスタンブールでオフセット印刷で出版されました。ムハンマドが誤った時代を開いたことを理解した師たちも、彼の逸脱した本に素晴らしい返答を書きました。彼に、正しい道から逸れていることを説きました。ワッハーブ派が クルアーンの章句や聖ハディースに誤った意味を与えていることを証明しました。しかしこれら全ては、村人の、信仰する人々に対する敵意、敵対心を増すものとなりました。

ワッハーブ派は、無知な人々により、知識によってではなく、イギリスのお金や武器によって迫害を行いながら、血を流しながら広まりました。この道で、手を血に染めた無慈悲な人々のうち最も固い心を持っていたのが、デリーヤの首長ムハンマド・ビン・サウードでした。彼はベニー・ハニーファの一族であり、ムサイラマ・トゥル・カザーブンが預言者であることを信じた愚かな人々の血筋でした。1178 年（西暦 1765 年）に死去しました。息子アブドゥルアジズがその跡を継ぎました。彼も 1217 年にシーア派によって殺害されました。息子サウード 2 世が跡を継ぎ、彼も 1231 年に死去しました。その息子アブドゥラーが跡を継ぎましたが、1240 年にイスタンブールで処刑されました。息子アブドゥルアジズの孫であるタルキー・ビン・アブドゥッラーがその跡を継ぎました。1254 年にその息子のファイサルが跡を継ぎました。1282 年には息子のアブドゥラーを首長としました。彼の弟アブドゥルラフマーンと息子アブドゥルアジズはクウェートに移りました。アブドゥルアジズは 1319 年（西暦 1901 年）にリヤドに来て、首長となりました。イギリスの支援を受け、マッカを攻撃しました。

1351 年（西暦 1932 年）に、サウジアラビア政府の樹立を宣言しました。サウジアラビアの首長ファフディンは、アフガニスタンのスンナ派の兵士と戦うロシアのカーフィルたちに 40 億ドルの支援を行ったことが 1991 年の新聞で報道されていました。

ワッハーブ派は、アッラーの唯一性において純粋であり、教えへの憎悪から救われる道にあるとしています。総てのムスリムは、600 年以來多神教であったとしています。ムスリムを、多神教や教えへの憎悪から救おうとしているとしています。自分たちを正しく見せるため、砂丘章第 5 節及びユーヌス省第 106 節についての主張を行っています。しかしこういった章句は多神教徒のために下されたものであることがタフシールでは明らかにされています。これらの章句のうち一つめでは、意味として、「アッラーにおいて最後の審判の日まで、全く聞いたこともないものにドゥアーをする人々以上に逸脱した人はいない。」二つ目では、意味として、「マッカの多神教徒たちに言いなさい。私に命じられたことは、アッラー以外のもの、効果も害もないものにドゥアーをしてはいけないということだ。アッラー以外のものにドゥアーするなら、自分害し、損をしたことになる」とされているのです。

ワッハーブ派の「ケシュフ・ウシュ・シュブハット」という本は、集団章第 3 節について触れています。この章句では、意味として「アッラー以外を聖人とする人々は、私たちがこれらを崇拜するのは、私たちをアッラーに近づけるために、私たちに仲裁をさせるためである、と言う」とされています。この章句は、偶像を崇拜する多神教徒の言葉を伝えるものです。とりなしを求める信者を、この多神教徒のようだと言っているのです。「多神教徒も、偶像が創造主ではないこと、創造主はただアッラーであること

を語っている」としているのです。「ルーフ・ウル・ベヤーン」では、この章句の解釈として、「人は自らの、そして万物の創造主を知るために適した形で創造された。創造主に崇拝行為を行い、その存在に接近したいという思いは皆にある。しかしこのように適した形で創造されたことと、この欲求の価値はない。なぜなら我欲、シャイターン、そして悪い友達が人を欺き、(創造された時に持っていたこの欲求を失わせるからである。創造主や最後の審判を信じなくなる。共産主義者やフリーメーソンがそうである。もしくは)多神教徒となる。多神教徒はアッラーに近づくことができない。アッラーを知ることができない。多神教から遠ざかり、唯一神信仰に結びつくことで生じる知識、認識が尊いものである。そのしるしは、預言者たちやその啓典を信じ、それに従うことである。人はアッラーに、ただこのように接近することができる。サジュダを行うことは、イブリースの本質にすらある。しかし我欲に従い、サジュダすることを求めなかった。古代ギリシア哲学者たちも、アッラーに近づくことを、預言者たちに従うのではなく、自らの理性で、我欲に従った形で求めたためにカーフィルとなった。信者はアッラーに接近するために、イスラームに従う。心が光で満たされる。魂においてアッラーの美という特性が現れる。多神教徒はアッラーに近づくために、預言者たちにも、イスラームにも従わない。自分の我欲に、不十分な理性に、後から生み出された者に従う。心が暗くなる。魂に幕が引かれる。偶像を、私たちのためにとりなしをするようにと崇拝するのだ、ということが誤りであることを、アッラーはこの章句の最後で教えておられる。」ロクマーン章第25節で、意味として、「**不信心者に尋ねて、地と天を誰が創造したのかと問えば、当然アッラーが創造したという。**」そして金の装飾章第87節で、意味として「アッ

ラー以外を崇拝する人々に、これらを誰か創造したのかと尋ねれば、当然アッラーが創造したと答える」とされています。これらの章句について言及し、「宗派を持たない人々が『多神教徒も創造主がただアッラーであることを知っている。偶像を、最後の審判でとりなしを行ってもらえるようにと崇拝している。そして偶像を崇拝しているために、多神教徒、カーフィルとなっている』として、多神教徒を擁護することは大きな誤りです。

信者たちは、預言者たちや聖人たちを崇拝することではなく、彼らがアッラーと並ぶ者ではないことを述べます。預言者たちや聖人たちは、創造されたしもべであり、崇拝される権利はないことを信じています。彼らが、アッラーの愛されるしもべであること、アッラーが愛される存在への恵みによってしもべたちに慈悲をかけられることを信じています。害も益も創造されるのはただアッラーです。崇拝されるにふさわしいのはただアッラーです。愛される存在への恵みによって、しもべたちにも慈悲をかけられる、としているのです。多神教徒は、その本質に存在するアッラーへの知識により、偶像が創造主ではないことを語っていても、この自然にある知識が預言者たちに従うことで強められるということがないため、偶像は崇拝されるにふさわしいと信じるのです。偶像に、崇拝される権利があると言うために、多神教徒となります。私たちにとりなしをするように望んでいるとするために、多神教徒となるものではありません。（偶像にとりなしを求めることは逸脱した、誤った信条です。このように信じることは認められていません。しかしこのように信じることは偶像崇拝でもありません。偶像を崇拝することが多神教となるのです。）このように、スンナ派の人々を、偶像を崇拝するカーフィルに似せることは、完全に誤りです。これらの章句のすべては、

偶像を崇拜するカーフィルや多神教徒のために下されたものです。「ケシュフ・ウシュ・シュブハット」というワッハーブ派の本は、クルアーンの章句を誤って解釈し、誤った意味を与え、逸脱した論理を構成し、スンナ派のムスリムを多神教徒に似せているのです。

「エル・フェジュール・ウシュ・サードウク・フィッレディ・アラー・ムンキリッ・タワッスル・ワルカラマーティ・ワル・ハワーリク」という本では、上記で言及した金の装飾章第 87 節の解釈が行われ、ワッハーブ派が誤った意味を与えていることを証明しています。この本は、イラクの学者であるジェミル・ストゥキーザハーウィー（アッラーの慈悲がありますように）が書き、1323 年（西暦 1905 年）にエジプトで出版されました。1396 年（西暦 1976 年）にイスタンブールでオフセット印刷で出版されました。1422 年（西暦 2001 年）に、ハキーカトゥ出版によって新たに発行されました。ジェミル・ストゥキーはイスタンブール大学で（カラムの分野で）授業を行い、1355 年（西暦 1936 年）に死去しました。1956 年に印刷された「ムンジド」という言語学の本にその写真があります。

アブドゥッラー・ビン・ウマル師（アッラーの慈悲がありますように）が伝える二つのハディースでは、「彼らは正しい道から離れた。カーフィルについて下された章句を、信者についてのものとした。」及び、「わがウンマについて最も恐れていることは、クルアーンに、自分の見解に応じて意味を与えること、不十分に翻訳を行うことだ」とされています。この二つの聖ハディースは、宗派を持たない人々が登場すること、そしてカーフィルについてもたらされた章句を、信者へのものとし、誤った意味を与えることを伝えているのです。

アブドゥルワッハーブの息子ムハンマドが誤った思想を

持っていたことや、彼がムスリムにとって将来的に 害を及ぼす存在となることを理解し、彼に警告を行った人のうちの一人が、マディーナの偉大な学者であるシャイフ・ムハンマド・ビン・スライマーン・メデニーです（アッラーの慈悲がありますように）。シャーフィー派のフィクフ学者である彼は、多くの本を書いています。イブニ・ハジェリ・マッキー（アッラーの慈悲がありますように）が、「ミンハーージュ」に対して行った「トゥフフェトゥル・ムフタージュ」という名の解説における注釈が有名です。1194 年（西暦 1780 年）にマディーナでなくなりました。「アル・ファターワー」という二巻の本において、「アブドゥルワッハーブの息子よ！ムスリムに対して 批判をしてはいけない。アッラーのご満悦を求めて、あなたに警告を行う。そう、物事について、アッラー以外のものが行うのだ、と語る人がいれば、彼に真実を告げなさい。しかし、要因に働きかけること、要因や要因の影響の強さまでもを アッラーが創造されたと 信じる人を、カーフィルと呼ぶことはできない。あなたも、一人のムスリムだ。ムスリムすべてに対してではなく、個別に、誤っているということの方がより正しい。群れから離れたものが道を逸れることはより容易だ。婦人章第 114 節では、「導きが明らかにされたにも拘らず、使徒に背き、信者の道ではない道に従う者には、かれが転向したいままに任せ、結局かれは地獄に入るであろう。何と悪い帰り所であることよ 」とされている。この章句は、私の言葉が正しいことを示している」と書いています。ワッハーブ派には数えきれないほどの誤った思想がありますが、その基本は三つの事柄です。

1. 「善い行い、崇拝行為は信仰の一部である」と言います。「一つのファルドを信じているのに、怠惰のために それを行わない人、例えば礼拝を行わない人、けちであるために

ザカートを支払わない人は、カーフィルとなる。彼を殺害するべきである。その財産はワッハーブ派に分配されるべきである」としています。

「ミレル・ワ・ニハル」の翻訳の 63 ページでは次のように書かれています。「スンナ派の学者たちは一致して、崇拝行為は信仰に含まれない」と言う。義務であることが義務であると信じ、しかし怠惰であるために行わない人はカーフィルとはならない。ただし、礼拝をしない人については一致していない。ハンバリー派によれば、怠惰であるために礼拝を行わない人はカーフィルとなる」（セナールッラー・バーニ・ブティー（アッラーの慈悲がありますように）は、「マーラー・ブッダ」という本の冒頭で「ムスリムは大罪を犯すことでカーフィルとはならない。もし地獄に入れられれば、少しもしくは長い時間の後、地獄から出され、天国に入れられる。天国に永遠に滞在する」と書いています。この本はペルシア語であり、1376 年（西暦 1956 年）にデリーで、そして 1410 年（西暦 1990 年）にイスタンブールで、ハキーカトゥ出版によって出版されています。「フクークル・イスラーム」という本の最後にあります。）ハンバリー派では、ただ礼拝を行わない人について、カーフィルとなるとされています。他の崇拝行為についてはそのようにはされていません。従って、ワッハーブ派はその観点からもハンバリー派ではありません。スンナ派ではない人が、ハンバリー派にもならないことは、21 ページ及び 36 ページで記しました。4 つの法学派のうちのどれか一つに属さない人は、スンナ派ではないのです。

2. 「預言者たち（アッラーの平安がありますように）や聖人たちの魂にとりなしを求める人、彼らの墓地を訪問し、それを媒介としてドゥアーする人はカーフィルとなる。死者に感覚はない。」と言います。

墓地に眠る人に語り掛ける人がカーフィルとなるのであれば、預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）や偉大な学者たち、聖人たちはそれを行わなかったでしょう。預言者ムハンマドは、マディーナの「バキ－（永遠）」の墓地、そしてウフ　ドの殉死者たちを訪問しに行かれていました。墓地に眠る人々に挨拶をし、彼らと会話されたことは、ワッハーブ派の「ファトゥフ・ウル・マジード」という本の 985 ページにも書かれています。

預言者ムハンマドはドゥアーをされる際、「アッラーフンマ・インニー・アッサルーカ・ビ　ハックス－イリーナ・アライカ」すなわち、「アッラーよ、あなたから求め、あなたが与えられた人々の記憶のためにあなたから求めます」と言われ、このようにドゥアーをするようにと命じられました。聖アリーの母ファトゥマ（アッラーのお喜びがありますように）を、自らの神聖な手で墓に置かれ、「イグフィル・リウンミー・ファーティマタ・ビンティ・アサド・ワ・ワッシー・アライハ・マドゥハラハー・ビハッキ・ナビーヤカ・ワル・アンビヤーイッラズィーナ・ミン・カブリ・インナカ・アルハムラー　ヒミーン」と言われました。このドゥアーは「アッラーよ、母ファトゥマ・ビンティ・アサドをお許してください。彼女がいる場所を広げてください。預言者の権利のため、そして私より前に訪れた預言者たちすべての権利のためにこのドゥアーを受け入れてください。あなたは慈悲深い中でも最も慈悲深いお方です」という意味です。マディーナのアンサールの有力者であるオスマン・ビン・フナインが伝える聖ハディースでは、回復のためにドゥアを求めた盲人に、ウドゥーをして２ラ　カートの礼拝を行った後、「アッラーフンマ・インニー・アッサルーカ・ワ・アタワッジャフ・イライカ・ビー　ナビーヤカ・ムハンマディン・ナビーラフマ・ヤー・ムハンマド・

インニー・アタワッジャフ・ビカ・イラー・ラッビ・フィー・ハジャーティ・リタクディヤリ・アッラーフンマ・シャッヒフ・フィヤー」というドゥアーを唱えるよう命じました。このドゥアーでは、願いが受け入れられるよう、ムハンマドを媒介とすることが命じられています。教友たちはこのドゥアーをいつでも唱えていました。このドゥアーは「アシアトゥル・ラマート」の第2巻で、そして「フスヌル・ハシーン」でもその根拠と共に書かれています。解釈として「預言者たちを媒介として、あなたに戻ります」と書かれています。

これらのドゥアーは、アッラーが愛される人を媒介にし、彼らの記憶や敬意と共にドゥアーすることが許されているのです。

1361年（西暦1942年）に死去したアズハル大学の法学者であるシャイフ・アリー・マフフズは、1375年（西暦1956年）にエジプトで印刷された「アル・イブダー」という本で、イブニ・タイミーヤとアブドゥラーを非常に称賛している一方、213ページではこのように言っています。

「聖人（アッラーの慈悲がありますように）が死んだ後で、世俗的な物事において彼らを利用していると言うこと、例えば病人を回復させる、溺れる人を助ける、敵に対し彼らを助ける、なくしたものを見つけさせると言うことは、正しくない。彼らの位階が高いため、アッラーはこれらの仕事を彼らに委ねられたのである。『彼らが望むことを行う』と言うことは誤りである。しかしアッラーは、聖人の中から望まれる人に、生きている間、そして死後に恵みを与えられ、彼らの奇跡を通して病人を回復させられる。溺れかけている人を救われる。敵に対して彼らを助けられる。なくしたものを見出させる。こうであることが論理的に受け入れられる。クルアーンでもこのように伝えられている。」

アズハル大学の教授であるアブドゥラー・デスーキーとユースフ・デジュウィーは「イブダー」の本の最後に評を書き、この本を褒めています。

アブドゥルガーニ・ナブルシー（アッラーの慈悲がありますように）は、「ハディーカ」という本の 180 ページで次のように書いています。「ブハーリーがアブー・フライラから伝えた聖ハディースでは、「アッラーは、しもべはファルドを行うことで私に近づくほどには、他の何かによって私に近づくことはない。しもべがナーフィラ（義務ではない）崇拝行為も行えば、私は彼をとっても愛する。それにより、彼は私と共に聞き、ともに見て、私と共にすべてを手にする。私と共に歩く。私に求めるものは全て与える。私に庇護を求めれば、彼を守る、と言われた」とされています。ここで伝えられているナーフィラの崇拝行為は、ファルドを行った人が行うスンナやナーフィラです。（このことを、「マラークル・ファラフ」及びその「タフター ウィー」という注釈で明白に書いています。437 ページをご覧ください。）この聖ハディースは、ファルドを行った後、ナーフィラの崇拝行為も行う人はアッラーの愛情を得て、そのドゥアーが受け入れられる、ということを示しています。生きている間でも死んだ後でも、彼らがドゥアーした人は幸福を得るのです。死後も、聞いています。求める人を無駄に帰すことはなく、ドゥアーをします。このため、聖ハディースで、「仕事で困難に陥った時には、墓地にいる人々から助けを求めなさい」と命じられているのです。このハディースの意味は明らかです。この意味を歪曲することは不適切です。

「ハディーカトゥン・ネディーヤ」という本の 290 ページでは次のように語られています。「信者は眠っている間と同様に、死んでから後も新者である。預言者たちも、眠って

いる間と同様に、死んだ後も預言者である。なぜなら信者であり、預言者であるのは魂だからである。人が死んでも魂は変わらない。このことは、イマーム・アブドゥラー・ネセフの「ウムダトゥル・アカーイド」という本で書かれている。（この本は 1259 年（西暦 1843 年）にロンドンで出版されました。）また、聖人たちも眠っている時と同様、死んでからも聖人であることに変わりはありません。これを信じない人は無知であり、頑迷です。聖人は死んだ後も奇跡を起こすことがあることについて、別の本で証明しました。）ハナフィ派の学者であるアフマド・ビン・サイード・ムハンマド・マッキー・ハマーウィーとシャーフィー派の学者であるアフマド・ビン・アフマド・シュジャーイ及びムハンマド・シャウバリー・ムスリーは聖人は奇跡を起こすこと、奇跡は死後も続くこと、聖人の墓地で媒介や助けを求めることが許される ということを、根拠と共に証明する書簡を書いています。この三つの書簡は、アフマド・ザイニー・ダフラン（アッラーの慈悲がありますように）の、「アッドゥレルス・サーニヤ・フィッラディ・アラール・ワッハービヤ」という本と共に、1319 年（西暦 1901 年）にエジプトで出版され、1396 年（西暦 1976 年）にイスタンブールでオフセット印刷により出版されました。

コンヤル・ムハンマド・ハーディミー師（アッラーの慈悲がありますように）は 1176 年（西暦 1762 年）に、コンヤのハディームの町で死去しました。「ペリーカ」という本の 269 ページで次のように語っています。「聖人が奇跡を示すことは正しく、真実です。聖人はアッラーやその性質を可能な限り理解するムスリムという意味になります。服従と崇拜行為を大に行います。罪や我欲、性欲に従うことを大いに避けます。アッラーによって、通常のもの、科学の法則を超越して創造されたものを、「奇跡的なもの」と呼

びます。奇跡的なものは8つあります。奇跡、カラーマトゥ（驚異的な行い）、呪い、裏切り、魔術、試み、邪視、超常行動です。カラーマトゥは、篤信を備え、成熟した信者に生じる驚異的な出来事を意味します。これを行う人は聖人です。預言者ではありません。シャーフィー派の学者であるアブー・イスハック・イブラーヒーム・イスファライニーは、カラーマトゥの一部、そしてムウタ ズィラ派の人々の奇跡のすべてを否定しました。奇跡と混同されます。預言者を信じることは困難だ、といったのです。しかし聖人がカラーマトゥを示した時、彼が預言者であるとは言えません。カラーマトゥを示すことは望みません。預言者たち、聖人たちが死んだ後、彼らを媒介にしてアッラーに懇願することは許されています。このようなドウアーを行うことを「媒介」や「助けを求めること」と言います。なぜなら、彼らが死んだ後も、奇跡やカラーマトゥは継続していくからです。レムリも同じように語っています。イマーム・ウル・ハラマインは次のように語っています。「カラーマトゥが死後も継続することを否定するのはシーア派のみである。」エジプトのマーリキー派の偉人の一人であるアリー・アジュフリーは次のように語っています。「聖人は現世において、さやの中の剣のようである。死ねば、さやから抜かれた剣のようになり、そのできること、影響は強められる。」この言葉は、アブー・アリー・センジーも「ヌール・ウル・ヒダーヤ」という本で書かれています。カラーマトゥが真実であることは、啓典やスンナ、学者の合意においても揺るがないものです。聖人たちの何百、何千ものカラーマトゥが貴重な本で示されています。「ベリーカ」からの翻訳はここまでです。

「ミラートゥ・マディーナ」という本の160ページからは、次のように書かれています。ハディース学者であるイブ

ニ・フザイマとダール・クトゥニとタベラーニがアブドゥッラー・ビン・ウマルから伝えた聖ハディースで、「私の墓を訪問する人にとりなしを行うことは私の義務となった」と言われています。この聖ハディースは、イマーム・ムナーウィーの「クヌズ・ウドゥ・ダカーイク」という本にもあります。さらに、イブニ・ヒッバーの伝えた「私の死後、私の墓を訪問するものは、私が生きているうちに私を訪問したかのごとくとなる。」と、聖ハディースとタベラーニが伝える「私の墓を訪問する人にとりなしを行うだろう。」という聖ハディースも書かれています。イマーム・バツザールがアブドゥッラー・イブニ・ウマルから伝えた「私の墓を訪問した人々へのとりなしがハラルとされた。」という聖ハディース、そしてムスリミ・シェリフでアブドゥッラー・イブニ・ウマルが伝えている「私を訪問するためにマディーナに来る人々に、最後の審判の日にとりなしを行うことが私の権利となった。」という聖ハディースを、すべてのムスリムは知っています。

タベラーニとダール・クトゥニ、そしてイブヌル・ジャウズイーが伝える「巡礼を行う人、その後私に墓地を訪問する人は、私が生きている間に私を訪問したかの如くである」という聖ハディースはおおきな吉報です。ダール・クトゥニが伝える「巡礼を行った人が、私を訪問しないのであれば、私を悲しませたことになる」という聖ハディースは、巡礼を行い、差しさわりのないにもかかわらず幸福の墓地を訪問しない人々について伝えています。

マディーナのイスラーム大学の学長アブドゥルアジズは、「タフキークワイザフ」という本で、訪問することを奨励する上記の聖ハディースに、何の根拠も証拠もないことを書いています。全てでっちあげであるとシャイフル・イスラーム・タウミーヤが伝えている、としています。し

かしザルカーニーの「マワーヒブ」という注釈の第8巻で、そしてサムフーディーの「ヴェファアー・ウル・ヴェファアー」という本の第4巻の最後で、この聖ハディースの源が詳細に書かれており、真正なハディースであるとされています。イブン・タイミーヤのこの言葉はでっちあげだとされています。マディーナ大学のワッハブ派の学長や教授は、このようにしてスンナ派の学者の文章を貶めようとしており、自分たちの信条、本を通して世界にそれを広めています。世界のあらゆる人々、すなわちムスリムとそれ以外の双方を欺き、自分たちを真のムスリムと見せるため、新たな政治を利用しています。彼らは、「ラービアトゥル・アーラム・イル・イスラーム」という名のイスラームセンターを設立しました。各国のムスリムのうち、無知で箔のない宗教家を選び、ここに集めています。それぞれに何百もの金を給与として与えています。スンナ派の学者たちの本について知らない、この無知な宗教家たちを傀儡として利用しています。自らの信条をこのセンターから全世界へと広め、それを「世界イスラーム協会」のファトゥワである、としています。1395年（西暦1975年）のラマダン月に出されたこの種のでっちあげのファトゥワで、「女性たちにも、金曜礼拝を行うことはファルド（義務）である。金曜日やイードの説話は、それぞれの国で彼ら自身の言葉で読まれる。」と言いました。マッカのこの煽動や悪行の場のメンバーであるマウドゥーディンに所属するサブリという名の逸脱した人が、この説話をすぐにインドにもたらししました。インドの、豊かな給料を得てマンションを所有する無知な人々が、妻たちを無理やりモスクへと連れていきました。様々な言語で説話が行われるようになりました。インドのスンナ派の学者たち、正しい宗教者たち（アッラーの慈悲がありますように）は、この動きを妨げようと貴重な

文献からファトゥワを用意し、書きました。ワッハーブ派はこの学問的な文章に返答を出せず、正しい言葉に対して対抗できませんでした。インド南部の「ケララ州」では、何百もの宗教者が欺かれたことに気づき、悔悟を行ったのでした。そして再び、スンナ派の列に加わったのでした。スンナ派の学者たちの、確かな源に基づいたこの貴重なファトゥワのうち4部は、オフセット印刷により出版され、全イスラーム世界に送付されました。各地の正しい宗教者たちは 彼らに対して、ムスリムを欺き、イスラームを内部から崩壊させ、分裂させる滅亡の火を消そうと努力しています。アルハムドゥリッラー、世界の各地で、清らかな魂を持つ覚醒した若者たちは真実と逸脱を区別しています。

イブニ・アービディン（アッラーの慈悲がありますように）は、金曜日の礼拝の説話とイフティターフのタクビール、そして礼拝中のドゥアーについて次のように説明しています。「説話を、アラビア語以外の言語で行うことは、礼拝中に別の言語でイフティターフのタクビールを行うのと同様である。これは礼拝における他のズィクルと同じである。礼拝中のズィクルやドゥアーをアラビア語以外の言語で行うことは、ハラームに近く避けるべきことである。聖ウマルが禁じている。」礼拝のワージブについて、以下のように語っています。「ハラームに近く、避けるべきことである行為を行うことは、大きな罪となる。これを行う人の正義が損なわれる。」また「タフター ウィー」では次のように語っています。「小さな罪を続ける人は、ファースク（罪を犯した人）となる。ファースクであり、ビドゥアを行うイマームの後ろで礼拝を行ってはいけない。他のモスクで礼拝を行うべきである。」教友たちやタビーウーン（アッラーの慈悲がありますように）は、アジアやアフリカで説話の全てをいつも アラビア語で読んでいました。なぜなら説

話の全てもしくは一部を他の言語で読むことは避けるべきであるし、ビドゥアとなるからです。ビドゥアは大きな罪です。しかしそれを聞く人はアラビア語を知らず、説話を理解できていませんでした。宗教的知識もありませんでした。彼らに教える必要がありました。それでも、やはり説話の全てをアラビア語で読んでいました。このため、オスマン帝国のシャイフル・イスラームの師たち、そして世界的に知られる偉大なイスラーム学者たちは600年以來說話をトルコ語でも読ませ、礼拝を行う人々が理解できることを求めてきたものの、許されないことであるとされるため、許可は出されませんでした。

イマーム・ベイハキーがアブー・フライラ（アッラーのお喜びがありますように）から伝えた聖ハディースでは、
「誰かが私に挨拶をすれば、アッラーは私の魂を私の肉体に与えられ、彼の挨拶を聞く。」とされています。イマーム・ベイハキー（アッラーの慈悲がありますように）はこの聖ハディースに基づき、預言者たち（アッラーの祝福がありますように）が墓地において私たちがしらない生命によってよみがえる、と語っています。

マディーナのワッハーブ派であるアブドゥルアジズ・ビン・アブドゥラーは、「アル・ハジュ・ワルウムラ」という本の66ページでこの聖ハディースを書き、このハディースは彼が死者であることを示す としています。同じページで、墓地において、未知のある生命によってよみがえる、としています。彼の言葉は矛盾しています。しかしこの聖ハディースは、神聖な魂が訪れ、挨拶に返事をすることを教えているのです。またこの本の73ページで書いている二つの聖ハディースでは、「墓地を訪問する際に、『アッサラーム・アライクム・アフ・アル・ディヤール・ミナル・ムー ミニーン』と唱えることが命じられています。この聖ハ

ディースでは、すべてのムスリムの墓に挨拶を行うことが命じられています。聞いている人に、挨拶を行います。聞いている人と会話をを行います。一方ではこの聖ハディースを伝え、その一方で、死者は聞かない としています。死者が聞いているということを信じる人々を、多神教徒と呼んでいます。クルアーンの章句や聖ハディースに誤った意味を与えているのです。

アッラーの使徒が、墓において未知の生命によってよみができることを知らせる多くのハディースがあります。「私の墓地のそばでなされる祝福祈願を私は聞く。遠くでなされる祝福祈願は私に伝えられる。」そして、「誰かが私の墓地のそばで祝福祈願を行えば、アッラーは天使を遣わされ、この祝福祈願を私に伝えられる。最後の審判の日に私は彼にとりなしを行う。」という聖ハディースは、有名な 6 つの本に記されています。

ムスリムがこの 世界にいる際、 知っているムスリムの墓を尋ねて挨拶を行えば、墓地にいる人は、挨拶を行う人を知り、返事をします。イブニ・エビッドウンヤーが伝えている聖ハディースでは、ムスリムの死者は挨拶 した人を知り、喜び、返事をするのが伝えられています。知らない死者に挨拶を行えば、その挨拶に喜び、返事をします。誠実な人々、殉教者たち（アッラーの慈悲がありますように）は、挨拶をする人を知って返事をするのに、アッラーの使徒（アッラーの祝福と平安がありますように）が知らないでいることがあり得るでしょうか？空で、太陽がすべての場所に光を与えるように、アッラーの使徒（アッラーの祝福と平安がありますように）も一瞬のうちに、あらゆる場所でなされている挨拶に答えられるのです。

ある聖ハディースでは、「私は死後も、生きている時と同じように聞く 」と、また アブー・ヤーラーンが伝えて

いる聖ハディースでは、「預言者たち（アッラーの祝福がありますように）は墓地で復活する。礼拝を行う。」としています。イブラーヒーム・ビン・ビシャルとサイード・アフマド・ルフアーやその他多くの聖人たちが、アッラーの使徒に行った挨拶の返事を聞いています。

ジャラーレディン・スューティー師に、「サイード・アフマド・ルフアーが、アッラーの使徒の祝福された手にキスをしたというのは本当ですか？」と聞かれた時、その返事として「シェレフ・ウル・ムフケム」という本を書きました。この本で、アッラーの使徒（アッラーの祝福と平安がありますように）が幸福の墓において未知の生命によって蘇っていること、挨拶を聞いて返事をするを、論理的な証拠とともに証明しています。ミラージュの夜にアッラーの使徒は、預言者ムーサーが墓地で礼拝を行うところを見られた、ということもこの本で伝えられています。

アーイシャ・イ・スッドウカ（アッラーのお喜びがありますように）が伝えている聖ハディースでは、「**ハイバルで食べた毒入りの肉のひがみを感じている。あの毒の影響で静脈血管が働かない状態になった**」と言われました。アッラーが、人々のうち最も優れている預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）に、預言者であることとともに、殉教者という位階をも与えられたことを、この聖ハディースは示しています。イムラーン家章 169 章では「**アッラーの道のために殺害された者を、死んだと思っ**てはならない。いや、かれらは主の御許で扶養されて、生きている。」とされています。アッラーの道において毒を食べさせられたこの偉大な預言者が、この章句で告げられている誉れある位階の最も高いところにいられることは疑いもないことです。

イブニ・ヒッバーンが伝える聖ハディースでは、「**預言者**

たち（アッラーの祝福がありますように）の神聖な体は腐らない。信者が私に祝福祈願を行えば、天使がその祝福祈願を私にもたらし、ウンマの誰その息子誰それがあなたに祝福祈願と挨拶を送った、という。」とされています。イブニ・マジャが伝えているハディースでは、「金曜日には私に多くの祝福祈願を送りなさい。なされた祝福祈願は私にすぐに伝えられる。」とされています。これを聞いていたアブッデルダー（アッラーのお喜びがありますように）は「死後にも伝えられるのでしょうか。」と言ったのに対し、「そう、私が死んだ後にも伝えられる。なぜなら、土には、預言者たちを腐らせることが禁止された。彼らは死後よみがえり、糧を与えられる」と言われました。（この聖ハディースは、セナーウッラー・パーニ・プーティの「タズキラトゥル・マウタ・ワル・クブール」という本の最後でも書かれています。この本はペルシア語であり、1310年（西暦1892年）にデリーで、1990年にはハキークトウ出版によってイスタンブールで出版されています。）

聖ウマル（アッラーのお喜びがありますように）は、エルサレムをカーフィルから奪った後、幸福の墓地へと行き、預言者の墓を尋ね、挨拶しました。聖人の中でも偉大な存在であるウマル・ビン・アブドゥルアジズ師は、ダマスカスからマディーナへ役人として派遣され、幸福の墓地で祝福祈願と挨拶を行いました。アブドゥラー・イブニ・ウマル師は、旅から戻った時、まっすぐ幸福の墓地に向かい、まず預言者ムハンマドを、そしてアブー・バクル・スドゥークを、最後に自分の父を訪問し、挨拶をしていました。イマーム・ナーフィは次のように語っています。アブドゥラー・イブニ・ウマル師が幸福の墓地に来て、「平安をあなたに、アッラーの使徒よ！」と言っているところを100回は見ました。聖アリー（アッラーのお喜びがありますように）

はある日、シャリフ・モスクに来て、聖ファーティマ（アッラーのお喜びがありますように）の神聖な場所を見て泣きました。それから幸福の墓廟へ 行き、大いに泣きました。そして「平安をあなたに、アッラーの使徒よ！平安をあなたに、二人の兄弟よ！」と言い、アブー・バクルとウマルにも挨拶を行いました。（アッラーのお喜びがありますように）

イマーム・アザーム・アブー・ハニーファによると、まず巡礼を行い、それからマディーナに行き、アッラーの使徒を訪問するべきです。アブッライシ・サマルカンドイのファトゥワでもこのように書かれています。

「シファー」の本の筆者であるカーディ・イーヤード及びシャーフィー派の学者であるイマーム・ナワーウィー、そしてハナフィー派の学者であるイブン・フマイン（アッラーの慈悲がありますように）は、幸福の墓地を訪問するべき、ということに対しウンマの合意が生じている と語っています。一部の学者は、ワージブであるとしています。そもそも、墓地の訪問がスンナであることは、ワッハーブ派の「ファトゥワ・ウル・マジード」という本でも書かれています。

婦人章第 63 節では、「もしかれらが間違った時あなたの許に来て、アッラーの御容赦を願い、使徒が、かれらのために御赦しを祈るならば、かれらはアッラーが、度々許される御方、慈悲深い御方であられることが分かるであろう。」とされています。この章句は、アッラーの使徒（アッラーの祝福と平安がありますように）がとりなしを行われること、そのとりなしが認められるであろうことを伝えています。さらに、幸福の墓地の訪問のために遠方から来て、とりなしを求めることを命じているのです。

「三つの礼拝所に行くためにのみ、遠方への旅に出る。」と

いう聖ハディースは、マッカのハラーム・モスク、預言者モスク、そしてエルサレムのアルアクサ・モスクへの訪問のために遠方への旅に出ることが善行となることを伝えています。このため、巡礼に行き、預言者モスクにある幸福の墓を訪れない人は、この善行の報酬を得ることができないのです。

イマーム・マーリクは、「永遠の墓地を訪問した人が、永遠の墓廟のそばに 長く居続けることは避けるべきである。」としています。イマーム・ザイナルアービディーンは、幸福の墓地を訪問する際、「天国の庭園」の方からまっすぐそばに行き、それ以上は近づきませんでした。聖アーイシャは、亡くなるまで、幸福の墓廟の外側で、キブラに向かって立ったままで訪問を行いました。

ハディース学者であるアブドゥルアズィーム・ムンズィリー師は「**私の墓を祝日にしてはいけない**」という聖ハディースの意味を解釈する際、「私の墓を、祝日のように年に一度訪問するだけの場にしてはいけない。常に訪問する努力をなさい」という意味である、としています。「**あなたの方の家を墓地にしてはいけない**」という聖ハディースも、あなたの方の家を、礼拝を行わないことで墓地に似せてはいけない、という意味であるため、ムンズィリー師の与えた意味が正しいことがわかります。なぜなら墓地で礼拝を行うことは許されていないからです。ハディースの意味は、「私の墓地を訪問するために、祝日のように一定の日を定めてはいけない」という意味でもあり得る、としています。ユダヤ教徒やキリスト教徒は、彼らの預言者たちの墓の訪問のために集まり、楽器を演奏したり歌を歌ったり、祝ったりしていました。あなた方はそのようなことをしてはいけない、訪問のために、祝日に禁じられていることで楽しむかのように笛を吹いたり太鼓を叩いたりしてはいけない、

集まって儀式を行ってはいけない、という意味です。訪問のために来て、挨拶を送り、ドゥアーをし、あまり長く滞在してはいけないのです。

イマーム・アザーム・アブー・ハニーファ（アッラーの慈悲がありますように）は、次のように語っています。「幸福の墓地を訪問することは、スンナのうち最も尊いものである。」ワージブであるという学者たちもいます。このため、シャーフィー派では幸福の墓地を訪問することが奨励されています。

「ミラーティ・マディーナ」の 1282 ページからは、次のように書かれています。アッラーが、「あなたを創造していなければ、何も創造していなかっただろう」と言われ、預言者 ムハンマドがアッラーの愛されるお方であること、彼を深く愛されることを告げられています。この聖ハディースについてイマーム・ラッバーニ（アッラーの慈悲がありますように）は、「書簡集」の第 3 巻、第 122 の手紙でも書かれています。低俗な人間ですら、愛する人のためには求められるものを拒みません。愛する存在のために物事を行うことは容易です。誰かが「主よ、あなたが愛されるお方ムハンマド（アッラーの祝福がありますように）のためにあなたから求めています」というなら、この要求は拒まれないのです。しかし、価値のない世俗的な事柄のために預言者ムハンマドの恩や敬意を媒介とすることは適切ではありません。

イマーム・アーザム・アブー・ハニーファ（アッラーの慈悲がありますように）は次のように語っています。「私はマディーナにいた。誠実な人々のうち、シャイフ・アイユービー・サフティヤーニーが、シェリフ・モスクに入った。私も一緒に入った。シャイフ師は、預言者の墓地に対して向き直り、キブラを背後にする状態で立ち止まった。それ

から外に出た。」イブニ・ジャマー師の「マスナキ・カビール」という本では次のように書かれています。「訪問する際には、ミンベルのそばで2ラ カートの礼拝を行い、ドゥアーの後、幸福の墓廟のキブラの方向に行き、神聖な頭を左側にする形で、「マルカディ・シャリフ」の壁から2メートルほど離れているべきである。それから少しずつキブラの壁を背にし、キブラ側に向き直った時に挨拶を行うべきである。すべての法学派においてもこの通りである。」

「ハディーカ」で舌による災いの23番目の説明の際に、次のように書かれています。「ドゥアーする際、預言者たちの権利のため、あるいは生きている、もしくは亡くなっている聖人の権利のためと言い、アッラーに何かを求めるのは、避けるべき事柄です。つまりアッラーは誰かの求めることを行う義務は負われていません。なぜならアッラーには、どのような被造物の取り分もないからです。」これは事実です。しかしアッラーは愛されるしもべに約束をされ、彼らに権利を与えられています。つまり彼らが求めたことを受け入れられるのです。しもべたちに対し、ご自身から取り分がある とされていることが、クルアーンで示されています。例えばある章句では、「**信者たちを助けることは、彼らが私に対して持つ権利となった**」とされています。「ベッザーズィーヤ」のファトウワでは次のようにされています。「生きている、もしくは死んだ聖人もしくは預言者の名を語り、その敬意を通して何かを願うことは許される。」「シラー」の注釈で、「預言者たちや誠実なしもべたちを媒介としてドゥアーするべきである。」「フスヌ・ウル・バシーン」でもそのように書かれている。」とされています。このように イスラーム学者は、アッラーが愛される存在に与えられる権利と敬意を介してアッラーにドゥアーすることは許される、としています。しもべが、アッラーに対し

て何か権利を持っていると思い込んで、この権利によって要求することは多神教になるという学者は誰もいません。このことはただワッハーブ派のみが話しているのです。

「フェトゥフ・ウル・メジード」でベッザーズィーヤのファトゥワを称賛し、このファトゥワを根拠として主張しているにもかかわらず、ここではそれに対し矛盾しています。「ベリーカ」で、やはり舌の災いについて説き、次のように語っています。「預言者、聖人の権利のために、ということは、彼が預言者であることが真実であり、聖人であることが真実である、ということです。預言者ムハンマドもこの意図で、「あなたの預言者ムハンマドの権利のために」と言われたのであり、戦いにおいてアッラーから、移住者の貧困者の権利のために助けを求めました。イスラーム学者のうち、『あなたから求めた時にあなたが与えられる相手の、権利のために』及び『ムハンマド・ガザーリーの権利のために』といったドゥアーを行う人や、本に書く人はたくさんいました。」「フスヌルハシーン」という本はこのようなドゥアーで満たされています。「ルフ・ウル・ベヤーン」のクルアーン解釈本では、食卓章第 18 節について次のように書かれています。ウマル・ウル・ファールク（アッラーのお喜びがありますように）が伝えた聖ハディースで、「預言者アーダムが過ちを犯した時、主よ、ムハンマド（アッラーの祝福がありますように）の権利のために私をお許してください、と言いました。アッラーは、私はまだムハンマドを創造していない、彼をどうして知っているのか、と尋ねられました。主よ、私を創造され、魂を与えられた時、私は頭を上げました。天球の裾野にラー・イラーハ・イッラッラー、ムハンマドゥン・ラスールッラーと書いてあるのを目にしました。あなたの名前の隣に、最も愛される人の名が書かれることでしょう。このことを考え、彼を

とても愛されていると理解しました、と言いました。アッラーもそれに対し、『アードムよ、あなたの言うことは正しい。被造物の中で最も愛しているのは彼である』と言われました」この聖ハディースはイマーム・ベイハキーの「デラーイル」という本で書かれています。アールシーの「ガリーヤ」という本にも書かれています。

「ファトゥフ・ウル・マジード」という本の259ページでは、イマーム・ザイナルアービディーン・アリー（アッラーの慈悲がありますように）師が、誰かがアッラーの使徒の墓のそばに来てドゥアーをしているのを見て、それをやめさせ、「私に祝福祈願をなさい。どこでそれを行ったとしても、あなた方の挨拶は私に届けられる」というハディースを教えたことが書かれています。出来事を誤った形で説き、「ここからも理解できるように、ドゥアーや祝福祈願を行うために墓のそばまで行くことは禁じられている。これは、墓地を祝日の場とすることの一端である。預言者モスクに礼拝を行うために入った人が、挨拶を行うために墓のそばまで行くことは禁じられている。教友で、このようなことを行った人はいなかった。それをしようとした人にやめさせていた。預言者には、ただそのウンマが唱えた祝福祈願と挨拶だけが伝えられる。他のことは伝えられない。」と書いています。これを防ぐため、サウジ政府は預言者モスクの内部に（幸福の墓廟のそばに）兵士を配置していることも、234ページで書かれています。

ユースフ・ネブハーニは「シャワーヒド・ウル・ハック」という本の様々な個所でこれらへの返答を書いています。80ページでは、「イマーム・ザイナルアービディーン（アッラーの喜びがありますように）は、アッラーの使徒の祝福された墓地を訪問することを禁止したのではない。イスラームに適さない、敬意を持たずに行われる訪問を禁止した

のだ。孫のイマーム・ジャーファル・サードウクは、幸福の墓廟を訪問し、「清らかな庭園」側の柱のそばで止まり、アッラーの使徒に挨拶を送り、神聖な頭はここにあるのだ、と言っていた。「私の墓地を祝日としてはいけない」というのは、訪問を一定の時期のみに限定しないように、いつでも訪問しなさい、という意味である。」としています。88 ページ、106 ページでは、「アブー・アブドゥラー・クルトゥビーは「タズキラー」で語っている。アッラーの使徒には、ウンマの善い行いが毎朝毎晩知らされる」とされています。89 ページ、116 ページでは、「カリフ・マンスールはアッラーの使徒を訪問する際、イマーム・マーリクに尋ねた。「私の顔は墓の方に向ければいいのか、キブラの方に向ければいいのか。」イマーム・マーリクは答えていった。「あなたの顔をアッラーの使徒がどうやって認識できるでしょうか？彼（アッラーの祝福と平安がありますように）はあなたとあなたの父アードムが許されるための要因である。」としています。92 ページでは、「墓を訪問しなさい」という聖ハディースは命令である。訪問する際にハラームとなるのであれば、訪問は禁止され得ない。ハラームを行うことが禁じられる。」とされています。98 ページでは「イマーム・ナワウィーは「アズカル」という本で、「アッラーの使徒と誠実なしもべたちの墓を大いに訪問し、訪問するごとに墓のそばで長くいることはスンナである。」とかあっています。100 ページでは、「イブニ・ヒュマームは「フェトゥフ・ウル・カディール」という本で、ダール・クトゥニンとベッザールが伝える聖ハディースを書いています。この聖ハディースでは「他の仕事のためではなく、ただ私を訪問するためだけに来た人は、最後の審判の日のとりなしについて、私に対して 権利を持つ」とされています。118 ページでは「アッラーは聖人に奇跡を与えられた。聖人た

ちは死後も多くの奇跡がみられる。死後もその力を示す。彼らをアッラーへの媒介とすることは許される。しかしイスラームに適した形で行わなければならない。無知な人々が、私が望むものを与えれば、もしくは病気を治してくれれば、あなたにこれだけの...を与えよう、ということは許されない。しかしそれを教えへの憎悪、多神教と呼ぶことはない。なぜなら非常に無知であったとしても、聖人がそれを実行するとは考えない。聖人を、アッラーがそれを実行されるための媒介としているのだ。彼がアッラーの愛されるしもべであることを考えているのである。願いをかなえることは、アッラーに求めなさい。アッラーはあなたのドゥアーを拒まれない、と言う。なぜならアッラーの使徒（アッラーの祝福と平安がありますように）は、「**低俗で価値がないと考えられる人の中には、アッラーの愛されるしもべである人がたくさんいる。彼らが何かを行うことを望めば、アッラーもそれを当然創造される**」としています。この聖ハディースは「**ファトゥフ・ウル・マジード**」というワッハーブ派の本の 381 ページでも書かれています。ムスリムはこのような聖ハディースを信じ、聖人たちを媒介とします。イマーム・アフマド、イマーム・シャーフィー、イマーム・マーリク、そしてイマーム・アーザム・アブー・ハニーファは「**誠実な人々の墓で、それらを媒介として求めることは許される。**」と語っているのです。スンナ派の 4 つの法学派の一つに属すること、スンナ派であることを語る人も、このように見なすことが必要です。このように見なさないのであれば、スンナ派ではないこと、嘘をついていることが明らかになります。「**ファトゥワーイ・ヒンデイー**」で、他者の代わりに巡礼に行くことについて説く際、次のように書いています。「**行われるイバーダの褒章を、他人に譲ることは許される。こうして、礼拝、断食、喜捨、**

巡礼、クルアーンを読むこと、ズィクル（唱念）を行うこと、預言者たち、殉死者たち、聖人たち、誠実な人たちの墓地を訪問すること、死者に白布を与えること、そしてあらゆる善行の褒章を譲ることができる。」聖人の墓地を訪問することが善行であることは、ここからも理解できます。

（ズィクルには種類があります。そのうちの一つは「アッラーフ・アクバル、アッラーフ・アクバル、ラーイラーハイッラッラー フ・ワッラーフ・アクバル」と唱えることです。これを「**タシュリーク・タクビール**」と呼びます。これを何度も唱えるべきです。「**悔悟のドゥアー**」も、効用が非常に多いズィクルです。）

ここまでで示された根拠は、アラビア語及び英語の本で詳しく書かれています。アッラーはムスリムに、一体となることを命じておられます。だから全ての信者が、「**スンナ派の信条**」を学び、この偉大な学者たちがそれらの本で教えているように信仰し、この正しい道において一体となる ことが必要です。正しい道はただ「**スンナ派**」であることを、預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）が伝えられています。ムスリムを騙そうとする逸脱した人々、そして宗教書で商売をしている無知な宗教者の金メッキに覆われた文章に騙され、スンナ派の統一から離れてしまうことに十分注意を払うべきです。ムスリムの統一を破壊する者は地獄に行くことを、アッラーは婦人章の 114 節で明白に示されています。4 つの法学派のどれか 1 つに従わない人は「**スンナ派**」の統一から離れたことになり、このような宗派を持たない人も逸脱し、あるいはカーフィルとなることは、偉大な学者アフメッド・タフターウィーの「**ドゥッル・ウル・ムフター ル**」の注釈で、そして「**アル・バサーイル・アラー・ムンキリート・タワッスル・ビルマカービル**」という本で、根拠と共に書かれてい

ます。この本は、「ファトゥフ・ウル・マジード」という本に対する否定であり、パキスタンで書かれ、第2版はイスタンブールで出版されました。

イブニ・タイミヤーが、「スンナ派の法学派」から離れたことは、「アッ・タワースル・ビン・ネビー・ワ・ジャハラトゥ・ウル・ワッハービーン」という本で確認されています。タイミヤーの逸脱した文章と、イギリスのスパイ・ヘムファーの嘘と中傷が一緒になったものを、「ワッハーブ派」と呼ぶのです。

3-墓の上に墓廟を作ること、墓廟で奉仕し、崇拜行為を行う人々に燈明をともすこと、死者の魂に喜捨をささげること、多神崇拜、教えへの憎悪だとしています。ハラマインの住民はこれまで、ドームや壁を崇拜していたとしています。

墓の上に墓廟を作することは、飾りや見せかけのためであればハラームです。墓地が破壊されないためであればマクルフ（忌避されるもの）です。動物や泥棒が墓を暴かないためであれば、許されます。しかし訪問されるべき場所とはしないことが必要です。つまり、一定の時期に訪問するべきである、とは言ってはいけないのです。

人を前もって建てられた建物の中に埋葬することは、マクルフではありません。教友たちは、アッラーの使徒や二人のカリフを建物の内部で埋葬しました。誰もそのことに反対はしませんでした。彼らの意見の一致には逸脱はないことを、聖ハディースは教えています。偉大なイスラーム学者イブニ・アービディンは、「ドゥッッル・ウル・ムフタールの注釈」第5巻の232ページで次のように書いています。「学者たちの一部は、誠実な人々や聖人たちの墓の上に覆いをしたり、帽子をのせたりすることはマクルフである

と言った。「ファターワ・イ・フッジャ」でも、墓を覆うことがマクルフである、とされている。しかし我々の考えによるなら、墓にいる人の価値を皆に伝えるために覆うなら、そして侮蔑したりせず、訪問者が敬意をもって道徳的に振舞うためであれば、許される。「エディツレ・イ・シャーリア」により禁止されていない行動、行為はその意志によって評価される。そう、墓の上に墓廟を作ること、棺、覆いを置くことは、教友の時代にはなかった。しかしアッラーの使徒やシャイハーンが部屋に埋葬されることを否定する人も全くいなかった。このため、そして「**墓を踏んではいけない**」「**死者に失礼な振舞いをしてはいけない**」という命令を実行するため、そして禁止はされていないため、これらが行われることはビドゥア（後から捏造されたもの）にはならない。別れのタワーフ以降、ハラーム・モスクからすぐに出ること、これによって崇高なるカーバに敬意を示すことが必要であることを、あらゆるフィクフの書物が教えている。しかし教友たちはこのように行わなかった。なぜなら彼らは、あらゆる行動において、カーバに敬意を示していたからである。それ以降の世代は、そのような敬意を示さなかったため、学者たちはモスクから後ろ向きに出て、敬意を示すべきであると示したのである。教友のように敬意を持った振舞いを取ることを、これによって可能としたのだ。誠実な人々や聖人たちに対し、教友と同じように敬意を持って振舞うことができるよう、上を覆うこと、墓廟を作ること、このように許されるものとなった。偉大な学者アブドゥルガーニ・ナブルシー師は、「**ケシュフ・ウン・ヌール**」という本で、このことを詳しく書いている。」

「**ケシュフ・ウン・ヌール**」は、ジャラールッディン・スユーティ（アッラーの慈悲がありますように）の、「**タンヴェイー ル・ウル・ハラク・フィー・イムカーヌ・ルーヤティ**

ン・ナビー ・ジハーラン・ワル・マラク」という本と共に、アラビア語で 1393 年（西暦 1973 年）に「ミンハトゥル・ワフビヤ」と共にイスタンブールで出版されました。アラビアでは墓廟を「マシュハド」と呼びます。マディーナの永遠なる「バーキー」墓地は、マシュハドで満たされていました。ワッハーブ派は全てを破壊しました。どのイスラーム学者も、墓廟を作ること、墓廟を訪問することを多神崇拜、教えへの憎悪であるとは言っていません。墓廟を破壊した人も全くいませんでした。

イブラーヒーム・ハレビー（アッラーの慈悲がありますように）は、「ハレビー・カビール」の最後で次のように書いています。「誰かが自分の畑を墓地にした場合、死者の埋葬のためにここに廟を作るとは、墓地に空いている場所があれば、許される。他の場所がなければ、廟は壊され、そこに墓が掘られる。なぜならそこは、墓を作るために寄進されたからである。」廟が多神崇拜であるなら、常にそれは壊されるべきとされていたでしょう。地上に存在するイスラーム墓廟の一つ目は、アッラーの使徒（アッラーの祝福と平安がありますように）の亡骸のある場所です。アッラーの使徒（アッラーの祝福と平安がありますように）は、深く愛された妻アーイシャ（アッラーのお喜びがありますように）の部屋で、ヒジュラから 11 年度、ラビーウルアッワル月の 12 日目、月曜日の午前中に亡くなりました。水曜日の夜、この部屋に埋葬されました。アブー・バクルとウマル（アッラーのお喜びがありますように）も、この廟に埋葬されました。教友の誰も、それを妨害しようとはしませんでした。彼らは教友たちのこの同意に対抗しているのです。疑わしい根拠を誤って解釈して、「**ウンマの意見の一致**」を否定することは、教えへの憎悪ではなかったとしても、ビドゥアにあたります。

アーイシャ（アッラーのお喜びがありますように）の部屋は、3メートルの高さ、3メートルの幅、そして4.5メートルの奥行きがあり、レンガで作られていました。一つは東側、一つは北側の壁に、合計二つの入り口がありました。ウマル（アッラーのお喜びがありますように）はカリフ時代、幸福の墓廟の周囲に短い石の壁を設けました。アブドゥラー・ビン・ズバイル（アッラーのお喜びがありますように）がカリフ時代、この壁を壊し、黒い石で新たに壁を作りました。この壁は見事な漆喰でした。この壁は上部が開いており、北側に入り口がありました。ハサン（アッラーのお喜びがありますように）はヒジュラ歴 49 年に死去した時、フサイン（アッラーのお喜びがありますように）は弟の遺体を「幸福の墓廟」に運ばせ、懇願やドゥアーを行う際、彼がその場で埋葬されるのだと思い込み、それを望まない人々がいました。その騒ぎを収めるため、「永遠の墓地」に埋葬されました。将来的にこのような醜い状態が生じないように、壁や部屋の入口が閉鎖されました。

ウマイヤ朝の第 6 代カリフであるワリードは、マディーナ知事であった時、石の壁を高くさせ、その上を小さなドームで覆いました。カリフになると、マディーナ知事となったウマル・ビン・アブドゥルアジズに命令を与え、88 年（西暦 707 年）にマスジド・シャリフを回収する際にこの壁の周囲にもう一つの壁を作らせました。この壁は五角形であり、上部は閉じられていました。これには入り口は全くありませんでした。（さらに詳しい知識を得るためには、「最後の審判と来世」という本の、「ムスリムへの提言」という章の第 15 条の最後を読んでください。）

「ファトゥフ・ウル・マジード」という名のワッハーブ派の本の 133 ページでは次のように書かれています。「木、石、墓、その他類似するものを通して懇願を行う人は多神

教徒となる。墓の上に廟が作られ、偶像とされてきた。無知な人々が、誠実なしもべであった人々や偶像を崇拜している。これらの全て、そしてさらに悪いことが、現在では墓廟や墓地で行われている。誠実なしもべであった人々の墓を媒介にして懇願することは、まさに偶像を崇拜することのようである。聖人がドゥアーを聞き、答えることができるのと彼らは思っている。墓地を訪問し、サダかを支払うことで死者に近づくことができると語っている。このすべてが多神崇拜である。多神教徒は、自分たちを別の名称で読んだとしても、やはり多神教徒である。死者に敬意や愛情を示し、ドゥアすること、動物を屠ること、願をかけること、これらに類似することを行うことにどのような名前をつけたとしても、全てが多神崇拜である。今日の多神教徒は、これらの行いを「敬意を払う」「その存在を通して懇願する」と呼び、許されていると主張している。これらの疑惑は誤りである。」

スンナ派のムスリムに対しなされるこの攻撃や中傷に対し、イスラーム学者たちが出してきた返答の一部をトルコ語に翻訳し、様々な本に記してきました。ここで、「**ウスル・ウラルバ・フィー・タルディーディル・ワッハービヤ**」という本の第一版の一部を翻訳します。注意深く読めば、ワッハーブ派の欺瞞、逸脱、そしてムスリムを滅亡へと引きずり込んでいることがすぐに理解されます。

アッラー以外に敬意を示すことが許されていることは、クルアーンや聖ハディース、そして誠実な先人たちの言葉、行いにより、そして学者の多くにより、伝えられています。巡礼章第 32 節では「**アッラーの儀式を尊重する態度は、本当に心の敬虔さから出てくるもの。**」とされています。このため、アッラーの儀式を尊重することは許されています。儀式とは、印、象徴を意味します。アブドゥルハック・ダ

フラウィー（アッラーの慈悲がありますように）は「儀式とは、印という意味である。それを見た時にアッラーを思い起こさせるすべてのものは、アッラーの印である。」と述べています。雌牛章第 158 節では「**本当にサファーとマルワは、アッラーの印の中である**」とされています。この章句からも理解されるように、アッラーの印は、サファーとマルワだけではなく、これ以外の印もあるのです。同様に、印とは単にアラファト、ムズダリファ、ミナーと呼ばれる場所のことでもありません。シャー・ワリーユッラー・ダフラウィーは「**フジャトウッラー・イル・バーリガ**」という本の 690 ページで「アッラーの印のうち最大のものは 4 つである。クルアーン、偉大なるカーバ、預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）、そして礼拝である。」と語っています。シャー・ワリーユッラー（アッラーの慈悲がありますように）は「**アルタフ・ウル・クドゥス**」という本の 30 ページで、次のように語っています。「アッラーの印を愛するということは、クルアーンと預言者（アッラーの祝福と平安がありますように）、そしてカーバを愛するということである。さらには、アッラーを思い起こさせる全てを愛することである。アッラーの聖人を愛することもまたそうである。」（**なぜなら、聖人を見るとアッラーが思い起こされるからです。**）このハディースは「**イブニ・アビー・シャイバ**」や「**イルシャド・ウトウ・ターリビーン**」にも、「**クヌーズ・ウドゥ・ダカー イク**」にも書かれています。この聖ハディースからも理解されるように、聖人たちもアッラーの印です。聖人や学者に敬意を払うために墓の上に廟を作ることが許されることは、「**ジャミーウル・ファトウワ**」でも書かれています。マッカの町で、ハラーム・モスクのそばにあるサファーとマルワという名の二つの丘の間で、イスマーイール（アッラーの平安があり

ますように)の母ハージャルが行き来したため、この二つの丘もアッラーの印となっています。この神聖な母親を思い起こさせる要因となっているのです。そうであるなら、全ての被造物のうち最も崇高で、アッラーの愛されるお方であるムハンマド(アッラーの祝福と平安がありますように)が生まれ、育ち、崇拜行為を行い、ヒジュラを行い、礼拝を行い、亡くなった場所や神聖な墓廟、そして家族や教友たちの場所がアッラーの印とならないことはあるでしょうか?それらを彼らはなぜ破壊するのでしょうか?(ここでの家族とは、神聖な妻たち、そしてその家の人々を指します。)

クルアーンを注意深く、そして良心をもって読めば、多くの章句で預言者ムハンマドに敬意を払っていることがすぐに読み寄れます。部屋章でも「**信仰する者よ、あなたがたはアッラーとその使徒を差し置いて勝手な振舞いをしてはならない。アッラーを畏れなさい。本当にアッラーは全聴にして全知であられる。信仰する者よ、あなたがたの声を預言者の声よりも高く上げてはならない。またあなたがたが互いに声高に話す時のように、かれに大声で(話して)はならない。あなたがたの気付かない中に、自分の行いを虚しくしないために。本当にアッラーの使徒の前でその声を低くする者は、アッラーがその心の敬虔さを試みられた者である。かれらには、赦しと偉大な報奨があろう。本当に部屋の外から大声であなたを呼ぶ者の多くは、思慮分別のない者である。もしかれらが、あなたの出て来るのを待つならば、それはかれらのためにも良い。本当にアッラーは寛容にして慈悲深くあられる。**」とされています。この5つの章句を良心を持って読み、考える人は、アッラーが愛されるお方預言者ムハンマドをいかに尊重しているかよく理解できるでしょう。彼に対しウンマが礼儀正しく敬意を

持って振舞うよう、重きを置いて命じられていることがわかります。彼に対し声を上げる人の崇拝行為が無とされることを考える人は、この重要性のレベルを理解できるでしょう。「ベニー・タミーン」族の70人がマディーナに来て外から大声で、失礼な態度で預言者ムハンマドを呼びました。この章句は彼らへの罰として下されたものです。一部の人たちは自分たちがベニー・タミーン族の血筋であるとしています。このため聖ハディースでは「**野蛮で残虐な行為を取る人々が東にいる。**」「**シャイターンはここからそそのかす**」と言われ、神聖な手でナジドの方角を示したとされています。宗派を持たない人々の一派は、「**ナジディ派**」です。ナジド地方から広まったためにこの名称で呼ばれます。上記の聖ハディースで伝えられている災いは、1200年度に実際に起こりました。ナジドからヒジャーズに来て、ムスリムたちの財産を強奪し、男性を殺害しました。女性や子供も人質に取られました。カーフィルですらやらなかったような悪いこと、ひどいことを行っただけです。

価値のあること：上記の章句で、繰り返し「**信仰する者よ**」と呼ばけられています。これも、最後の審判までに生まれてくる全てのムスリムが、預言者ムハンマド（アッラーの祝福と平安がありますように）に対し徳を持って振舞うことを命じています。教友だけに命じられたものであるから、「**教友よ**」と呼ばけられていたのでしょうか。実際、「**アッラーの使徒の妻たちよ**」「**マディーナの民よ**」という呼びかけが用いられています。礼拝、断食、巡礼、ザカート、そしてその他の崇拝行為が最後の審判の時までの全てのムスリムに対する義務であることを伝えるため、「**信仰する者よ**」と呼ばけられています。このようにして、ワッハブ派の「アッラーの使徒（アッラーの祝福と平安がありますように）が生きている間は敬意を示すことが必要だ

った。死後には敬意を払うことはない。彼に助けを求めることもない」という言葉は、クルアーンの言葉によって崩されたのです。

上記の章句は、アッラー以外の存在にも敬意を払う必要があることを示すものです。雌牛章第 104 節では「**あなたがた信仰する者よ、ラーイナーと言ってはならない、ウンズルナーと言いなさい。そして（使徒の言葉に）耳を傾けなさい。不信者たちには厳しい懲罰が下ろう。**」とされています。信者はアッラーの使徒（アッラーの祝福と平安がありますように）に、「ラーイナー」すなわち「私たちを守ってください」と訴えていました。ラーイナーはヘブライ語ではののしりという意味であり、ユダヤ教徒たちはアッラーの使徒（アッラーの祝福と平安がありますように）にこの意味でラーイナーと言ったのでした。戦利品章第 33 節では、「**だがアッラーは、あなたがかれらの中にいる間、懲罰をかれらに下されなかった。またかれらが御赦しを請うている間は、処罰されなかった。**」とされています。最後の審判まで罰が与えられないことが約束されています。この章句はワッハーブ派の「彼があなた方の元を離れた。土となった。」という言葉を否定するものです。

雌牛章 34 節では、「**またわれが天使たちに、「あなたがた、アードムにサジダしなさい。」と言った時を思い起こせ。その時、皆サジダしたが、悪魔〔イブリース〕だけは承知せず、これを拒否したので、高慢で不信の徒となった。**」とされています。この章句は、アードム（アッラーの平安がありますように）に敬意を払うことを命じています。シャイターンは、アッラー以外に敬意を示すことを拒否し、預言者たちをののしり、この命令に従いませんでした。ワッハーブ派もシャイターンの道を行っているのです。預言者ユースフの母、父、兄弟たちは彼にサジュダを行い、敬意を

示しました。アッラー以外の存在に敬意を示すことが多神崇拝や教えへの憎悪だったなら、アッラーは、愛するしもべたちについて語られる際に彼らを褒められることはなかったでしょう。スンナ派によれば、アッラー以外の存在にサジュダすることはハラームです。崇拝行為のサジュダに似ているためにハラームとされています。敬意を示したからではないのです。

シャイターンは、アッラーの使徒（アッラーの祝福と平安がありますように）に対し、常にナジド人の老人という形で姿を現しました。カーフィルたちがマッカの「**ダール・ウン・ナドゥワ**」と呼ばれる場所で集まり、アッラーの使徒を殺害することを決定した時、シャイターンはナジド人の老人の姿で現れ、どのように殺害するかを教えました。彼らも、ナジド人の老人の言うことを実行しようと言ったのでした。その日以来、シャイターンは「**シャイヒ・ナジディー**」と呼ばれています。ムヒーッディニ・アラビー師は「**ムサーマラトゥ**」という本で次のように語っています。クライシュのカーフィルたちはカーバ神殿を修理する際、部族の長のそれぞれが黒い石「**ハジェルルエスワド**」を自分が定位置に置く、と言いました。翌日の朝、最初に来る人に決めてもらおう、彼が選んだ人が石を置くことにしよう、と決めました。最初にアッラーの使徒（アッラーの祝福と平安がありますように）が来られました。その時彼は 25 歳でした。彼は信頼でいる、彼の言葉に従おう、と彼らは言いました。「絨毯を持ってきて、そこに石を入れてください。そしてみな、端をつかみ、石を置く場所まで運んでください。」と彼は言いました。それから、その神聖な手で石を絨毯の中から取られ、壁の中の定められた位置に置かれました。その時、シャイターンはナジドの老人の姿で現れ、石を示し、これも支えのためにそばに置きなさい

と言いました。彼の意図は、その崩れかけた石を後々外し、黒い石がぐらつくようになること、そのために皆にアッラーの使徒（アッラーの祝福と平安がありますように）について運がないと言わせることでした。アッラーの使徒（アッラーの祝福と平安がありますように）はこれを理解し、「アウーズ・ビッラーヒ・ミナッシャイターンニラジーム」と言われました。シャイターンはその瞬間に消え、逃げたのでした。ムヒーッディニ・アラビー師（アッラーの慈悲がありますように）のこの文章で、シャイターンがナジドの老人の姿であることが世界に伝わったため、彼らはこの偉大な聖人の敵となりました。さらには、彼のことをカーフィルと呼びました。宗派に属さない人々の長、有力者がシャイターンであることはここからも理解できます。ワッハーブ派はアッラーの使徒の遺産として残った神聖な場所や墓廟をこのために破壊しています。これらの場所が人々を多神教徒にする、と言います。神聖な場所でアッラーにドゥアすることが多神崇拜であるなら、アッラーは巡礼に行くことを命じられることはなかったでしょう。アッラーの使徒（アッラーの祝福と平安がありますように）がカーバ神殿の周回を行う際、黒い石にキスをされることもなかったでしょう。アラファトやムズダリファでドゥアすることも、ミナで石を投げることも、サファーとマルワの間を走ることもなかったでしょう。これらの神聖な場所がこのように敬意を示されることもなかったでしょう。

アンサールたちが集まった場所で、その長であったサアド・ビン・ムアズ（アッラーのお喜びがありますように）が来た時、アッラーの使徒（アッラーの祝福と平安がありますように）は、「あなた方の長のため、立ち上がりなさい。」と命じられました。この命令は、サアドに敬意を払うためのものでした。「サアドは病気だった。彼を動物から下

ろすためだった」と見なすのは綾杏里です。なぜなら、そこにいた皆に命じられたからです。下ろすためであれば、そのうちの一人二人にだけ命じられていたでしょう。単に「サアドのために」と言われていたでしょう。「あなた方の長」という必要はなかったでしょう。

アブドゥラー・ビン・ウマル（アッラーのお喜びがありますように）は巡礼のためにマディーナからマッカに行く際、その途中にあった神聖な場所、アッラーの使徒がおられた場所で立ち止まり、礼拝し、ドゥアーしていました。そういった場所で恵みを得ていたのです。アッラーの使徒の説教壇に手を置き、顔を擦り付けていました。イマーム・アフマド・ビン・ハンバルは幸福の墓廟や説教壇にキスをして恵みを得ていました。彼らはハンバリー派であると言いつつも、彼らの法学派のイマームが行ったことを多神崇拝と呼ぶのです。「ハンバリー派です」と彼らが言っていることは偽りであることが理解されます。イマーム・アフマド・ビン・ハンバルはイマーム・シャーフィーのシャツを濡らし、その水を飲みました。それによって恵みを得ました。ハーリド・イブニ・ザイド・アブー・アイユーブ・アル・アンサル（アッラーのお喜びがありますように）は、アッラーの使徒の神聖な墓に顔を擦り付けていました。人が来て、彼をそこから起こそうとすると「離してください。私は石や土のために来たものではありません。アッラーの使徒の御前に来たのです。」と言いました。

教友たち（アッラーのお喜びがありますように）はアッラーの使徒のものによって恵みを得ました。ウドゥーを行う際に彼が使った水や神聖な汗から恵みを得ていました。シャツ、杖、剣、スリッパ、カップ、指輪、そして彼が使った全てのものから恵みを得ていました。信者たちの母ウンム・サラマ（アッラーのお喜びがありますように）の近

くに、神聖なひげの一本がありました。病人が来るとこの毛を水に入れ、後でその毛を取り出してその水を病人に飲ませていました。彼の神聖なカップに水を入れ、健康のために飲んでいました。イマーム・ブハーリーの墓からは麝香の香りがしていました。恵みを得るためにその土を取り、持って帰っていました。どの学者も宗教指導者もこれを妨げることはありませんでした。ハディース学者、フィクフ学者もそれに許可を出していました。「ウスूल・ウル・アルバー」からの翻訳はここまでです。

(教友やその次の世代の時代、さらにはその後 1000 年ほどは、聖人や誠実なしもべたちが たくさんいました。皆、彼らを訪問し、恵みを得て、彼らにドゥアーをしてもらっていました。墓を媒介にして懇願したり、生命のない物体から恵みを得たりする必要はありませんでした。その当時にこれらが少ししか行われなかったことは、それが許されていなかったことを意味するものではありません。許されないものだったとすれば、それを妨げようとする人がいたでしょう。どの学者も、それを妨げようとはしなかったのです。末世が近づくにつれて教えへの憎悪の印やビドゥアが増えました。イスラームの敵たちは科学者、宗教者の見せかけで若者を欺きました。彼らは「ズンドゥク」と呼ばれました。科学者のなりをして欺こうとする人々を「**科学の偏屈者**」、宗教者のなりをして欺こうとする人々を「**宗教的偏屈者**」と呼びました。無宗教、背信は我欲に従う凶暴な人々、独裁者たちにとっても有益なものであったため、この災いへと引きずり込まれて いったのです。学者たち、聖人たち（アッラーのお喜びがありますように）の数は減り、近年では全く見られなくなりました。聖人の墓地や彼らの遺品から恵みを得ることは不可欠となりました。あらゆる物事、あらゆる崇拜行為と同様、ここでもハラー

ムが混ざってきました。このように混ざってしまった合法的な事柄を妨げないこと、これらに混ざってしまったビドゥアを取り除くことが必要であることを、イスラーム学者が一致して知らせています。学者たちのこの言葉は、「アドゥ・ドゥラル・ウツ・サーニヤ・フィッラディ・アラル・ワッハービヤ」という本 読んでいます。読んだ人には何の疑念も残らないでしょう。この本は 1319 年及び 1347 年にエジプトで印刷され、1395 年（西暦 1975 年）にイスタンブールでオフセット印刷で出版されました。ワッハーブ派がヒジャーズのムスリムに対して行った残虐行為や拷問は、「最後の審判と来世」という本の最後で詳しく書かれています。ムスリムたちは墓の上に石を置き、そこに死者の名前を記します。訪問に来た人は、石に書かれた名前の持ち主の魂のためにファーティハ章とドゥアを唱えます。聖人たちの墓を訪問する人は、さらにその魂からとりなしとドゥアを求めます。）

預言者モスクの 4 回の拡張を示す画像

1. バーブッセルーム
2. バーブ・ジブリール
3. バーブンニーサー
4. バーブルラフマ
5. バーブッタワッスル
6. シャバカ・イ・サーダト
7. フジュラ・イ・サーダト
8. ムワージャハイ・シャリーファ
9. ミフラーブ・ナビー
10. ミフラーブ・オスマーニー
11. 砂で覆われた地面

Tevsî'i Velîd: ワーリドの拡張、
 Şimal: 北 Şark: 東 Garb: 西 125m: 125 メートル
 Mescid-i Nebi: 預言者モスク
 Tevsî'i Osmân: オスマーンの拡張、
 Tevsî'i Velîd bin Abdûlmelik: ワリド・ビン・アブドゥルマリクの拡張

用語集

しもべ(アブド): 言葉の根源を構成する「崇拜行為」と「ウブディーヤ（アッラーに従順であること）」の概念は、「しもべ」と「従順」の意味を持っています。奴隷と従順がアッラーに対して行われるならば、この **abd**（しもべ）は「自由な人」を意味し、人に対して行われるなら、それは「奴隷」を意味します。クルアーンでは、**abd** という言葉は、すべてのイスラーム教徒から「人々の中で最も徳のあるお方」と見なされている預言者ムハンマドだけでなく、他の預言者、ジン、さらには天使にも使用されています。(参照：婦人章第 172 節、夜の旅章第 1 節、撒き散らす者 56 節) **abd** と **ibad** は、クルアーンとハディースで全ての人々、さらには一部のそれ以外の存在(高壁章第 194 節参照)のために用いられるものである一方で、「信者」という意味を持つことが多いです。特に相対するものとしてアッラーと対比される **abd** と **ibad**（しもべ）という語は、「アッラーを崇拜し、アッラーも愛されているしもべ」という意味を持ちます。

来世: 来世は、イスラームの用語として、死後に行くことになる場所に与えられた名称です。伝統的にムスリムの六つの信仰の基本の一つです。イスラームによると、世界が終わること、新たに復活することは、クルアーンの章句やハディースのような文献において表現され、その他の預言

者たちも自分たちの民にこの状況を説いてきました。来世を信じることは、信仰の条件の一つです。クルアーンにおいて「最後の審判の日」は様々な名称で登場します。来世は、しもべたちがアッラーの御前にまみえるという信条から、「会見の日」(ガーフィル章第 15 節)と、人々とすべての被造物がその日集められることから「集合の日」(騙し合い省台 9 節)と、現世においてアッラーを信仰しなかった人、はかない現世に騙されたことを理解するであろうことから「騙し合いの日」(騙し合い章第 9 節)と、皆が墓から出てよみがえるために「永遠の日」と、そして現世に戻ることを望む人たちにとって「悔恨の日」という名で言及されます。

イスラームの規定：ある事柄を行うべきか、行わないべきかということを伝える規定です。人々が現世と来世で幸福であるためにアッラーが預言者たちを通して送られた命令や禁止事項の全てです。全ての人にとって何よりも必要なことは、信仰を正すことです。つまり、正しい信仰の持ち主となることです。信仰するべき事柄に関する規定を「信仰に関する規定」と呼びます。これらはイスラーム法の基礎を形成します。イスラーム法は「イスラームの規定」とも呼ばれます。

サハーバ (教友たち)：サハーバとは、辞書的な意味では預言者ムハンマドを目にし、その説話に加わったムスリムという意味になります。アラビア語の辞書では「親友、友達」という意味で用いられるサヒーブという語の複数形がアスハーブです。サハーバたちとは、預言者ムハンマドを信じ、その道で奉仕し、尽力し、イスラームのウンマの中で知識の源、模範となった、預言者ムハンマドの親友、友人という意味です。スンナ派の学者たちはサハーバたちを三つに分類しています。

1. ムハージル：マッカ征服以前に、マッカもしくはそれ以

外の祖国や近親者を離れ、マディーナに移住した人々です。

2. アンサール：預言者ムハンマドとムハージルにあらゆる種類の献身的な支援を行うことを約束した、マディーナの町やその近郊に住んでいたムスリムたち。
3. その他のサハーバ：マッカの町が征服された時、もしくはそれ以降にマッカもしくは別の場所で信仰を持った人々。

ビドゥア：アラビア語で「実行すること、模範なしで行うこと、築くこと」という意味になる「ビドゥア」という語根から生じている「ビドゥア」は、以前にそれに類似するものがなく、後になって生じたものという意味になります。広義では、預言者ムハンマドの死後に現れた全てのものです。ビドゥアの辞書的な意味からなされた定義によると、イスラーム的な特性を持つように見える行為や振舞いのほか、日々の生活に関連して、後になって生じた新しい思想、実践、習慣もビドゥアと見なされます。

許されるもの（ジャーイズ）：イスラームの教え、法律、習慣の観点から、行うこと、やることにおいて何の支障もない、行うこと、することが許され、適切、適当と見なされている範囲という意味です。宗教用語として、ジャーイズという語のもう一つの意味は、ムバフです。ムバフとは、行うこと、放棄することにおいて宗教的な観点から何の支障もない、つまり人が行うか行わないかは完全に自由である事柄です。座ること、食べること、飲むこと、眠ることなどです。ムバフであるこの種の行いは、行うことで報奨を得られることも、放棄することで罰を与えることもあります。

ジブラーイル：イスラームによると、預言者たちに掲示をもたらし、アッラーの命令と禁止事項を伝える任務を帯びた天使です。

ジブラーイールの名は、クルアーンで「信頼される魂」「聖なる魂」とも言及されていることが信じられています。ジブラーイールはさらに、偉大なる誉れとも呼ばれます。ジブラーイールはムハンマドに、マッカ近郊のヌール山において崇拜行為や熟考を行っている際に訪れ、最初の掲示を下しました。「読め、『創造なされる御方、あなたの主の御名において。一凝血から、人間を創られた。』読め、『あなたの主は、最高の尊貴であられ、筆によって（書くことを）教えられた御方。人間に未知なることを教えられた御方である。』」（凝血章第1-5節）

イスラームの教えでは、ジブラーイールがとても強い天使であることが信仰されています。ジブラーイールの務めは、啓示をもたらすことです。つまりアッラーの預言者たちに知らせと知識をもたらします。イスラームによると、全ての預言者たちに啓示をもたらすのはジブラーイールです。クルアーンには、ジブラーイールがアッラーの位階において重要な位置を占めていることが記されています。

聖戦(ジハード)：アラビア語で、力と努力を払うこと、ある物事を成功させるためにできる限りの可能性を用いること、という意味になるジャフドという語根から生じているジハードは、イスラームの用語としては「教えの命じるところを学び、それに従って生きること、他者に教えること、外敵に対して戦うこと」という形での広い意味と並び、イスラーム法学における用語としてしばしば、ムスリムではない人との闘いという意味で、神秘主義においては我欲の克服のための努力という意味で用いられます。聖戦はクルアーンで名詞として4回、そこから派生する形では24回登場します。「聖戦を行う者」という意味である「ムジャーヒド」という語は、二つの節で用いられています。

逸脱(ダラーラ)：逸脱は、辞書において「失われる、減じる、

惑う、誤る」といった意味になる一方で、その本来の意味は「知って、もしくは知らずに、正しい道から少しもしくは大きく離れること、暴走すること、迷うこと」というものです。この本来の意味から、逸脱は比喩的表現として、「知識、感覚、真実に反する規定を受け入れること」という意味でも用いられます。一般的に、「目的へと到達させる道を放棄すること、求めている結果には到達させない道に入ることもしくは、「求められる各種の結果に到達させるであろう道から離れること」という形で定義される逸脱は、「教えの道から離れること」という意味で用いられます。一般的に逸脱は、人々の良心に埋め込まれている信条や思想にそぐわない、あらゆる種類の信条や思想を示します。言い換えるなら逸脱は、絶対的な真実、正しい在り方が自分たちにのみ存在すると訴える、一定の宗教を除く信条や思想のために用いられる概念です。

ナドゥワの家：ナドゥワの家は、イスラームの預言者ムハンマドの4代前の父祖であるクサイ・ビン・キターブが、カーバの北にあるタワーフ(周回)の始点の後部に、クライシュ族の有力者が話し合いを行うために行った建物です。建設後、マッカの人々は町の運営に関してここで集まり、自由に意見を述べていました。各種の決定が下され、戦争や平和の決定がなされたこの会議には、クサイの家族の他、町に住むクライシュ族のうち、40歳以上の役員も出席できました。

ドゥアー：イスラームにおいてドゥアーは、「誰かが、自分もしくは他者のために願っていること、求めていることが実現するようアッラーに懇願すること」と定義されます。ドゥアーは一つのイバーダ(崇拝行為)です。ドゥアーの本質と重要性は、イスラームの聖なる啓典であるクルアーンやハディースにおいて示されています。「われに祈れ。

われはあなたがたに答えるであろう。だがわれに仕えるのに高慢な者たちは、必ず面目潰れの中に地獄に陥るであろう。」(ガーフィル章第 60 節)

「信者が宗教上の兄弟のために、その背後で行うドゥアーは認められる。天使が『アッラーがこのよいことをあなたに与えられますように、アーミーン』という」(ハディース、リヤーウス-サーリヒーン)

クルアーンとハディースの多くの箇所、ただ良い心で行ったドゥアー が受け入れられることが記されています。

多くの神学者や伝統的なイスラーム知識人によると、イスラームで重要な位置を占める礼拝も、一種のドゥアーです。

聖人(アウリヤー)：辞書において「ワリー 」という言葉は、友人、親友、従順で仕事を責任をもって行う人、という意味になります。「アウリヤー 」は、「ワリー 」の複数形です。イスラーム用語において「ワリー 」は、アッラーの正しい親友であり、愛されるしもべを意味します。ワリーはアッラーの法に従順であり、正義、真実を愛する

人です。「ワラーヤ」は、親愛、支援、そしてアッラーの命令を伝えることです。ワリー はクルアーンの正義、真実を理解し、預言者ムハンマドの導きの中で行動し、それによって崇高な位階に高められたアッラーの親友です。

ファルド(義務)：ファルドは、行うことが絶対に、かつ明白な根拠と共に命じられている宗教的行為及び務めです。ウドゥーを行うこと、礼拝をすること、断食をすること、喜捨を行うこと等です。

ファルドは二つに分けることができます。

ファルド・アイン：実行することが全てのムスリムそれぞれの義務であるファルドです。これらは、一人のムスリムが行ったことで他のムスリムはしなくてもよい、とはなりません。礼拝、断食などです。礼拝も断食も例外なく全て

のムスリムが行うべき、宗教上の義務です。

ファルド・キファーヤ：実行することがすべてのムスリムのそれぞれの義務ではなく、ムスリムの一部が行うことで他の人々にとっては義務ではなくなるファルドです。この種のファルドは、誰も行わなかった場合には、集団のすべてがその責任を負い、罪を問われます。ムスリムの葬儀の礼拝を行うことなどです。葬儀の礼拝が一部のムスリムによって行われた場合、他のムスリムはその責任を負わなくなります。ただし、誰もそれを行わない場合、全てのムスリムがその責任を負います。ファルド・キファーヤの褒章は、それを行った人のみに与えられます。完全に放棄された場合の罪は、すべてのムスリムのものになります。

ファースク：辞書では、「ナツメヤシなどの皮をむくこと、一定の限度を超えること」という意味になるフィスク、もしくはフスクという語根から生じたものである。ファースクは、様々な宗派の様々な学者によってなされた多様な定義が存在する一方で、用語としては「真実から逸脱し、アッラーの命令への服従から離れた反抗的な信者もしくは不信心者」と定義されます。ファースクという語はジャーヒリーヤの時代には用語として用いられていなかったことが知られています。クルアーンでは語根として7回、共役動詞として10回、ファースクという形で（二つは単数形、残りは複数形）37回登場します。一部の節ではユダヤ教徒、キリスト教徒、多神教徒、偽信者について言及されており、その多くがファースクであることが伝えられています。（例えば、雌牛章第99節、イムラーン家章第110節、食卓章第47節、悔悟章第67節）

フカハー：「フクフ」という語は辞書では「何かを知ること、よく、完全に理解すること、内面と詳細を把握すること」という意味になります、イスラーム法学の専門家をも、フ

アキフと呼び、その複数形はフカハーです。

罪：罪を示すギユナフという語はペルシア語であり、罪と見なされること、アッラーが禁じられた言葉や行為を意味します。アッラーが行うように命じられたことを行わないことが罪であるように、アッラーが行ってはいけないと命じられたことを行うことも罪です。アッラーは人々に、礼拝を行うことを命じられています。思春期に到達した、正常な知識を持つムスリムは、アッラーのこの命令に従う責任を負います。このような人が礼拝を行わない場合、大きな罪を犯したことになります。クルアーンは罪を、大きな罪、小さな罪として二つに分類しています。ただし、どれが大きな罪、どれが小さな罪であるかについてはあまり情報を与えていません。この事柄に関するクルアーンの章句の一つでは、次のように仰せられています。

「だがあなたがたが、禁じられた大罪を避けるならば、われはあなたがたの罪過を消滅させ、栄誉ある門に入らせるであろう」（婦人章第 31 節）

巡礼(ハッジ)：アラビア語で「行くこと、そちらに向かうこと、訪問すること」という意味になるハッジという言葉は、法学的用語として、それができるだけ力を持つムスリム皆が定められた時期にカーバ神殿、アラファト、ムズダリファ、ミナーを訪問すること、一定の宗教的務めを実践することという形で行うイバーダを意味します。このイバーダを実行した人をアラビア語でハージュ(複数形はフジャージュ)、トルコ語でハジュと呼びます。

黒い石 (ハージャル・アスワド)：ハージャル・アスワドという語はアラビア語で「黒い石」という意味になります。カーバにおいて、地上 1.5 メートルの高さに存在する、直径約 30 センチの卵型の石は黒に近い濃い赤色をしており、このように名付けられたとされています。

ハンバリー：イスラームの教えの生き方に関して、学者たちは異なる意見を出し合っています。これにより、四大法学派が生まれました。ハンバリー法学派は四大法学派の一つです。イマーム・ハンバリー(アフマド・ビン・ハンバル)が自らの手法で法学の論拠を基に見出した規定及び彼が示す道を、ハンバリー学派と呼びます。スンナ派の信条を持つムスリムのうち、行い、すなわち崇拜行為や所作をこの法学派の規定に従って行う人をハンバリー派と呼びます。ハンバリー派ではクルアーンとハディースという源に重きが置かれます。

ハナフィー：ハナフィー派は、イスラームの教えに存在する四つのスンナ派の法学派の一つです。ハナフィー派がスンニ派の中で認めている学派はマトゥリディ派として知られています。ハナフィー学派を信じる人々はハナフィー派と呼ばれます。ハナフィー派は、イスラームの中で最も広い信仰と信者を持つ法学派です。名称は学派の設立者の名から取られています。ハナフィー派はそもそも、現在のイスラームにおいて最も信者の多い法学派の一つです。

ハラーム：ハラームは、行うことが宗教上禁じられたもの、宗教上の規定にそぐわないものです。ハラールという言葉の対義語です。飲酒、賭博、貫通、他者の財産を不正に入手することなどです。ハラームである事柄を、ムハツラマートと呼びます。ハラームを避ける人は報奨を得、それを実行する人は罪を犯したことになります。イスラームは容易な宗教です。誰かがやむを得ない事情でハラームであるものを食べた、もしくは何かを行わざるを得なかった場合、それをハラールと見なさない条件で、やむを得ないニーズを満たすまではそれを活用することができます。

ハウズ・カビール：縦横が約 5 メートルであり、面積が 25

平方メートルである貯水槽です。深さ　、浅さ　は考慮されません。

生命：生きること、生命は生物学的観点からは、化学反応や変換をもたらすその他の事象のように、いくつかの生物学的プロセスを示す生物の特徴です。有機物質は発達し、再生する能力を持っています。いくつかの生き物は互いにかかわりを持つことができます。そして多くの生物は、内部の変化によって彼らの環境に適応することができます。生命を別の定義で説明するならば、生命体という特性を持つ存在が皆、生きている限り獲得する経験や生き方の全てなのです。

四大カリフ：四大カリフは、預言者ムハンマドの亡き後、イスラーム国家を順に統治していた四人の偉大なカリフである、アブー・バクル、ウマル、オスマーン、そしてアリーです。イスラームの基本によるなら、イスラーム国家の統治を預言者ムハンマド以降に引き継ぐイスラーム国家の長は「カリフ」と呼ばれます。カリフという言葉の複数形はフラーファです。カリフは、預言者ムハンマドの代わりに、国家の長としての特性を受け継ぎ、任務に就く人であり、預言者ムハンマドがイスラーム社会を統治したのと同じ形で、イスラームの基本事項を基に、公正さという基準を尊重し、統治者という任務を実行する必要があります。

聖マリヤム：偉大な預言者たちの一人である預言者イーサーの母です。イスラエル族の有力者であり、学者であり、ダーウードの子孫であるイムラーンの娘です。アッラーは信者たちに、純潔を守るイムラーンの娘マリヤムをも模範として示されています。(禁止章第12節)マリヤムとは「信心深い女性」という意味になります。男性を避け、高潔であるという意味で「ベトゥール」という名でも呼ばれます。イスラームにおいて崇高な特性によって高められ、純潔さ

と従順のシンボルとして示されるマリヤムは、キリスト教においても「神の母」として定義されています。キリスト教徒の崇拜生活において重要な位置を占めています。彼女も、イーサー同様罪から遠い存在であることが信じられています。

イバーダ：辞書では「服従、謙虚さ、従順、しもべとなること、崇拜すること、崇拜されること」といった意味になるイバーダは、宗教上の用語としては人がアッラーに敬意、愛情、従順さを示すこと、そのご満悦を得るという意味を示す一定の態度や行動を意味します。より一般的な意味では、同じ特性を持つ思考、感情、言葉をも示します。ただしこの単語は、宗教的な内容を含む一定の、整えられた行動様式のために用いられることがより一般的です。イスラーム文献においては一般的に、この種の行動様式についてはイバーダという語が、人がその生を常にアッラーへの敬意や従順の意識の中で送るという形で、しもべとしての在り方に注意を払う状態についてはウブーダート及びウブーディーヤという語が用いられます。

イジュマー：辞書的には、「まとめること、点検してまとめること、一つの仕事をきちんと行うこと、努力すること、ある内容で意見を一致させること」といった意味になるイジュマーは、クルアーンでも用いられている一方で、この語から派生している言葉も、辞書的な形のまゝ、四か所で使用されています。（ユースス章第 71 節、ユースフ章第 15 節、102 節、ター・ハー章第 64 節）ハディースにおいてはこの単語はより「意図する」という意味で用いられます。イジュマーがイスラーム文献の中で得ている用語的な意味は、辞書的な意味と無関係ではなく、フクフにおけるイジュマーは、概論として「預言者ムハンマドのウンマが、彼の死後の何らかの時代に、宗教的な問題の判断について意

見を一致させること」という意味で定義されます。

ウンマのイジュマー：ある時代において、イスラームのムジュタヒドたちがある問題に対してイジュティハードを通して下した判断で意見を一致させることを「ウンマのイジュマー」と呼びます。イジュマーが出されている問題は、最も強固な問題であることは確実です。

イルム：辞書的には「知る」という意味になるイルムは、一般的には「知識」「知」という意味で用いられます。古典的な辞書では「何かを真の意味で把握すること、真実で包まれた絶対的な信仰(イティカード)」「何らかの対象の形を思考において形作り、その対象をありのままの形で知ること、対象における秘密が解き明かされること、普遍のおよび詳細についての理解を支える特性」といった様々な形で定義されます。「無知の対義語」とも定義されます。

イマーム・マーリク：マーリキー派の指導者であり、偉大なムジュタヒドであり、ハディース学者です。名前は、マーリク・ビン・アナスです。90年(西暦709年)にマディーナで生まれました。179年(西暦795年)にマディーナで亡くなりました。祖父アブー・アムルはサハーバの一人です。

イラーダ：辞書においては「選ぶこと、求めること、方向づくこと、選択すること、決定すること」といった意味になるイラーダは、宗教用語としてはアッラーの、及び人間が、選択肢のうちの一つを選ぶことです。

キリスト教：キリスト教は、アッラーによって預言者イーサーに下された教えです。預言者イーサーが教えを伝えたこの教えをキリスト教と呼び、それを認め従う人をキリスト教徒と呼びます。周知のとおり、預言者イーサーはエルサレム近郊のナザレの町で育ちました。この観点から、預言者イーサーが伝えた教えをナザレン教と、それに従う人をナザレン教徒とも呼びます。預言者イーサーはユダヤ

教を改良するために遣わされました。つまり真のキリスト教は、改良されたユダヤ教です。キリスト教は後に変更が加えられ、現在の形になりました。現在キリスト教は、本来の形が失われてしまった、天からの教えの一つです。

イティカード：信仰する、宗教の名において伝えている事柄について 預言者を正しいと述べる、ということを意味する用語です。信仰の基盤の一つに、ムスリムのイティカードが含まれます。この用語は最も広い意味でアッラー、しもべ、そして世界に関する出来事への見方に影響する全ての考えを指します。イティカードという語と共に、イティカードがある、イティカードがない、イティカード性といった語も派生し、用いられます。イティカードやそれに関連する言葉の意味は、一般的に信仰や信条の範疇でまとめられます。

カーフィル：イスラーム用語では、教えを憎悪し、教えから離れたと考えられる人、もしくは全くムスリムではない人を指します。カーフィルという語は、隠すという意味になる「カファラ」から来ています。ムスリムではない人々について、「イスラームの信仰がもたらす真実を隠している、もしくは否定している」と考えられ、この名がつけられています。イスラームの教えにおいてカーフィルは、教えの否定を行った人であり、教えの否定とは、一般的にスンニ派では、イスラームの六つの条件を認めず、信じないこと、もしくはそれを軽視すること、蔑視することといった行動を意味します。

カラーム：イスラームの教えの信条にかかわる項目を調べ、そして歴史的にこの範疇で発展した宗教哲学的理論、セオリーに関する学術分野を、イルミ・カラームと呼びます。この意味でのカラームは、信仰に関する項目や質問に改善や証明をもたらす目的で発展した神学的哲学の名称です。

カラム：辞書では「善良、徳のある、気前の良い」という意味になるカラムは、「良いこと、気前の良さ」という形での名詞としても用いられます。用語としては「誠実で篤信を持ち、聖人であるアッラーのしもべから生じる優れた状態」と定義されます。

ケラーメット：ムジーザ（奇跡）のように、自然界の法則では説明できない 特異的な事象であり、その本質として奇跡と変わりはありません。奇跡との違いは、それが起こる形に関わりがあります。奇跡とは預言者たちが起こすものであり、ケラーメットは彼に完全に従う聖人たちが起こすものです。

力(クドゥラ)：辞書では「力、能力、ある事柄を計算され計画された形で行うこと、計画すること、その価値を知ること、ある事柄の本質、詳細、その形を定めること、糧を制限すること」という意味である力(クドゥラ)という語は、アッラーに属する場合には、「望まれたことを過不足なくその英知の範疇で行われる」という意味になります。力(クドゥラ)の概念はクルアーンの 103 の章でアッラーに対して用いられています。そのうちの 70 以上は名詞であり、残りが動詞という形です。そして一般的に「力が十分であること、計算し、計画性を持って創造され、整えられる」といった意味になります。

クフル：辞書では「覆うこと、隠すこと、恩知らずに振舞うこと」といった意味になるクフルは、用語としては「アッラーから受け取り、教えの名において伝道をしている内容について預言者を評価しないこと、信じないこと」と定義されます。クフルを受け入れた人は、「天性の才能を鈍らせ、覆う」という意味でカーフィルと呼ばれます。「知らないこと、奇妙であると見なすこと」という意味のヌクルという語根から派生した、そして「認めないこと、拒否する

こと、蔑視すること」といった意味になるインカール(否定)も、クフルに対応する語として用いられ、この状態を示す人をムンキルと呼びます。

マーリキー：聖遷の後の 2 世紀（7 世紀から 8 世紀）において、マディーナを中心にして生じたヒジャーズ住民の学派は、この学派の発展の最大の貢献者であるマーリク・ビン・アナスにちなんでマーリキー派と名付けられ、この学派に属する法学者や、その見解に従って行動する人々はマーリキーと呼ばれました。マーリク・ビン・アナス（179 年 / 西暦 795 年死去）は、マディーナでサハーバ時代から発展しているヒジャーズ学派の中で育ち、その非常に長い教育活動を通して、この学派の蓄積してきたものを発展させ、次の世代に引き継いだムジュタヒドです。

預言者モスク：イスラームの歴史の転換点となった、預言者ムハンマドのマッカからマディーナへの聖遷の後で実現された二つの活動のうちの 하나가、預言者モスクの建設です。預言者ムハンマドご自身によって建築の指示がなされた二つのモスクのうちの一つである(もう一つはカアバ)預言者モスクは、彼のマディーナにおける全ての活動において中心的な地位を占め、その機能の観点から、後の時代に建てられるモスクの模範をなりました。預言者モスクの名はクルアーンでは直接登場しないものの、「最初の日から敬虔に礎えを定めて建立されたマスジド」(悔悟章第 108 節)という表現は、預言者モスクもしくはカアバ モスクを指すものであることが伝承されています。

宗派(マズハブ)：辞書では「行く」という意味になるザハブという語根から、動名詞かつ「行くべき場所、道」という意味で場所を示す名称でもあるマズハブという語は、用語としては「教えの本質的かつ個別の規範の根拠となる証拠を見つけ、そこから規律を見出し、解釈するという点で、

権威と見なされる学者が示した見解の全てもしくは彼らが定めたシステム」と定義できます。この定義に含まれる本質的規範とは信仰の基本であり、個別の規範とはイバーダや人間関係を示します。言い換えるならマズハブは、一つの教えの様々な見解の相違から生じる分派のそれぞれに与えられる名です。

ムアーマラート：「法的な結果に対する意志の宣言」という意味の言葉の複数形であるこの語は、法学の発展に並行する形で、また観点により様々な意味を持ちました。広義では、法学のうちイバーダを除く部分、つまり 法の全てを示すこの言葉は、狭義では 、財産法から民法、私法、国内法に至るまで、さまざまな意味で使用されてきました。クルアーンやハディースでは、アマルという語根から派生した言葉が頻繁に登場する一方で、ムアーマラート、ムアーマラートトという言葉はクルアーンでは用いられていません。

ムジーザ(奇跡)：ムジーザは用語として、崇高なるアッラーが、使徒であると訴えている預言者の正しさを認め、支えるために創造された、人々にはまねのできない超常現象と定義されます。自然の法則の有効性や影響を短時間、一時的に停止させるこの奇跡の本質を知るとは、我々にはできません。言い換えるなら奇跡は、預言者である人が、人々の理解を超越した出来事を、アッラーのお力によって示すことです。クルアーンでは奇跡という語の代わりに、しるし、証しという概念が用いられています。預言者たちにはそれぞれ、一つの奇跡が与えられています。このことについて預言者ムハンマドは次のように語られました。

「人々が彼を信じるだけの奇跡が与えられていない預言者は存在しない。」

ユダヤ教：ユダヤ教は、アッラーがイスラエルの民に、預

言者ムーサーを通して伝えられた宗教的規範の全体を指します。有力な唯一神信仰のうち、最も古いものがユダヤ教です。この教えを信仰する人をユダヤ教徒と呼びます。現存する、神から下された教えのうち、信者が最も少ないものです。現在では世界中で1500万人から2400万人ほどのユダヤ教徒がいます。ユダヤ教は宗教の歴史の中で特別な位置を占め、この教えは最古の、神から下された教えと定義されます。その過去は何千年もさかのぼることができ、その主な特徴の一つは、イスラエルの人々と神の間の「誓約」に、その聖典で多くの場所が割かれていることです。このためこの教えは、「誓約の教え」としても知られます。イスラエルの人々の身に起こった全ての困難は、彼らがこの誓約に従わないこと、約束を守らないことから生じていることが、彼らの聖典でもクルアーンでも示されています。

ムジュタヒド：クルアーンやハディースで明白に示されている宗教知識を集め、本に記し、明白には示されていない、秘められた形で示された知識を理解し、解説することのできる深い知識を持つ学者たちをムジャーヒドと呼びます。無知な人々や宗教上の敵によってムスリムたちに投入された迷信やビドゥア、誤った信仰から影響されることもなく、教えを本来の状態に保つのはムジュタヒドです。ハディースでは、「100年ごとに一人のムジュタヒドが現れる。ウンマの行いを新たにするとされています。例えば、皇帝の一人ウマル・ビン・アブドゥルアジズ、宗教学者のイマーム・シャーフィー、神秘主義のマルフィー・ケルヒ、イマーム・ガザーリーが、靈感を与える点で、驚異と奇跡を示す点ではアブドゥルカディル・ゲイラーニー、ハディース学ではイマーム・スユーティ、宗派、真実と信条の詳細な知識を説明し、心に届けるという点ではイマーム・ラッバーニがムジュタヒドでした。皆、イスラームが広まり、力を

得るための奉仕を行ったのです。

ムルヒド：棄教という結果をもたらすような信条や見解を支持するという意味になる、哲学及びカラムにおける用語です。教えを持たず、教えに対抗し、逸脱し、信仰を持たない人を指します。アル・ハー・ダーという動詞から作られる 動名詞です。アル・ハー・ダーは辞書では、棄教、教えへの反抗、争い、議論、迫害の傾向、アッラーについて疑念を抱くこと、目的に到達できないことといった様々な意味を持ちます。複数形は「ムルヒドゥーン」もしくは「マラヒダ」という形になります。ムルヒドは教えと衝突する人、逸脱する人、教えを否定する人という意味です。複数形である「マラヒダ」は、「アッダフリユン」もしくは「アッダフリーヤ」と名付けられる不信心者の集団です。

偽信者（ムナーフク）：辞書では、「(ハタネズミの)巣に入る」「人が、実際とは異なるように見せかける」という意味になるニファークという動名詞から派生した形容詞であるムナーフクの語は、「信じてはいないのに、自らを信者と見せかける人」を意味します。この語は、「ハタネズミが危険を感じた時に逃げることができるよう、巣のために用意する複数の出口のうち、一つから入って別の一つから出ること」といった形での語根の意味から転じて、偽信者は「教えの一つのドアから入って別のドアから出る二重人格である人」とも定義されています。

ムナーカハト：イスラーム法学(フィクフ)の 4 つの大きな分野のうちの一つです。結婚、離婚、サダカといった事柄です。イスラーム法学は、イバーダート(イバーダについて)、ムナーカハト、ムアーマラート(取引、賃貸、利子、遺産等)、そしてウクーバート(罰則)の 4 つに区分されます。法学のイバーダに関する部分を簡単に学ぶことは、全てのムスリムの義務です。ムナーカハトやムアーマラートの部分を学

ぶことは、ファルド・キファーヤです。つまり、指導者が学ぶことが義務となります。タフシール、ハディース、そしてカラムといった学問に次いで最も誉れ高いものが法学です。新しくムスリムになった人、あるいは知性を伴っているムスリムの子供は、まず信仰告白の言葉を唱え、その意味を学び、信じる必要があります。それから、スンニ派の学者たちの本で書かれているイティカード、すなわち信仰すべき知識を学び、それらを信じる必要があります。それから、4つの正しい法学派のどれかの書物で書かれている法学の知識、すなわちイスラームの5つの条件、ハラール、ハラームであるものを学び、それらを信じること、それらに適する形で生きることが必要です。ムナーカハトの知識は必要になった時、身に起こった時に学びます。

ムルシディ・カーミル：ムルシディ・カーミルは、あらゆる行為においてイスラームに従い、あらゆる瞬間にアッラーを思う人のことです。天使たちは一瞬のうちにあらゆる場所に行くことができます。アッラーはこの力を、ムルシディ・カーミルの魂にも与えられました。ムルシディ・カーミルに二人の弟子がいて、一人が東に、一人が西にいて、二人が同時に死にかけているような場合、彼は同時に二人のもとにかけつけ、彼らが信仰を持って死んでいくことができるようにします。イマーム・アーザム師もまた、イマーム・ラッバーニやマールフ・ケルヒー、ハサン・バスリー師のように、ムルシディ・カーミルでした。しかし任務の分配を行っていました。イマーム・アーザム、イマーム・シャーフィー、イマーム・マーリク、そしてイマーム・アフマドのような学者たちはイスラーム法学の分野で、その他の聖人たちは神秘主義の分野で活躍していました。結果として、皆、ムスリムの宗教上、そしてこの世界でのトラブルを解決するべく努めたのです。

ムルタド：イスラームの教えを離れること、棄教であり、一般的にムスリムがイスラームを自らの意志で放棄することとして定義されます。ムスリムの過程で生まれた、もしくはイスラームを受け入れていた人が宗教を変えること、もしくは信仰を放棄して無宗教となることは、イスラームを離れることの範疇に含まれます。戻ること、取り返すことを求めること、元の状態に戻ることを意味する「イルティダード」の動名詞系になります。定義としては、ムスリムとなってから、イスラームから離れ他の教えを持つ、もしくは無宗教を選択する人について用いられる信条に関する用語です。ムスリムに対し、カーフィルという語は用いられません。なぜなら預言者ムハンマドは、「人がその兄弟に、『おい、カーフィルよ』と呼びかけるなら、この言葉は二人のうちの一人に対し必ず現実となる」そして「アッラーの外に神がなく、ムハンマドがその使徒であることを信じる人には、アッラーの災は禁じられている」と言われたからです。

多神教徒(ムシュリーク)：多神教である人を意味します。言葉の語根は、「同列に(シルク)配した」という過去形から生じています。この言葉は使役形であり、「ムシュリーク」という語も、アシュラカという語の動名詞形です。イスラームの信条でシルクは、アッラーを信じる一方で、力や強さがアッラーと同等である他の神がいることを認めること、という意味です。

明らかに、何の支障も感じることなく、アッラーに何者かを配する人、複数の神の存在を認める人は、「外見上のムシュリーク」と呼ばれます。拝火教のように、イスラームの教えの基本を否定し、「アッラーの外に神はなし」という信条を認めない、それらを明らかに表明している人は、「真のムシュリーク」と呼ばれます。ユダヤ教徒やキリスト教

徒は「真のムシュリーク」に含まれます。周知のとおり、「アッラーの外に神はなし」という信条は、アッラーのほかに神が存在しないこと、並ぶもの、等しいもの、類似するものが存在しない、という基盤を基にしたものです。ユダヤ教徒やキリスト教徒はこの基盤を認めず、アッラーと何者かを同等だと見なしているのです。

ムタカッリミーン：預言者ムハンマドとサハーバたちの後、争いやビドゥア(逸脱)が増えました。信仰の知識多法学の知識を教える任務は、イマームたち、つまりムジュタヒドたちに与えられました。このムジュタヒドたち(高位の宗教学者)のうち、信仰について教える人をムタカッリミーン、法学について教える人をフカハーと呼びました。ムタカッリミーンは信仰の基本の確定のために必要な、伝承によるもしくは論理的な根拠を示します。そして疑いを取り除こうとします。イマーム・アーザム・アブー・ハニーファ、アブル・ハサン・アル・アシャリー、アブー・マンスール・マトゥリディ、イマーム・ガザーリー、ファフレッディン・ラーズビーのような学者たちはムタカッリミーンであり、スンナ派やその集団の信仰を、逸脱した、もしくはビドゥアを採用する人々や自らをイスラーム哲学者と呼ぶ人々から守ったのです。

礼拝：礼拝は、定められた時間に、個人的な動きや読誦によって実行されるイバーダです。礼拝は、イスラームにおいて信仰の次に最も重要な命令です。礼拝は、しもべとアッラーの間の崇高なかかわりであり、高尚な結びつきであり、真摯な奉仕です。礼拝はアッラーの力を認識し、その偉大さに畏怖を感じる人が、この敬意と驚嘆を最もふさわしい言葉と動きで表現することです。あるいは同じ動きを繰り返すことでこの敬意や驚嘆の思いを強めることです。礼拝は、しもべが日に5回創造主とまみえること、その御前

にいることを意味します。この崇高な場で、間に何の媒介を入れることなく、あらゆる種類の願いごとや必要としていることを直接アッラーに訴えます。アッラーに庇護を求めます。ただアッラーに助けを求めます。これにより、預言者ムハンマドのミラージュで実現していたアッラーとの面談が、礼拝の中で象徴として行われるようになります。この神秘を指して預言者ムハンマドは「礼拝は信者のミラージュである」と言われています。

断食(サウム)：サウムという語は、辞書では「何かから遠ざかっていること、何かに対して自分を抑えること」という意味です。サウム、シャーム、そしてその派生語はクルアーンでは 13 か所で、ハディースでも多くの箇所が登場しています。宗教用語としての断食は、空が白み始めた瞬間から日没まで、イスラーム法で定められたイバーダを実行するという意思により、飲食や性的交渉から遠ざかることを意味します。サラフシーは「一定の人が、一定の時間に、一定の行為を、一定の目的のために避けること」と定義しています。その時間内に人が自らを断食における禁止事項から遠ざけることをイムサークと呼びます、この言葉は、「断食を始めること、断食の開始時間」という意味でも用いられます。時間が来て、形式に従って断食を開けること、断食を終えることをイフタルと呼びます。

教皇：教皇はローマ大司教であり、したがってローマカトリック教会の世界的指導者です。カトリック教徒によると、彼は使徒ペテロの後継者です。当初すべての司教に与えられた教皇の称号は、後にローマの司教にのみ使用されるようになりました。カトリック教会は、ペテロと彼の後継者によって代表される教会の最高権威である教皇庁が、神聖な機関であると主張しています。イーサーはペテロに教皇の職を与えました、そしてペテロはイーサーの昇天後、実

際にその任務を行いました。教会に根付いている伝統によると、ペテロは教えの犠牲者としてローマで亡くなりました。そのため、彼の最も自然な後継者はローマの司教です。
司祭：司祭はキリスト教の聖職者です。正教会では、司祭は儀式を行う人であり、聖油揉みの儀式、婚約式、儀式を行う教会の従事者です。それは執事に次ぐ地位になります。司祭は執事のように結婚することができますが、司教はできません。

総主教：ローマカトリック教会では、6～7 年間の教育の後、司教によって司祭がこの階級に高められます。教皇になるための儀式、彼は説話を行い、聖餐を管理する権限を得ます。最も重要な任務の 1 つは、儀式中にエウカリスト（聖餐）を実行することです。

精霊：精霊という語は、クルアーンで 3 回イーサーに関して（雌牛章第 87 節、食卓章第 110 節）、1 回はクルアーンに関して 4 つの節で用いられ、4 つ目はイブラーヒームを指しています。イーサーについての節では、彼が精霊によって支援されたこと、蜜蜂章で（第 102 節）神の啓示が精霊を媒介として下されたことが伝えられています。クルアーンで霊という概念は、アル・ルーフという形で単数形で用いられるように、様々な形でアッラーに関して、もしくは精霊、信頼できる霊、といった表現でジブラーイール、神の啓示、神の啓示である聖書、クルアーン、そしてイーサーについて用いられています。

永遠の幸福：大きな 永遠の幸福。来世における幸福。

祝福祈願(サラワート)：サラワートはイスラームの預言者ムハンマドとその血統である人々への敬意を伝えるためにムスリムによって唱えられるドゥアーです。最も良く知られている形は、「アッラーフンマ サッリ アラー セイディナ ムハンマディン ワ アラー アリー セイディナ

ムハンマド」と、「サッラッラーフ アライヒ ワ サッリム」という形のものです。クルアーンでは部族連合章第56節でアッラーと天使たちが預言者ムハンマドにサラワートを行っていることを伝え、信仰する人々も彼に祝福祈願と挨拶を送ることを求められました。ムスリムは礼拝中、そして礼拝後のドゥアーで、誕生を祝う祈りで、そして預言者ムハンマドの名を唱えた時、もしくは書いた時に、彼に対しサラワートを行います。

正しいしもべ：クルアーンとスンナの基準に従って行われる全てのイバーダと行いは、正しい行為となります。この基準を守る人が、正しいしもべとなります。その行いがアッラーのご満悦のために行われたのであれば、アッラーの位階において価値を持ち、それは正しい行為となります。私たちの意志がこれを決定します。意志の場は、心です。正しい心を持つ人の行いと、損なわれた心を持つ人の行いは同じではありません。だからまず心を改良すること、つまり正しい状態となることを確かにすべきなのです。人々の心の医師であられる預言者ムハンマドは、心が誠実で信心深くあることの結果について次のように指摘されています。

「注意なさい！体には、ある組織があり、そこが誠実（正しく、整った状態）であれば全身が誠実となる。そこが損なわれていれば全身が損なわれる。注意なさい、それは心である。」

正しいしもべに関するクルアーンの節には以下のようなものがあります。

「本当にアッラーはわたしの愛護者であり、啓典を啓示された方である。かれは正義の徒を愛護なされる。」(高壁章第196節)この節では、正しいしもべのアッラーへの近しさが示されています。この神秘について預言者たちは、「正しい

しもべの中に入れてください」(ユースフ章第 101 節、詩人
たち章第 83 節、蟻章 19 節) アッラーと預言者ムハンマドに
従順である人とは、自らに恵みが与えられている預言者た
ち、誠実な人々、殉教者たちと共にあることについて言及
する章句では、4 つ目として正しいしもべが挙げられていま
す。「アッラーと使徒に従う者は、アッラーが恩恵を施され
た預言者たち、誠実な者たち、殉教者たちと正義の人々の
仲間となる。これらは何と立派な仲間であることよ。」(婦人
章第 69 節)

サミーウ：辞書では「聞く、聞き取る、要求に答える、理
解する、知らせる」という意味になるサミーという語根か
ら派生したサミーウは「聞く者」という意味になります。
アッラーについて用いられた場合には、「聞かれるべき全て
のものを聞くお方」と説明されます。アッラーが聞かれる
ということは、耳のような器官もしくは装置に結びついた
ものではありません。サミーウの概念は 8 つの章句でアッラ
ーの本質として示され、それらの 2 つでは「聞かせる」とい
う名として、1 つの章句では「何とかれはよく御存知であ
られ、またよく御聞きになることよ(洞窟章第 26 節)」とい
う意味の動詞として用いられています。5 つの章句では「創
造する、行う」という補助的な動詞と共に、アッラーが人
に聴覚と聞くための器官を恵まれたこと、また 5 か所では人
の聞く力をアッラーが統治されること、望む場合にはこの
力を取り消されることが示されています。サミーウの名は
46 の章句でアッラーを指すものとして用いられ、そのうち
32 はアーリム、11 はバーシル、1 つはカリーブという名に
先立つものとして言及され、2 つの章句では「サミーウッド
ゥアー」(ドゥアーを聞かれるお方、受け入れられるお方)
という形で用いられています。

サワーブ(善行)：辞書では、「戻ること、元の状態に戻るこ

と」という意味になるサワブ(サワーバン)という語根から派生しているサワーブは、用語としては善い行いや従順の、来世における報奨を意味します。クルアーンでは善行という言葉と同じ語根から生じる動詞は18か所で、「人が行った良いこと、悪いことの来世における報奨もしくは罰」、1か所では「現世における報奨もしくは罰」という意味で用いられています。善行という概念はハディースでも、辞書的かつ専門用語的な意味で用いられています。ハッジに行くこと、クルアーンを読むこと、アッラーのご満悦のために対価なく財産を費やすこと、親戚づきあいを行うこと、善行を好むこと、必要ならば大切なもののために殉死することも覚悟していることといった行為が、永遠の幸福をもたらし得ることが示されています。

正しい道(スラート・ムスタキム)：辞書で「主要な道、正しく明らかな道」という意味になる「スラート」と、「均衡がとれた、まっすぐな」という意味になる「ムスタキム」という語で構成される「スラート・ムスタキム」は、「明らかなで、まっすぐで、正しい道」という意味になります。ここで道という語が「まっすぐな」と形容されていることは、それが「目的地に到達するための最短の道」であることを示しています。ハディースの文献では、預言者ムハンマドがタハーजूドの礼拝を始める際に行ったドゥアで、アッラーに「あなたは望まれる者を正しい道に導かれます」という形で懇願されていたことが伝えられています。

スンナ：辞書では「通った道、方法、模範とされる実践、習慣や伝統」という意味になるスンナは、用語としては法学、法学のメソッド、ハディースやカラームの学問分野において違いがあるものの、それらの全ては預言者ムハンマドと関わるもの、もしくはその道をたどるという点においては一致しています。法学のメソッドの用語においては、

スンナはシャーリアの規定における正当性の証拠の二つ目を示し、「預言者ムハンマドの言葉、行為、承認」という形で定義されます。カラムの学問分野ではスンナは「預言者ムハンマドとその仲間がその信条と行いにおいて歩んでいた道」という意味になります。

スンニ(スンニ派)：スンナ派は、「預言者ムハンマドとその仲間の信者集団が、教えの基本的な項目において取っていた手段を受け入れる者」という形で定義できます。

この定義に出てくる「教えの基本的な項目」は、イスラームに属することが確実に知られ、「教えのあり方」としても名付けられる項目が意図されています。ここでのスンナが意図するのは、教えを伝えることを任務としておられた預言者ムハンマドが、イスラームの基本的な項目を理解し、受け入れておられたそのやり方です。

とりなし：辞書では「唯一であるものを、同等または類似のものによって二つにすること、ある者の前でその仕事を行おうとすること、仕事のために誰かを媒介とすること」という意味になるシャフという語根から生じているとりなし(シャファート)は、「罪が許されること、もしくは望みが実行されるために誰かのために媒介となること」という意味になります。用語として「最後の審判の日、預言者たちや許可が与えられている正しいしもべたちが、信者が許されるために、アッラーの位階において懇願すること」という意味になります。シャーフィー、及びシェフィーは、「媒介となる、とりなしを行う者」という意味です。

シャーフィー派：シャーフィー学派もしくはシャーフィー派は、イスラームの学派のうちの一つです。イマーム・シャーフィー(ヒジュラ歴 150 年、西暦 767 年、ガザーヒジュラ歴 204 年、西暦 820 年、カイロ)が自らのやり方でシャーリアの根拠から読み取った規定と、彼が示した道をシャー

フィー学派と言います。スンナ派の信条を持つムスリムのうち、宗教的实践、すなわちイバーダや行いをこの法学派の規定に従って行う人を、シャーフイーと呼びます。シャーフイー派とも呼ばれます。シャーフイー学派は四大法学派の一つです。

シャイターン：辞書では「遠ざかる、真実や善から離れる、反対する」という者である「シャトゥン」もしくは「怒りに燃える」という意味になるシャイトという語根から派生しているとされるシャイターンの語(複数形はシャヤーティーン)は、「善や慈悲から遠ざかった被造物」「燃えて滅びることを運命づけられた被造物」という意味です。一部の言語学者は、シャイターンの語がアラビア語起源であり、その神学的意味はユダヤ教とキリスト教の伝統から取っていると主張し、また一部はヘブライ語からアラビア語に入ったこと、この言葉がユダヤ教の伝統において「ジン」、イスラーム以前のアラブ人において「超人的な存在」という意味であったこと、そしてイスラームでその二つの意味が合体したことを語っています。

シーア派：辞書では、「従うこと、支えること、良くなること、増えること」という意味になるシャーという語根から派生しているシーアという語は、「味方、援助者、支援者、ある仕事を実現させるために一人の周りに集まる集団」という意味になります。用語としては、預言者ムハンマドの死後、国家の長という職務がアリーとその家族のうち一定の者に引き継がれるべきであると主張した集団を意味します。クルアーンではシャーという語根を持つ動詞が1か所、そして単数形(シーア)及び複数形(シャー、エシュヤ)という名詞が12か所、辞書的な意味で用いられています。

タービウン：辞書で「ある人の道を行くこと、そのあとをたどること」という意味になるタバーという語根から派

生しているタービー(ある人に従う、彼のあとをたどる)の複数形がタービウーンです。タービウーンはサハーバを目にし、彼らと何らかの形で交流があったムスリムに対するイスラーム用語です。この概念をもとに、タービウーンを目にし、彼らと交流があったムスリムをタバウト・タビーンと呼びます。

ターリカ：辞書では「行くべき道、従うべき手順、状態、進み方」という意味であるターリカ(複数形はタラーイク)は、用語としては「アッラーに到達することを望む者のための特有の状態、振舞い」を意味します。この単語はクルアーンでも特にター・ハー章の二つ(第 63 節、104 節)及びいくつかのハディースで辞書的な意味で用いられています。辞書ではまた「道」という意味になり、アッラーが義務とされ、許可を要しない規定や儀式を示すタリーク(複数形はトゥルク)も、神秘主義の文献で一般的にターリカと同じ意味で用いられています。さらに、アッラーに到達する道が「星の数ほど」あること、あるいは「被造物の呼吸の数ほど」あることが示されています。ターリカに相当するターイファという語も用いられています。ペルシア語で「道、習慣、法、宗教」という意味になる「ラーフ」も、オスマントルコ語の文献で「道、やり方」という意味と並び、ターリカという意味でも使われています。

タクウィーン(創造されるというアッラーの特性)：辞書では「成ること、現れること」という意味になるカウン(キヤーン)という語根から派生しているタクウィーンは、「形成させること、存在させること、創造すること」という意味です。アッラーの主性について用いられる場合には、「その存在に始点がないお方」を意味します。「アッラーは正しく散られるお方である」「アッラーの特性の一つである無から創造される」、ということを表現します。クルアーンではタクウィ

ーンの語は用いられていませんが、多くの章句でカウンという語根から派生した動詞が、アッラーが物事と事象を無から創造したことを示しています。

タルフィーク(統合する)：辞書では「統合する」という意味になるタルフィークは、用語としては異なるルートから来る、及び異なる言葉で伝承されるハディースのルートや文献を統合することを示します。これを「伝承の統合」とも呼びます。互いに異なるように見えるハディースをまとめ、融合させることを「ハディースの統合」とも呼びます。また法学派の見解を統合する作業についてもタルフィークという語が用いられます。

墓廟：訪問される墓地です。ムスリムのうち、偉大な学者、聖人、統治者、統治者の妻、子どもたち、総督、宰相、司令官の墓の上に建造され、特に上部がドームで覆われた建物です。イスラームの偉大な人々の、上部に何もない墓も、彼らへの敬意から墓廟と呼ばれます。

ウクーバート：アラビア語のウクーバートは刑罰を意味します。イスラームがもたらす命令や禁止事項、イスラームが与える権限の範疇で、統治者が定めている規定に従わない者に与えられる制裁のことです。

イスラームの法規は信仰と行為という二つに区別されます。行為に関する規定も、基本的な法学の文献ではイバーダ、ムアーマラート、ウクーバートの三つに分類されます。刑法とは、信仰、崇拝、待遇に関連する規定に従わなかった場合、またはイスラームによって課された禁止事項に違反した場合に適用される規定を指します。これらの刑罰のうち、クルアーンの章句やハディースで定められているものを「ハード」の刑罰と呼びます。複数形は「フドゥード」です。イスラーム国家が定める刑罰は「ターズィル」の罰と呼ばれます。

ウルー ミ・イスラミーヤ：ムスリムが学ぶべき知識を「ウルーミ・イスラミーヤ」と呼び、二つに区分されます。

1. ウルー ミ・ナクリヤー
2. ウルー ミ・アクリヤー

ウルー ミ・ナクリヤー は宗教知識とも呼ばれます。宗教学者たちはこの知識を四つの源から得ています。それらは、クルアーン、ハディース、信者集団の意見の一致、そして類推です。

ワッハーブ派：ワッハーブ派はサラフィズム（サラフィー主義）を起源に持つとも言われる一方で、完全な意味では18世紀にムハンマド・ビン・アブドゥルワッハーブによって創設された、見解をハンバリー派から得ている宗教的、政治的な運動と見なされています。その出現以来、イスラーム世界に多方面で幅広い影響力を及ぼす宗教的かつ政治的運動です。その名称は、この運動の宗教的側面の礎を築いたムハンマド・ビン・アブドゥルワッハーブから得ており、この名称は運動以外の宗教的環境において、科学的、政治的分野においても広く用いられています。イスラームの歴史を通して類似する多くの思想が生じたにもかかわらず、ワッハーブ派ほどに容易に広がり、政治的次元を獲得した思想運動はありませんでした。このことには、ワッハーブ派が遊牧民の生き方への見解に適い、当時特にナジド地区の遊牧民の間で、無知やビドゥア、迷信が非常に広まっていたことの影響が大きくあります。

ユダヤ教：イブラーヒームの伝統につながる、一神教の宗教群に含まれ、その中でも最も古いものです。ユダヤ教は広がりや影響力の観点から世界宗教の特徴を備えつつも、内部活力の観点から民族的、普遍的な要素を持ち、信仰体系という意味で一つの宗教である以上に、ライフスタイルで宗教的、民族的アイデンティティを示しています。同じ

宗教的伝統（サーミー・イブラーヒムの伝統）に属するために、キリスト教とイスラーム教との共通の聖地や相互の影響がみられる同じ歴史上の経験を持つユダヤ教は、多くの神学的、倫理的、実践的なルールにおいて、これらの宗教と類似性を示しています。

ザカート：ザカートは、宗教上の「豊かさ」の基準と見なされている量(ニサーブ)の財産を持つ人が、アッラーのご満悦のため、特定の人に支払うべき一定の額を示します。ザカートが義務となるための条件は、財産がニサーブに到達する一方で、増えるものであること、それを所有した時から1か月が経過していること、1年分の借金や基本的なニーズを上回っていることです。